『此翁は妾の子供でございます、妾は昔伯父の伯山市から神藥を授かり、此の子にも服めと申したのに肯きませんで、此の通りいくぢなく老衰して了ひました、妾に伴いて歩けないものですから、今折檻をして居たので御座います。』

合塗國去二王都一七萬里。人皆服二鳥獸鷄犬一。皆使二能言一。
林屋洞爲二左神幽虛之天一。卽天后眞君之便闕。中有二白紫
芝泉一。皆此洞所レ出。乃神仙之飲餌。非二常人之所一能得レ之。

（述異記）

荀子訓（齊の人）

秦が天下の武器を沒收して之を鎔かして十二の銅像を鑄た。重さ各十二萬斤、之を金人と稱して咸陽宮前に樹てた。漢の四百年を經て若干は錢に鑄られ、殘つた兩個を魏の文帝が其の都に遷しかけ、程遠からぬ長安城の霸城まで運んだが、餘り重いので共のまゝ道側にほつたらかして了つた。荒涼たる黃土の原上に橫たはつた金人の周圍はいつしか荊が生じて來た。土氣に浸されて次第に鏽びの色が深くなつた。

口や鼻や耳の穴から、兎や鼠や、ちよろ〳〵出入りをしてゐる。

或日の夕ぐれ。此の金人の傍に二人の老翁が立つてゐた、なつかしさうに一人の老翁は、金人の額を摩で、

「此れの鑄られるを見たのも此の間の樣であつたが、そろ〳〵五百年ぢやの。」

『夢の樣ぢや、六國を滅して、もう天下は一姓、再び戰血を見ることはないと、えらい勢ひで此れの鑄造を、したのぢやつたがな、人間に欲火の消えぬうちは心に和平のあ

荒草に橫はる金人

金人の舊知傍に哭く

百姓の惨苦

らう筈はないわい。獣の寄り集りぢや、いがみあふのが當然ぢや、此頃はまた王者といふのが方々に居て吼え立てゝ居るさうぢやな、可愛さうなは百姓共ぢや、一頃より餘程數が減つた樣ぢや。』

『武帝の時六千萬に上つた民口が今十分一もあらうか、何處に行つても生きた者より野原に暴されてゐる骸骨の數が多い。』

偽求道者の續出

『天運はまだ、太平が來さうもない、二三百年も續くぢやらう。』

『時に、求道者が多くなつて來たではないか。』

『殖えて來た、が、桝目は殖えてもしひなだらけで益もない。働かずに、食はずに、餓ゑずに、長生がしたいといふ懶惰漢が仙道修行ぢや。』

帝都となつた土地の不仕合せ

『いや、さうばかり蔑なされぬ。强きもの、盗むものが世にさかえて、正しきものは虐げられる、世をば果敢なむも弱きゆゑとのみはいはれまい。利害は鬼もあれ、悪濁に染むのが忍ばれぬといふ潔癖の多涙漢もある。今の世を脱れようといふものが日に增して多くある筈。あゝ日が落ちた、あの西天の佛に歸依する者も少くないさうぢや。』

『おゝ燐火が見える。僅か四五百年の間も此邊に死んで祀らぬ鬼となつた者が……秦、漢、以來帝都となつたは此の土地の不幸であつた、何ぞと云へば爭奪の巷となつて戰馬に踐みにじられ、腥血の絶ゆる時が無かつたと言つてもよい。あら、夥しい鬼火ぢや父母を喚ぶのか、妻子を求めるのか、永劫に迷ふものゝ數ばかり殖えて、世は彌が上に陰慘の氣が漲つて來るわい。吾等も、もはや昇天しようか。』

『いや、此の慘澹の氣を拂つて淸朗澄徹の仙境を地上に開かせいでか。』

『おゝ勇猛の大誓願！　玉皇上帝、太上老君、東王公、西王母、一切神靈十萬仙官、この誓願を成らしめたまへ。』

追付けぬ驢車の早さ

長安城東の荒草の中に横はつてゐる金人を撫して、四百年前其の鑄造當時の回想など話してゐた老翁は、仙人の蓟子訓と共の仙友であつた。

折しも馬蹄の音が近づいたので、老翁たちは話をやめて驢車に乘つて立去つた。昔から人の見覺えて居る風がはりの驢車なので、夜目にもそれと悟つたと見え、

『蓟先生、お待ち下さい、お伴致します。』

と聲をかけて、馬を飛ばせて追つつかうとしたけれども、よぼ〳〵の驢馬が挽いて行

蘐子訓の年齢

く車と、だん〳〵遠く離れて、先生の姿を見失つて了つた。

蘐子訓の齢は誰も測ることが出來なかつた。百歳を出た老人があつたが、其老人の子供の時に會稽地方で藥を賣つてゐた蘐先生は、やはり今ぐらゐの年輩であつたといふ。

腐つた驢馬の更生

先生の驢車も有名なもので、曾て滎陽城に入つて人の家に立寄つた處が、門前に停めて居た驢馬が倒れて死んだ、とかうする內腐り始めて蛆が流れ出した。門番から報告があつたので、主人があわてゝ先生にさう言つた。『さうですか』と落付き拂つて、起ちもせず、悠々と馳走をたべてしまつて、やつと出掛けて來た、驢馬の側に近いて、持つてる杖を伸ばして、こつ〳〵と驢馬の頭をたゝくと、忽ち起き上つて、何事も無かつた樣に飼料を咬みはじめた。

誤つて隣家の子を死す

其より前、後漢の獻帝の頃、蘐子訓は山東地方に在つて、濟陰の宛句といふ所に住つてゐたことがある。種々の神異を現はして近傍の尊敬を得て居つた。或る日隣家の嬰兒を抱いてあやしてゐるうち、ふと手を消らし、地に墮ちて死んで了つた。其の父母が驚き哀むことは言ふまでも無い、はたの見る眼も忍びぬほどであつたが、蘐子訓はさして氣の毒な顏もせず、たゞ一通り過失の段をわびるまでゞあつた。屍體を埋葬して一月ばかり經つたが、子訓が嬰兒を抱いて隣家にやつて來た。父母は驚くより恐れて、『死んだものは致し方が無い、もうあきらめて居るのに、其んなものを伴れて來ては迷惑だ』と言ふ。子供は父母の聲を聞き、抱かれたいので手を伸ばした、さすがに母親は之を見ておもはず抱き取つて、見ると正しく我が子で、元氣なのであつた。父親は尙ほ半信半疑、急いで墓場に往つて、棺を開いて見た。屍體は無くて衣物ばかりであつた。此の子は無事に成長した。

子訓の懷かしら手を伸した我兒

對談者は白髮が黑くなる

子訓がまだ田舍に居た頃、髮鬚の白い老人等が、子訓と對坐談話することがあると、誰も其翌朝は白髮が眞黑くなつてゐた。此が評判になつて都に聞え、貴顯富豪の人々が何とかして、寸時なりとも面會對話をしてほしいと、つてを求めるけれども、其れが容易に得られないのに困つた。一年少大學生が子訓の隣にゐてやゝ親しくしてゐた。そこで、有力者たちが相計つて此の少年利用に取りかゝつた、學校關係から此の學生を呼寄せた。『君は試驗の勉强をして居るが、其より榮達の捷徑がある、自分たちの家に蘐先生をよこしてくれたら、吾等總掛りでどんな有力な推薦もする、後援もする、保證もする、骨を折らずに忽ち出世が出來るぢやないか。』と言つた。

大學生は廻し者

半日に二千里の旅

大學生は堅く約束を定めて歸つた。爾來、子訓に事へることに全力を盡し、灑掃もする、使ひ走りも辨ずる、柔順忠實な從僕の如くして數百日を辛抱した。子訓はとつくに書生の意中が讀めて居たが、『君は道を學ばうといふのでもなく、どうして俺にさう善く事へるのぢや』と訊ねて見た。書生はまだ實情を述べかねたから、子訓は『本當を言つたがよい、俺は判つてる、貴顯富豪の人たちが俺に會ひたいのぢやらう。俺が一度行つてやつたため、君が出世が出來て父母親族に安心をさせることであれば、俺は少しも勞を厭ひはせぬのぢやぞ、さア先に都に行きなさい、俺はあとから立つ、何月何日には都に着くよ。』と言つてくれたので、書生は天にも登る喜びで直に上京し、曩に賴まれた貴紳の方々に、何日にはいよ〳〵蘐子訓先生が着京致しますと觸れまはつた。

蘐子訓が着京の日はもう迫つたのに、一向出發の樣子もない。事情を明かされてゐる書生の父母が心配し出した。若し先生が日を忘れてゐるのなら、息子は都で大失態を來すがと、恐る〳〵子訓の處に伺ひに出た。『大丈夫お前の子供の出世を取外させはせぬよ』子訓は、其日出立してたゞ半日に二千里を往つて約束の場所に到着した、驚喜迎拜する書生に、

二十三軒を同一時間に訪問

棺に遺した片方の履

『さア、何處々々ぢや俺に會ひたいといふのは。』

『其れが多いので御氣の毒で御座います、一々御越しを願つては大變ですから、先生の御在の場所を定めて、先方から集らせる事に致しませう。』

『なに何千里とわざ〳〵來る位だ、都の內での少距離を苦にすることは無い。一々希望者の住所を俺に知らせなさい、そして先方には明日中に俺から出向くから、他の客を斷つて待つて居るやうに通じて置きなさい。』

諸貴紳の家では、いづれも當日は他の一切の用事來客を斷り、專ら蘐子訓を待設けて室內の掃除萬端の準備を整へた。果して蘐子訓がやつて來て、思ひ〳〵の對談をすることが出來た。其れが二十三軒もであつたのに、どの家にも同じ時刻に一人づゝ子訓が見えて、其容貌服裝もすべて同一であつた。ただ異つたのは談話で、其れは各家の主人の問に依つて答が一樣でなかつたのは當然である。此事忽ち洽く都中に喧傳され蘐子訓の神變不可思議に驚かぬものは無かつた。

最終の奇蹟は、陳公の家に子訓が往つて、『明日俺は行かねばならぬ』と言つた、『遠方ですか近所ですか』と訊ねた。『いや、もう還つて來ないのだ』といふから、陳公は餞

別に葛布の單衣を贈つた。翌日子訓は屍體となつて横はつて居た。五香の芳芬が戸外までにほつてゐる、棺に納めたが、まだ家から運び出さぬ中、棺内に雷霆の如き響が起つて強烈なる光りがした。居合せた人は思はず俯伏してしまつた。やゝ暫くたつて棺を覗くと蓋は碎けてけし飛んで、内の屍體は亡くなつて、たゞ片方の履が殘つてゐる。そのうちに、門外に人馬の響、笛鼓の聲が起つた。やがて東の方へ往く樣であつた、其道筋の數十里が程は一月餘りも芳香が消えなかつた。

萬法卽治の蝙座療法

王遙（字は伯遂、鄱陽の人）

王遙、彼に賴めば、どんな病ひも治らぬといふことは無かつた。其の療法は神を祈るのでもなく、符水、針藥を用ゐるのでもなく、たゞ八尺ばかりの布を敷いて其上に坐らせたまゝ、何も飲ませも食はせもせずにほつておく、程なく癒えて起ち去つて了ふのであつた。

惡魔なる牢獄

惡魔か何かのたゝりに出る病氣なれば、王遙は地に畫をかいて牢獄とし、神祕な命令を發して其の惡魔や邪鬼を呼び出す、皆其れ〳〵の本形をあらはして來るのを、獄内に收めて、狐狸や鼈や蛇の類であれば直ちに斬て燒いて了ふ、それで病者が皆癒る。

不思議の竹籠

王遙に五六寸許の竹籠があつた、錢といふ弟子は數十年隨從してゐたが、一度も先生が其籠を開くのを見たことが無かつた。一夜、大雨で眞闇だつた、王遙は錢に此の籠を擔はせ雨を冒して共に出掛けた、雨は降りしきるが一向濡れない、其の道筋は曾て通つたことの無いところであつた。何か知れない二個の大きな灯が前に立つて行く、ほゞ三十里許も歩いたころ、小さな山の上に着いて、石室の中にはいつて去つた。

濡れない雨

石室の内には二人居た、王遙は錢が擔いで來た竹籠を開けた、中に五舌の竹笛が三個あつた、王は自ら其一を取り二個を室中の人にわたして、三人共に笛を吹きならした、やゝ暫くあつて、笛をやめてまた竹籠に納め、錢に擔がせて暇乞ひをした。二人は戸外に送つて出て、王遙に、

三仙客が吹笛の歡樂

『君も早く來たまへ、何だつていつまでも俗間に居るのだ。』

『あゝ今に來るよ。』と王は答へた。

百日ばかり經つてまた大雨が來た。

仙去の別を惜む妻

夜に入つて王遙はすつかり荷物の始末をはじめた。元から葛織の單衣や布巾が有つたけれども、五十年來曾て着用したことが無かつたのに、此の夜、皆取り出して身に着けた。妻は怪んで、

『妾を捨てゝ去くのですか。』と尋ねた、

『なに暫くだ。』

『錢は連れて行きますか。』

『獨りだ。』

妻は涙を流して、

『どうぞ少く待つて下さい。』と願つたけれども、遙は答へず、自ら竹籠を擔いでさつさと出かけて了つた。遂に還つて來ない。其後三十餘年、弟子が馬蹄山といふ處で遙を見かけた、顏色は前より若やいでゐたといふ、蓋し地仙なのだ。

魏伯陽

參同契の著者

神丹の動物試驗

仙丹の中毒犬の卽死

魏伯陽は南北朝時代の宋の吳郡の或る家柄の生れで、學問に深く特に神仙の道を究めて、之に關した著述もある、就中『參同契』といふのは後世、道敎の重要なる敎典に算へられる。

魏伯陽は仙道研究の末、三人の弟子を連れて山に入つて神丹を煉ることになつた、さて、首尾よく煉丹成就せりと認めたが、弟子等の道心のほどが、まだ十分見とめがつかぬので試みにかう言つた。

『いよ〳〵丹はできたが、一應犬に試驗をして見よう、丹を嘗めた犬が果して昇天をするならば、大丈夫だ、服むことにしよう。若し犬が死ぬやうだつたら吾々は服まれないのだ。』

そこで伴れてゐた白犬に丹を食はせてみると忽ちころりと死んでしまつた。伯陽は、

『おゝまだ神丹に成つて居ない、恐らく神明の意に適はぬ點があつて出來上らないのだらう、うつかり服んだら犬の樣に中毒だ、奈何したものかなア。』

伯陽が當惑の體でさう言ふと、虞といふ弟子が、

『では先生、どうなさいます。』

遂に先生も嚥んで殪る

生殘りの二弟子迷ふ

活返つた師弟犬共に昇天

『俺はもう世を脱れ家を委てゝ此の山に入つて來たのだ、仙道が成就しなかつたといつて、どう、をめ〳〵、故郷に還られうぞ、死んでも管はぬ服んでしまふ。』

言ひもあへず、其の丹藥を口に入れて嚥み下した、すぐさまバタリと打倒れて息が絶えた、はかないものだ。弟子達は顔見合はせて、途方にくれてゐたが其の中の一人は

『先生は非常の偉い方だつた。僕は是迄信じ奉つて來た、其の先生が見す〳〵此丹を服んで死なれるといふ、此れには何か意味がなければならぬ。ウム、俺は服む。』

決然として丹を取つてぐつと嚥み下した。此の弟子も見る〳〵死んでしまつた。殘る二人の弟子は相談を始めた。

『丹を煉つたり、服んだりするのは長生がしたいからだ。今服んで直ぐ死ぬるのは馬鹿〳〵しい。此さへ服まなきやお互、若い、まだ世の中に生きて居られるではないか。』

『さうだ〳〵、まだ何十年もある命だ、丹を服んで今捨てるといふ馬鹿は無い。』

そこで、二人はこそ〳〵山を出て了つた。そして先生や相弟子のために棺を買つたり何か葬式の準備に掛るのであつた。

二人の弟子が見えなくなると、起き上つて塵打拂つた伯陽先生、殘りの丹を摘んで死んでる者の口に入れてやつた。弟子も白犬もひよつこり起き上つてけろりかんとしてゐる。伯陽は手紙を書き山に來てゐる樵夫を捜して、郷里へ――めでたく仙人になつた知らせをして、弟子と犬と共に天に昇り去つた、

殘つた二人の弟子が、信念の足りなかつたことを愧ぢ悔み、悲んだことは申すまでもない。

李司倉の希望

王老

西京に何代前からか變らずに藥を賣つて居る王老といふ男があつた。市外勝業里に住む李司倉といふ人が、王老は術士に相違ないと考へて、十分に尊敬を加へたので、王老も折々李の家に厄介になつた。かれこれ十年も經つて後李は『弟子になりたい』と云ひ出した。王老も『よからう』といふので、馬丁や下男數人を引連れ、兩人騎馬で百里ばかり往つた處が、急に嶮しい山際へ突當り、直上數里の間は、藤蔓に捉まり樹の根を傳うて登るやうな懸崖である。人間の往來する處でない。王老は『君と二人でさへ、仙境

仙境の風光

までは難しいと想ふのだ、馬丁や下男は、迎もだめだから還せ』と云ふ。李は言はれる通りにして、漸く山頂まで來て見ると、其處は廣々と眼界が開け、見渡す限りの田畑もあり、藥畑の傍にはチョ／＼と美しい泉も流れて居る。誠に絶景であつた。とある森へ着くと、數人の道士が出迎ひして、『御客樣も御一緒といふ事でしたから御迎へに參りました』といつて大層慇懃である。跟いて行つて見ると、住居は茅屋根に竹の柱誠に瀟洒したもので、中には數十人の學生が居た。大そう歡待して呉れ、『御親戚ですか？』といふものもあり、默つて居るものもあり、氣の毒さうに『生憎先生が留守でして……マア暫く御緩くりなさるやうに』など云つて呉れる。飯が出る副食が出る。李に出して呉れた馳走は少しも人間と異はない。

人間並の飯を饗應

四五日目のことであつた。五色の雲が低く大地を棚引き籠めたと思ふと、三百羽の鶴が雲に隨つて舞下る。内からは學生共が駈け出して恭しく出迎へをした、先生がお出になつたのだつた。雲の上から降りて來た鶴髪素髯の一老人がそれだつた。王老は李と連立ち道の傍に出迎へして居ると、先生は王老に『何で人間を此處へ連れて來たのか』と眉に八字を寄せた。

三百の白鶴を率ゐて先生歸る

鶴の大合奏

一同の者は拜謁が畢り、それ／＼の部屋へ引取つたので、李もある部屋へ引取つたが大層暑苦しい、水浴でもしようと部屋を出て、一丁ばかり來ると、山水の池があつた、見ると數十羽の白鶴が下りて、石の上に整然と行列し、軈て嘹喨たる奏樂が始まつた。到底人間界の諧調の及ぶべき處ではない。李は恍惚として、そこに突伏してその妙音を聞いて居たが、樂も畢り、鶴群も去つてから、竊に恐ろしくなつた。先生の前へ出て、『私は奏樂を拜聽しましたが、これは仙官の御規則に觸れるやうなことはありますまいか』恐る々々伺ふと『差閊はない』といふことであつた。そこで先生の言はれるには、『そなたは官祿に就く筈の身だから、まだ此處に住はせられぬのぢや、そのうち仕官を畢つて復たお出なされ』といつた。

致仕の後に又來い

先生の命に依り王老が山の入口まで送つて來て、『山で牛二頭要ると言うたから、李は跡で二頭の牛を買つて、彼の藤蔓の下まで送つてやつたが、もう其の時は上の路は分らなくなつてゐた。

牛二頭を贈る

幸　靈（晉の時、江西の建昌の人）

萬物各其意を滿たさゞるべからず

幸靈は何事にも逆らはず、言少なに默つてばかりゐるので近隣の者に莫伽にされ、父兄も亦た莫伽だと言つてゐた。稻田の番をさせられたが、牛が田に入つて來て稻を食ふのに、ぢつと視てゐて追ひもせず、思ふさま食つて牛が出て行くのを待つて、其跡の蹂躪された稻を起し鄭寧に手を入れるのであつた。父が叱りつけると靈は平氣でかういふ。

『萬物、天地の間に生れて各々其意を得なければなりませぬ、牛が稻が食べたかつたら食べさせるのが當り前でせう。』

『莫伽！　そんなら何故あとの稻を手入するのだ。』

『稻はまた育ちたいのですからな。』

幸靈は後、種々不思議の力を現はして世の人を救うた。

王中倫

巖上白衣の眞人

高唐縣の鳴石山の巖は高さ百仞許ある。扣けば清越な音がする。晉の太康年間、田宣といふ人が此の山下に隱棲し、其の巖のほとりを逍遙しては、巖をたゝいて其の音を聽くのを樂みとしてゐると、近頃白單衣を着た人が其の巖の上に出て徘徊するのであつた。奇態なこともあるものと思つて、こんど、人に巖を敲かせて自分は巖の上に潛れて伺つて居た。やがて巖の音が始まると例の白衣の人が現はれた、突嗟に出て其の人の袂を執へてどうした人かと訊ねて見た。其人のいふには、自分は王中倫といふ者で、周の宣王の時少室山に入つて仙道を修めたものだが、此度東海の方壺山に赴く途中、此處を通りがゝつて此の石の音が氣に入つて少時滯留して居たところだといふのであつた。田宣は大に歡んで、此の仙人に長生の法を乞ひ求めた、仙人は雀の卵ほどの石を一個給れて、すうと空中に騰り百歩ばかりも離れると、あとは烟霧に掩はれて見えなくなつた。

田宣は一度此の石を含むと、百日ぐらゐは飢をおぼえなかつた。

翟天師

指に從つて月中に金殿玉樓仙女の逍遙を見る

翟天師は大きな男で掌の長さが一尺もあつた。嘗て夔州の街に入つて『今夕八人が此處を通るぞ、氣を附けい』と觸れまはつたが、誰も何の事か解らなかつた。其晩大火事があつた。八人は火の字であつたのだ。翟天師が山に入るときは虎の群が附いてあるいた。或る時水邊で弟子數十人と月觀をしてゐたが、一人が『彼の月の中に何が有るんだらう』といふと、翟は笑つて『俺の指す所を見い』と言つた。二人の弟子が先生の指さす所を見ると月の内に金殿玉樓が粲爛として、仙女が其の間に逍遙する樣が、あり〳〵と見えた、あゝと感嘆の聲を發すると、もう消えてしまうた。

師を凌ぐ陽狂の道力

翟天師の晩年の弟子、陽狂は俗に灰袋と呼ばれてゐた。『此男を莫伽にしてはならぬぞ、俺も及ばぬのぢやぞ』と、先生は外の弟子共に戒めてゐた。嘗て大雪の暮方單褐をきて青城山に往き、或る寺に宿を乞うたところ、僧は『貧乏で客用の夜具が無いから此の寒さは凌がれまい』と斷つた。『なに、寢る處さへあれば澤山です』と言つて泊めて貰つた。夜半風が吹いて寒さが酷くなつた。主の僧はあまり靜かだから、もしか凍え死はせぬかと氣遣つて覗きに往つた。寢床の數尺前からほつほとして蒸すやうだ、客は胸をひろげて大汗で眠つてゐた。

烈火上に座して衣を燒かず

葛　玄（吳郡の人）

符に從つて舟が激流を遡ぼる

葛仙翁、名は玄、字は孝元、左慈が吳郡に居る頃、其の敎を受けて九丹金液仙經を得た。其仙方は實施せずして、常に朮（藥名）をのみ服して居た。治病に長じ、能く鬼魅の形が見え、其れを放逐し捕殺する能力を有してゐた。食を絶てども餓ゑず、烈火に坐して衣も燒けない。甚しく酒を愛して一斛も飲むことがある、大醉すれば深泉淵中に臥し、醒めて水から出づるのに濕つてもゐなかつた。博學多識、談論に長じ、好事の青年數十人が常につきまとうてゐた。曾て舟行の時葛玄が符を記した札を數十枚携つて居るのを見て、

『符はどんな驗があるものか拜見出來ませぬか。』

洗濯中の少女を走らす

死魚蘇つて墨書を吐く

玄がすぐ一符を取つて江中に投ずると、船は流れにさからつて上り始めた『奇態だ』と皆が驚く。更に一符を投じた、船は忽ちぴたりと停つた、江面には、始の符が下り、後の符が上り行合つて一處になつた、玄は徐かに其を取り收めた。

江岸に衣洗ふ女がゐる、玄は、

『どうだ、あの女を走らせて見ようか。』

青年等が喜んで『どうぞ』といふ。玄は符を投げた、女は驚いて駈け出だし、止處なくどん〳〵走りつゞける。『停めよう』と、符を投ずれば、女は元へ還つて來る。『何が怖くて逃げ出したのだ』と一人が往つて問うてみた、女は『何故だか自分にも分りませんの。』

水邊で魚を賣つてゐる者があつた。玄は其を呼びかけて『其の魚を河伯(河の神)の處まで使にやつてくれないか。』魚賣りは『死んでますよ、だめでせう。』『かまはん〳〵。』といふと、魚をよこした。玄は朱で書いた紙を魚の腹に置いて、水にほうり込んだ、魚は沈んだ。少時經つて盛んな勢ひで岸に撥ね上つて、墨書を吐いた、河伯よりの返事である。

口から火の御龍走を吐く

飯粒變じて蜂となる

萬物踊狂ふ

道士化けの皮を剝がる

玄の家に客が訪れた。玄が自ら出でゝ客を引いて廳に往つた。其處にも一個玄が居て客と話の最中であつた。更に續々客が來る、一々別の玄が出て迎へるのであつた。客が坐に滿つた。玄は『今日の寒さに、貧乏で、別々に火鉢を差出す用意がありませぬ、御一緒に致しませう。』と斷つて、口をあいて、ぷうと吐くと赫然たる火が燃える、其があまり熱くもなく、一同、春の日南に居る快さであつた

食事が畢つたとき、客が『何か不思議を示してくれ』と願つた。玄はまだ口中に飯があつた、其の儘水を啣んで漱ぎ、庭に向つて噴き出す、飯粒が蜂となつて、亂れ飛び、客の頭や手にとまるのもあつたが、敢へて螫しもしなかつた。玄が復た口を張る、蜂は悉く口中に飛び込んで元の飯粒に還る、玄は平氣で嚥み下すのであつた。

玄が足拍子を取つて床を叩くと、蟲でも鳥でも、そこらに居るものが、拍子につれて皆踊る、拍子が止めば踊もやむ。

數十文の錢を井戸の中に投げ込ませておいて、容器を手にして、玄が井戸を覗きながら錢來々々と呼べば、皆飛上つて器の中に入る。

治療の妙手と觸れて一道士が、都の方から吳に入つて來た。自分は數百歳だとほらを

吹いてゐた。誰も疑つてはゐたが、しかたが無かつた。偶々多勢會合の席に、道士も玄も居合せた。玄は傍らの人に『此の爺の年が知りたくはないか』といふと、『是非知りたいものだ』と勇む。玄は『善し』と言つた。忽然として天上から人が降りて來た、一座は眼をそばだてた。やがて地に着いた、朱衣高冠の氣高い姿である、ずか〳〵と道士の前に進んで『天帝の勅問なるぞ、汝の齢は幾何なりや、人を欺くこと有るべからず』と嚴めしく詰責した。道士は色を失つて『恐入りました、實は七十三歳で御座りまする』地に伏して戰慄いてゐる。玄は手をたゝいて大笑した。忽然として朱衣の人は消えて了つた。道士は面目なくこそ〳〵と退席つて、其日江を渡つて北へ逃れた。

城外沛然たる驟雨

或日吳帝と宮中の一樓より城外を眺望して居ると、百姓共が雨請祀りに騷いでゐた、帝は人民が雨に困つてゐる、何とかして降らせられぬものか』と仰せられた。『其は容易で御座います』と玄は直に符を書いた。見る〳〵天地晦冥、急電轟々、注ぐが如く大雨降りしきつて、宮園の中も尺餘の水が湛へるほどであつた。帝は大に喜んで、玄を勞ひ且つ『此の水には魚も居まい。』と言はれると、玄は又た符を庭潦に擲つた、數百尾の大魚小魚が潑溂として躍つた。『でも、是は食はれまい』と仰があつたので、捕へて料理させると皆眞の魚であつた。

水底で伍子胥の饗宴

帝に從つて舟行の際、大風に遇うて百官の舟には破壞覆沒もあつた、玄の乘船も沈沒して所在が判らなくなつた。帝は『葛公ほどの神術があつても免れられなかつたのか』と嘆惜せられ、四望山に御座を設け搜索を視て居られた。一夜を過ぎて、のつそり葛玄は歸つて來た、酒氣さへ帶びて居るのである。帝に謝して、『昨日は御供に加はつて居りながら、水底に沈みますと、伍子胥が强ひて牽き止めますので、振りきつて歸ることが出來ず、滯留を致し、叡慮を煩し奉りまして甚だ恐懼に堪へませぬ。』

樹幹から湧く醇酒

玄が野外をあるくとき、卒然知邊などに逢ふことがあれば、道側の樹蔭に立寄つて、草の折れなどで樹を突き刺し、杯をすけてゐると汁が湧いて出る、飲めば結構な酒、其を酌みかはすのが例となつてゐた。肴には手當り次第の土石草木を侑めるが、口に入るれば皆うまい鹿脯であつた。

大道で變死

或人が玄を請待に來た。玄は往きたくなかつた、强ひて請はれるので、いや〳〵ながら隨いて出たが、少し歩くと腹が痛むと立停つた、地に横たはつた、間もなく息が斷れてしまつた。手を取つて引起さうとすると手が脫け、足を引けば足が斷れる、とかくす

るうち、腐る、蛆が湧く、どうすることも出來ない。請待者はあわて切つて玄の家に報せに走つた。なんだ！　玄は、ちやんと堂に居た。走つて屍體の場所に還つて見ると、もう何も無い。

玄が人と同行するとき、彼我共に地上三四尺離れた空を歩くことがあつた。

玄が會稽に居たときのことである。一船が中部地方から發して某神廟の前を通過しかかると、廟の神が神官をして、其の船主に、『葛公宛一封の書信を托したい、屆けてくれい。』と言はせ、神官が書簡入りの函を擲げると、船の頭に釘付けの樣になつて外れなかつた。其のまゝにして、船が會稽に到着して葛玄に報せた、玄が躬から往つて取ればすぐに外れるのであつた。

遂に尸解の術を執る

弟子の張大言に『わしは天子に無理に引留められて大藥（仙人となる藥）を作るに遑がない。今は尸解するの外は無い、八月十三日日中と定めておく』と言つて、其の期に至ると、葛玄は衣冠を整へ室に臥して直ちに呼吸が絶えた。顏色は生時と毫も變らない。弟子たちは香を焚いて之を守つてゐた、三日目の夜半、忽ち大風が起つて屋も搖れ撼き、吹き込む風に燭も皆滅えてしまつた。玄の遺骸は無くなつた、衣服は元のまゝで帶も解けてはゐなかつた。夜が明けて見ると大風は玄の家ばかりの事で、庭の樹木まで折れてゐるのに隣家はまるで風を知らなかつたといふ。

劉晨、阮肇

漢の永平年間、劉晨と阮肇とは天台山に藥採りに入つたが、路に迷うて十日ばかりもあちらこちら彷徨うて、飢ゑ疲れてしまつた。不圖桃が生つてゐるのを見つけて、したゝか喫べて、二人はやつと氣力を恢復した。溪へ降りて水を掬んでゐると、葉が流れて來た。次に大きな盃が流れて來て其れには胡麻飯が入つてゐる。

胡麻飯が流れて來る

『やア此れは人家が近いぞ。』と二人は歡喜の聲を揚げて、傍の山に駈け上つた。見渡せば、麓に人里らしい處がある、林の間をたどつて行くと、溪の流れに美しい女が二人洗濯をしてゐた。二人が盃を携へてゐるのを見て『劉郎、阮郎お盃を捉つて來ましたネ』と笑つた。

二人の女は恰も舊識の如くに、何の隔てもわだかまりもなく、無邪氣に親しく物を言

一見舊知の如し

て『どうして此んなに遲くなりましたの』などゝさゞめきながら、家へ連れて往くのであつた。屋の内は全體華麗に裝飾されて羅の帳などが懸つた二女の室が東と南に別々になつてゐた。子婢が出て來て食卓の準備をした、席に就いて見ると胡麻飯があつた、其外結構な脯、果物など、さま〳〵の美味が供へられてあつた。酒も名は知れぬが香ばしいのが注がれた。やゝ微醉うて來たころ、どや〳〵一群の女が押込んで來て、『おめでたう〳〵』里の娘たちが桃の實など澤山に持つてお祝ひに來たのであつた、皆で酒を飲んで夜半まで樂など奏して別れて去つた。劉と阮とは花聟になつて、夢の樣な樂しい日を送つた。

花聟速成

半歲と思つたのが七代

半歲ばかり過ぎた。氣候はいつも同じ暖かさで、草木は青々として禽が好く鳴いた。二人は何となく故郷の春が想ひ出されてならぬ、言ひにくさうにしてゐると二人の女は、『罪根がまだ盡きないのだわ、それで歸りたがるのよ』出立の支度を整へてやつて、二女は溪の口まで送つて名殘を惜んだ。

劉、阮は敎へられた路をさして、歩き出すと間もなくひよつくり故郷に歸りついたものゝ、すつかり樣子が變つて、七代も經つてゐたのには困つてしまつた。知つた人はなしどうすることもならず、再び天台山に取つて還し、女の家を搜すのであつたが、どうしてもわからなかつた。晉の太康八年の事である。

註(一) 劉、阮は其後登仙したと傳へらる。
(二) 此の話と類似の仙境談は歷代續出してゐる。
(三) 天台山は浙江省天台縣の北に在り、仙靈嶺山脈の一支にして赤城山と連なる、此邊勝景に富み、仙靈の窟宅と稱せらる、今も山中諸處に修道者が多い。

玉女山の仙窟

蓬球

晉の泰始といつた年號の頃、北海の蓬球字は伯堅といふ男が、山東貝丘の西、玉女山に木を伐りに行くと、大そう良い香がするので、段々香の來る方へ辿つて行つた。山上は見渡す限りからつとしてその中に立派な金殿樓閣が建ち並びさも廣々とした坐敷なども見える。門の中へ入り、五本の玉樹の下をずん〳〵通つて行くと、ある一つの宮殿内で絶世の美人が四人でパチパチと碁を打つて居たが、吃驚して起ち上り、『蓬君あなたは

仙女の圍碁彈琴

何しにお出ですか？』と尖り聲で咎めた。球は『香を慕りて參つたものです』とさり氣なく答へたので、美人達はそのまま碁の方に向つた。

其内の若いのが樓へ上つて琴を彈いた。碁を打つてゐた一人が呼んで『元暉お前はなぜ一人でそこへ登るんです』と云つた。球は木立の下に居たが、少し空腹を覺えたので、そこの木立の葉末の露を舐めて居ると、突然何處からか一人の女が鶴に乘つて來て、大そう腹を立て『玉華お前達はなぜこの俗人を入れたのか。』と大變な權幕で、王方平といふものに全部の仙室を點檢させると、ふ大騒ぎになつた。

球は怖しくなつたので早々門外へ飛出し振返つて見ると、そこには金殿玉樓も美人も何もなかつた。家へ歸つて見た處が百年許も過ぎて居た、自分の居た町も屋敷も皆跡方もなく、墓場ばかりになつて居た。

採藥民

或る男が蜀の青城山中に於て山薯を掘つてゐた、掘つても〳〵根が深い、だん〳〵大きくなる、二三丈掘つた頃には甕の樣に太かつた、其でまだ終にならない。何までも掘り盡してやらうと精を出して、とう〳〵五六丈も掘り深めると、どたんと地が陷沒して了つた。

偉大なる山の薯

山薯掘の男は幸に怪我もしなかつた。上を仰いで視ると穴の口が星の樣に小さい、餘ツ程深く地の底に墜ちたことが判る。此れは到底死ぬより外はないと落膽した。家の事や何か種々考へて悲　でゐたが、時が經つうち、ふと傍に穴が一つあるのを見つけた。恐々入ると漸次に大きくなつてゐる、匍匐して進んで行くと、向ふが明くなつた、勇氣が加はつて、また三四町も進んだ頃、穴が高まつて歩行が出來る樣になつた。とう〳〵一の洞穴の口に出た。

洞穴の奥の村落

洞の前には流れがあつて、對岸は村落だ、人家が見え、田畑もある、樹々に花が咲いて二三月の光景である。人も通る、男女の衣服が世間とは違つてゐる、古代の風俗なのであらう。農夫や漁翁らしいのも通つた。其の中の一人が不思議さうに洞の方を視て、『何處から來たのか。』と川越しに問うたので、薯掘の男は喜んで緣由を語つた。親切に小舟を廻して來たので對岸に渡つた。其人の家に連れ行かれたが、人々は珍しがつて胡

麻飯、柏子湯其他の食物を與へ、其の外不自由なきやういろ〳〵世話をしてくれた、數日經つて、薯掘男は大層體が輕くなつて來るやうに感じた。主人に對し『此處は何といふ處です、蜀へ還られるものでせうか。』と尋ねて見た。主人も家族も皆笑つて『君は俗界の人で、此の仙境を聞いたこともないであらう、此處に來ることが出來たのは君に命運が有つたのだ、まア留まるが可い、今に玉皇に謁見を願つてやらう。』と言つた。

上巳の祝日に玉皇拜謁

其の翌日は上巳の祝日だつたので、宿の主人は此の男も伴れて拜謁に赴くことにした。村の人々は雲に乘つたり、龍や鶴に駕つたりして行く、此の男も共れに雜つて雲の中を歩くのであつた。須臾して一城に到着した。

城内の建物は皆大きく立派で、中にも宮闕は金碧で飾られた壯嚴なものであつた。此男は門外に殘され、他の人々は順々に宮中に往つて、拜謁をすませては出て來るのであつた。宮門の側に一の大きい赤毛の異形な牛がゐる。宿の主人は此の男に、牛を禮拜して仙道を乞ひ求めよといつた。そして『牛が寶物を吐いたら直ぐ取つて呑んで了へ』と教へた。男は言はれるまゝ牛を拜んで乞ひ願つた。やがて、牛は赤珠の徑一寸ほどなのを吐き出した、共れを手に受けようとするとたん、横合から赤衣の童子が飛び出して赤

赤牛禮拜

寶珠の横取

珠を取つて去つてしまつた。男は更に牛に願つて、此度は青珠が出たのを、又もや青衣の童子に攫はれた、次に黃珠、白珠と出たのをも、皆同じやうに他に奪られたので、男も考へた。手を牛の口にあてゝゐて、取るや否や直に呑み下して了つた。共れは黑色の珠であつた。黑衣の童子も來たが、此はすご〳〵立去るの外なかつた。

侍女は摑み取り

主人は遂に此の男を案内して拜謁に往つた。玉皇は正殿の玉座に在つて冠劍の侍者が七人玉女が數百人左右に列び立ち、殿廷に數多の侍衛兵が警戒し、園中の奇草珍花が芳ばしい香を放つてゐる。玉皇は親ら、薯掘男に性の御下問があつた、男は事實のまゝ奉答したのであつたが、さうするうちにジロ〳〵玉女の方に眼をやつたのを、玉皇は視て取られた、『ほゝウ侍衛の者が氣に入つたのか。』と言はれ、男は恐れ入つて罪を謝した。『心を妙道に盡して修行したならば、自然此等の者を有つことが出來る、汝は未だ修行が出來て居らぬ、此れから十分勤むるが可い。』と諭して、左右に命じ玉盤に仙菓を盛つたのを男に示させ、『勝手に取れ兩手で攫めるだけ幾箇でも。其數が卽ち汝が侍女の數ぢや。』と御意があつた。男は喜んだ、見れば林檎のやうな菓物で好い香がしてゐる、十分指を擴げて掬うたら、十箇以上取られさうに思はれたが、さて、やつて見ると、唯三個

しか取れないのであつた。男は御前を退つて主人と共に前の村に歸つた。三侍女は男に賜はり、新に一家屋を給せられて同棲することになつた。尚ほ勅命に依り道に精しい人人が指導して、仙經を學ばせ、服藥用氣の術を敎へて次第に塵念を洗滌せしめ、尚ほ三侍女からも懇に道術を授けてくれた。

俄に歸心を生ず

一歲許經つと、此の男は、『おれの仙道も成就したらう』と思ふやうになつた。或る夜半突然嘆聲を漏らしたので、左右の侍女がわけを訊ねると、彼はいつた、『俺も仕合せに道を得ることが出來たが、本々此處には偶然に來たものぢや、來る時に妻は產をしたばかりであつた、家は貧乏だつたのに、あれから恁麼したらうと思ふと堪らない、一度往つて見たいものぢや。』玉女は『君が世を離れられてからもう久しい事です、君のお子さんもお母さんも亡くなられたに定つてゐます、往つても何になりませう、さう思はれるのは未だ塵念が祛れずに居るからです。』『僅か一年ばかりだ、妻はきつと達者で居よう。たゞ確かめに往くだけぢや。』男の歸心は矢の如く諫めやうはないのであつた。

仙界の別宴

玉女は此の事を近隣に告げた、隣の人々も是非がないと嗟嘆するのみであつた。つひに玉皇に聞え上げた。玉皇は歸してやれと仰せられた。諸〻の仙人達は盛んな送別の宴を催してくれた。三女もいよ〳〵別れる時が來た。各々一錠の黃金を餞別にした、『人間界に歸つたら生活の苦艱に遇はれませう、何かの用に立てゝ下さい。』と年嵩の一人は言つた。中の女は『故鄕に往つて何も無くなつてゐて、歸りたくなられたら、私の藥が此の金錠の中に入れてありますから、取り出して、それを呑めば歸られます。』年下の女は『君は塵念に侵されて、もう復た仙とはなられますまい、金錠の中の藥も役に立ちますまい。たしかに君の家はもう影もありません、砧石が在るばかりです、私は其の砧石の下に藥を置いときます、金錠の中の藥が服め無かつたら、忘れずに其石の下のを取つてお服みなさい。』しみ〴〵親切に言つてくれた。

鵠と共に空を渡る

一群の鴻鵠が飛んで來た。見送りの人達『さア此れに從いて往きなされ。』と多勢で此の男を推し擧げる、自分も浮き騰る氣合になると、苦もなく鵠の群に入つてしまつて、共のまゝ一緒に空を翔けることが出來るのであつた。振りかへつて見れば、下では皆が、三女も共々手を振つて名殘を惜む。

程なく一城に着いた。訊くと東海岸の臨海縣だといふ。故鄕の蜀までは大變な距離である。玉女に貰つた金錠の一つを旅費に遙々の旅に上つた。一年もかゝつてやう〳〵蜀に

九十餘歲の翁は孫

たどりついた。唐の高祖の武德年號の時に家を出たのだつたが、今は玄宗の開元の二十何年とかで、百餘年も經つてゐたのである。村はおほよそ昔の樣であるが、誰も見知つた顏は無い。唯一人九十餘歲の老人が、私の祖父が昔採藥に往つたまゝ行方が知れなかつたさうだといふのがあつて、悉しく話合つて見ると、其が孫に當るのであつた。舊の住居を調べて見ると、荒れ果てた藪となつて、砧ばかりが元の處に据つて居た。

俺の行先は何處だらう

男は折角歸つた詮もない、茫然となつてしまつたが、やう〳〵に金錠の一個を壞して中の藥を取り出した、呑まうとすると轉げ落ちて分らなくなつた。あわてゝ砧を引きおこして見た。一の玉盒が見付かつた、中に一粒の仙藥が入つて居た。やれ有難やと押戴いて呑み込んだ。心が漸々明かになつて來たが、併し彼は仙洞の名を聞いて居なかつたので歸ることも出來ないのに困つてしまつた。

時に羅天師が蜀に居た、男は其處に往つて前後の事を話した。其は第五洞寶仙九室之天だ。大牛は駄龍といふものだ、其の赤珠を呑めは壽、天と齊しく、青は五萬歲、黃は三萬歲白は一萬歲黑は五千歲の命を得るものだと詳細に說明をしてくれた。此の男はやつと自分の歸り先が分つたのである。間もなく姿を見せなくなつた、多分三女のもとに往つたのであらう。

仙人は石灰賣り

盧山人

唐の寶曆中、荆州に盧山人といふ者があつた。石灰賣りを渡世にして居たが、時々常人の意表に出づることをやる。異術ある人らしく思はれたので、趙元卿といふ商人が、頻りに取引をして懇意になることをつとめ、ある時、茶や菓子など饗應して『一ッ金儲けの術を敎はりたいもので』と賴むと、盧はそれを見て『金儲けを聞きたいではなからう。目的は外にあるやうだ』と圖星を指した。趙は『實は貴方は本體を隱して居られるお方と思ふのです、是非お敎を願ひまする。』と白狀した。

盧は笑つて『今しがた君の宿の主人を見たが、正午に大變な禍がある。俺の言ふ通りにすれば、禍を免れるから知らせて遣るがよい。正午まへに銀二兩餘を入れた囊を背負つた職人が來るが、決して誰も應對してはならぬ、入口を閉めて入れぬやうにせねばならぬ、正午の刻になるとその男が極端な惡口雜言を吐くから、構はず家内中で水の邊へ遁

災難の豫言的中

げるが善い。さうすれば錢三千四百文だけの費へで濟んで了ふ』と言つた。趙は其の泊つて居る張といふ家へ歸つて、これを知らせた。張も竊かに盧に畏服して居る一人だつたので、その通りに戸口を閉めて樣子を見て居ると、もう正午と思ふ頃、盧の言つたやうな奴が來た、頻りに戸を叩いて買物があると怒鳴つたが、取合はないので怒り出し、表の門を蹴たぐるのを、張は内から支へて居た。何の騷ぎかと多勢見物が聚つて來た。張は妻子を連れ裏口からそつと遁げ出した。午少し廻つた頃件の男は遂に立ち去つたが、小一町も行つたと思ふ處で、その男は突然打ち倒れ、その儘絶命して了つた。それと聞いて駈け付けたその男の女房は、泣き喚きながら、張の家へ怒號り込み、『夫を此家で殺したのだ』と誣ひた。役人も判決を付け兼ねたが、當時見物してゐた多勢の者が『張の家は初から戸を閉めて居て、後には遁げて居たのである』との證言をしたので、役人は『其方に罪はない。が、死骸始末の費用でも負擔してやれ』と仲裁した。張は喜んでそれに服し、結局棺桶や人足の費用計三千四百文で大難は遁れた。

此が評判になつて盧の家には非常に人が訪ねて來るやうになつたので、其を煩累がつて盧は蹤然と立去つた、復州へ往き、舟で秀才陸奇の宅前へ着いた。時に陸は『都へ行つて手蔓を探さうと思ふのだ見て貰ひたい』と相談を持ちかけた。盧は『今年は動かぬが善い。禍が目の前に在る。君の家の後に錢が一瓶、板を覆せて埋めてあるが、それは君の所有ではない。錢の主は今年三歳のものだ。君は斷じて一錢も使つてはならぬ。もし使つたら取返しが付かぬ。俺の戒を犯すなよ』と言つた。陸は瞿然として拜謝した。盧が辭去して、漕いで行つた波の跡のまだ消えもせぬうちに、陸は妻を呼んで『盧生が斯ういふ話をした。もう勤め口の心配などは餘計な苦勞だ。』家僕に命じて家の裏を掘らせた處が、果して板に掘り當てた。引退けて見ると大きな瓶の内に錢が溢れる程詰めてあつた。陸は妻と共に家の中へ搬び込み、繦へ通して數へて見ると一萬貫ほどの高だつた。處がその時から陸の女の子が急に頭痛を始め、見て居れぬ程の苦しみを始めたので、陸は『盧生の戒は本當だつた。』と馬を飛ばせて盧生に追付き、大に違戒の罪を謝した處が、盧は怒つて、『その錢を出せば骨肉に禍あることを知らせておいたではないか！子が大切か、金が大事か考へて見るが善い』と振向きもせず去つた。陸は取つて返し、元の通りに錢を埋た處が、子供の病氣は拭ふが如く全快した。

錢一萬貫と娘の命

盧生は又復州へ來た。數人の者とぶら〳〵歩いて居る途中、向ふから來た六七人、堂

堂々たる紳士は大泥棒

堂たる服裝で、いづれもぷんと鼻に來る程酒氣を帶びた連中に出會つた。盧生が突然一喝し『貴樣達は、どうしても改悛しないなら、命はないぞ』と叱り付けると、その六七人がいづれも大道の砂埃へ頭を摺り付けて『決して致しません／＼』と平あやまりにあやまつた、同伴の友達は驚いて『どうしたんだ』と詢いた處が、盧は『此奴等は皆大泥棒なんだ』と云つた。彼れの言動は常に斯くの如く、實に端倪すべからざるものであつた。

趙元卿の話では、盧生の容貌は老人か少年か見當が付かぬ。飲み食ひするのを見たことも、ない。そしてかういふことを言つて居た『世間の刺客には、隱形をやる者が少くない。又刺客の死んだものは、屍體が見えぬものだ。』

許宣平

新安歙縣の人、唐の睿宗皇帝の景雲年間に城陽山の南に隱れ、庵を結んで住んだ。顏は四十ばかりの人に見えたが、大層すばしこくて、走れば奔馬に追ひつく程だつた。

時々山から薪を負つて出て町に賣るのに、いつも荷の上に瓢を括りつけ、曲つた竹杖をついてゐた。酒に醉へば上機嫌で歌ひながら山へ歸るのであつた。

朝は薪背負つて里へ出る
夕日傾けば酒買つて戻る
わたしの家を何處ぞと問はば
雲を潛つて霞の奥へ

かうして山と人里とを往來すること三十年餘りだつた。或時は人の危難を扶け、或時は人の疾苦を救つた。人が山へ尋ねて行つても何處に居るか分らなかつた。たゞ庵の壁に詩が書いてあるだけだつた。

鼓へ隱れて三十年
家を作つた山の上
夜は靜かで月見て更かす
朝はのどかに泉を掬ぶ
木こりが歌は尾上に聞え

許宣平

谷の岩には小鳥が遊ぶ
樂しい此身に老はなく
今年の甲子は何じややら

李白を驚かす詩才

毎度茶店や旅籠屋などに入つては何處でゝも直ぐ詩を書きつけた。天寶年間に李白が東の方へ漫遊して來て、或る宿屋に詩を題してあるのを見、『これは仙人の詩ぢや』と驚歎した。いろ〳〵問ひ訊して、其の詩は宣平が書いたのだと分つたから、新安へ行つて幾度も訪ねたが遂に逢ふことが出來なかつた。そこで李白は宣平が庵室の壁に詩を書きつけた。

旅籠の壁の詩を讀んで
仙人樣の住居を訪へば
嶺の烟はおあとをかくし
雲の林は虛空を隔つ」
お庭のぞけば只物淋し
杖に縋つて扨思案する
空飛ぶ鶴に我身をなそか
千年經つたら歸るぢやろ」

宣平は庵に歸つて此の詩を見ると、自分もまた書きつけた。

池の蓮の葉、着物は盡きぬ
二畝の藥は服めども餘る
又もや人に訪はれうよりも
まゝよ移らう又其の奥へ

庵は野火の爲に類燒した、宣平の行方は知る者がなかつた。

その後百年餘り經つた、懿宗皇帝の咸通十二年の事であるが、許明恕の家婢が山へ木の枝を拾ひに行つて、南山で石の上に坐つてる人を見つけた。其人は大きな桃を食ひながら、

『お前は許明恕が家の女中か』と訊いた。

『さうです』

『おれは明恕が先祖の宣平ぢやぞよ』

下婢、桃の實を食て仙と爲る

『さうでございますか、御先祖様が仙人にならつしやつたといふお話は承つてゐましたが、お處が分らないので御機嫌伺ひにも參りませんでした』

『では傳言をしよう、おれは玆にゐると明恕に知らせてくれ、お前には此の桃を一つやらう、これは直ぐ玆で食ふのぢや、持つて山を下つてはいけないぞ』

婢は其の桃を喰つて見ると大層旨いものだつた。そして歸りに擔いだ薪の荷が少しも重く思はれなかつた。家に歸つてその話をしたところが、主人の明恕は、先祖宣平の名を呼捨てにして婢が話したのを怒つて、杖を取つて擊たうとしたら、その杖の下を潛つて婢は何處かへ行つてしまつた。

後に或人が山で此の婢に逢つたが、顏は若々しくなつて、身體中に木の皮を着てゐた、そして歩くのゝ疾さは宛ら飛ぶやうで深い林に隱れてしまつた。

何仙姑

仙姑は廣東の增城縣の何泰が娘である。生れた時頭に六本の長毛が生えてゐた。

雲母を食し飛行術を得

唐の武后の時に雲母溪に住してゐた。十四五歳の時、夢に神人の敎を受けた。

『雲母粉を食へば身が輕く且つ死なゝくなる』といふのであつたが、餘り正々と見たから雲母粉を食つてみた。さうして嫁ぐまいと誓つた。

常に山や谷を往來するのに、宛ら飛ぶやうであつた。朝出かけて夕方には山の菓物を持つて來ては其の母に與へた。次第に穀物を食べなくなり、言語も普通と違つて來た。

武后は彼女を召し寄せたが、途中から消失せて來なかつた。景龍年間に彼女は眞晝間に昇仙した。天寶九載（玄宗の天寶三年に年を改めて載とした）に彼女が麻姑壇で五色の雲の中に居るのが見えた。大曆（代宗）間にも又廣州の小石樓で姿を現はした。州の刺史高霾から其の事を朝廷へ上申した。

縣令を罷めて求仙

薛尊師

薛尊師は唐の則天武后の末年の人で、兄弟皆榮達し、尊師自身は陽翟縣令であつた。數年間に兄弟盡く死絶えたので、急に山に入つて道を求める氣になり、妻子財産を分散

屍體を見て道心沮喪

山奥に藥を煉る數道士

し唐といふ若者一人を連れて嵩山へ登つた。山麓で陳といふ人に會ひ道順を尋ねた處が、『此の近くに仙境はあるが、私が先に入つて來るまで五日間お待下さい、さうすれば御案内致しませう』といふので、待つて居た。五日が十日經つても、陳が來ない。滿更虚言ではあるまいから、先へ往つて見ようと山道を三四十里進んで往つた。

道の傍に半身を虎に食はれた死人が横たはつて居る。その屍體が先の陳山人であつた。隨行の唐は身慄ひして『長生を求めて山に入り、反つて虎に食はれては何にもならぬ。また人間の世界へ歸つて、天年を全うしようではありませんか』といひ出した。『いや自分は此の山は靈仙の地と聞いて居る。虎が人を食ふなどいふ道理はない。これは陳山人が自分を激勵する方便だらうと思ふ。どうあつても往つて見る。死んだらそれが本望だ』とずん〳〵進んで行つた。夜は岩かねに臥し、晝は石道を傳ひ、數日にして一巖下に到着した。そこには數百株の長松の下に六人の道士が藥を練つて居た。

どうか仙道の御教授に與りたいと、其道士たちに願つた處が、『吾々は藥を飲む事以外に、教へるやうな術はないのだ』と言つた。其處の一禪室に一老僧の居るを見付け、同じやうに懇願して見た。老僧は無言の儘椅子の下に生えて居る藤蔓を指したから、その

藤蔓を傳はりて一仙境に到る

無効の質丹

蔓に就いて外へ出ると、蔓は巖壁の上に續いて居る。蔓に續いて二日間辿つて行くと、忽ち流泉の傍の一石室の處で蔓は絶えた。そこには數人の道士が、或は碁を圍み、或は酒を飲んでゐた。その中に陳山人も居た。薛尊師を見て『ヤア大さう早く來ましたナ、成程それ程の志なら道要を授けませう』と云つて、すつかり術を授つたのであつた。その後薪取や藥採に來た俗人に會つて、『此處は何處だらう』と聞いて見た處が、『終南山紫閣峯の麓で、長安の都から七十里隔つた處だ』と教へてくれた。薛尊師は山から歸つた後、玄宗皇帝の尊信を受け國師となつた。

胡超僧

則天武后の世、洪州の胡超僧といふ者が出家して白鶴山に隱れ、少しばかり法術を聞きかぢり、自から齡數百歳と稱した。武后はこの者に巨萬の金を投じて長生藥の調合を命じ、三年にして完成し、藥を三陽宮に納めた。武后は之れを服んで『誠に結構である。これで彭祖と同年迄生きたいものだ』と年號まで久視元年と改め、夥しい恩賞を賜はつて

山に還した。武后は服藥の後二年目に崩じた。

狐の尾

井州に紇干といふいたづら好きの男が近傍に狐に魅される噂のあつた時、狐の尾を一つ手に入れ着物の尻へ縫ひ付け、わざ〳〵妻の前へ坐つて尾を出して見せた。妻はチラと見て狐が魅しに來たに違ひないと、ソッと斧を持つて來て、その尾を切落した。血相に驚いた紇干は叩頭して『狐ではない〳〵』と云つたが、妻は信せず、駈け出して隣家へ飛び込むと、隣家でも双物や棒切れを持つて追つて來た。紇干蒼くなり、『私だ！　冗談だ！　助けてくれ！』と謝罪して漸く助かつた。

夫を信じて死を哀まず

杜鵬擧

唐の安州都督杜鵬擧は則天武后の死んだ景龍三年に太傅の贈位を得た人だが、曾て濟源縣の尉であつた頃、洛陽へ行つて突然死亡した、夫人の尉遲氏といふは氣丈な人で『良人は方術の心得があつて、常に余は都督までになれると豫言して居られた。今頃死ぬ筈はありません』と毅然として涙もこぼさず、二日三夜その儘にして置いた處が、心臟の上が少し溫かになり、その翌日蘇生したのであつた。四五日で談話も出來るやうにな

り初めて假死中に遭遇した事實を物語つた。

臨終の時、符を持つた二人の使者が迎に來て徽安門へ行き、門扉の一寸ばかりの隙から出たが寛々と拔けられた。そこは北邙山の上で、十里ばかり進んだ處に底知れぬ深い大穴があつた。使者は『入れ』といふが、懼ろしくて足が蹙んで居ると『では目閉ぶれ』と手を執つて飛んだと思ふと、足は地上に立つて居た。細路傳ひに東方へ數十里往くと俄かに天地陰暗として冬空のやうに曇つてゐる、高い塀の前へ出た。使者と入り交りに青い服の官人が出て、恭しく鵬擧に挨拶をして、案内した。青服が身を開いて『あちらへ』といつた時に、傍に一匹の犬が居て、人間の言葉で『姓名が違ふ此のお方ではない』と使者を答うち、持つて來た符を調べて見て行つて了ふと、そこへ半身兩足の馬が飛び出した『私は曾て杜鵬の爲めに殺された馬だ、お審きを願ひます』といつた。鵬擧も歴然其に記憶があつたので、『如何にも曾て或る驛の司令であつた頃、勅令で馬を殺させたことはある、併し私の意趣で致したのではない』と申立てると、青服に、其筋の官吏に取調を命じ、事實その通りと判明し馬は引き退つた。その時傍に一人の官吏が居て、手眞似目配で、鵬擧の爲に有利な暗示をしてくれ、判決が畢ると出て行つた。

賄賂の要求

青服は改まつて鵬擧に向ひ『實は私は生れた人間で安州の戸籍吏を勤めて居る者です。あたたは安州の都督になられる方だから特に敬意を表しました。どうぞ自重なさるやうに』といふ處へ、向の好意を有つてくれた官吏が駈けて來て『私も生きた人間で韋鼎と申し上都の務本坊に居るものです。どうか十萬錢都合して戴きたい』と無心した。鵬擧は『都合が悪い』と斷はると『私は私は娑婆の人間だけれども、今此處へゐて入用なのは紙錢です、雜作ないことでせう』といふから、『よろしい』と引受けた。韋鼎はなほ『その紙錢を燒く時は物へ載せて、地に着けぬやうに願いたい。そして韋鼎とお呼び下されば、直ぐに受取の使を遣はします』と懇な依頼であつた。

その時韋鼎は『折角來たものだから、此家の帳簿を見て置きませんか』と或る事務室へ案内してくれた。標札には戸部とあり、ぐるりの廊下の棚には帳簿が山と積まれてある。正面一段高い處の書類には赤黄色のカーテンを掛け『皇籍』と金文字の榜が掛けてあつた。幕なしの棚には、紫蓋の函入が並べてあつた。韋鼎はそれを指し、『これが宰相のだ』と手を掛けて杜氏の帳簿を取つて見せた。籤に濮陽房と記された四箇の紫函であつた。開いて見ると、まだ生れぬ鵬擧の三男が立派に姓名を記されてあつた。筆を借りてその名を自分の臂に書き留め、更に次を見ようとすると、韋鼎が止めて『もういけません早くお歸りなさい』と連れ出し、一人付けて送り出した。處がその男は『空腹でお伴は出來ぬ。御免蒙つて食物探しに行くから、あなたはこの道を眞直ぐお出なさい、目的の場所へ出ます』と留めても聽かず行つて了つた。

相王が天位に登る

鵬擧はそのまま西を指して往くと、道の傍に新しい城廓があつて、異香數里に聞え、武裝した軍隊が周圍を警戒して居る。兵隊に詢ねると『相王が今天に上られるので四百の天人が御送りに出る處だ』とのこと。鵬擧は相王府附をしたこともあるので、懐しくもあり、墻の隙間から覗くと、なる程、相王の周圍には繪にあるやうな仙服を着た數百の仙人が並び、一人の女が香爐を持つて相王の先に行く。よく見ると、相王の服の裙が破けて居た。相王の頭上に赫灼たる一ッの太陽が輝き、後方に凡そ十九の太陽が列を爲してゐる。覗いて居る處へ、奉迎の儀仗騎兵が來たので、鵬擧は警衛隊に逐ひ退けられ、元の道へ出ると、そこは徽安門であつた。出た時のやうに扉の隙からスッと入ると、さん〳〵に犬に吠えられ、自宅へ歸つて見ると、床の上に自分の體が寢て居る、それに飛び込んで始めて正氣が付いたのであつた。臂に書いた文字は殘つて居た。そこで十萬の

紙錢を燒いて韋鼎との約を果した。

鵬舉の心には則天武后の周の朝廷も永續きせぬことや、唐朝復興のことも竊に判つて居たので、當時逼塞の睿宗皇帝に伺候すると。睿宗は稀の客に大そう喜び『好意は忘れぬぞ』と仰せられた。韋鼎の事を外で尋ねて見ると、此頃死んだとのことであつた。果せる哉、睿宗は間も無く帝位に上り、鵬舉は右拾遺の官に拜せられた。帝は特に妃、公主、宮女達に同じ服裝を着せ、香爐を捧げさせて鵬舉に見せた、鵬舉は如何にもそれと感心した。香爐の女は太平公主であつた。後果して安州の都督に任ぜられたのであつた。

中岳華山神の非行

河東縣尉の妻

則天武后と唐の中宗と代替りのあつた景雲年代のことである。河東南縣の尉、李某の妻王氏は都あたりにもないと評判された美人であつた。李氏が勤めに出た後で朝化粧を了つて靜かに香を聞いて居ると、數人の宮官が犢牛の車に乘り、雲の上から降りて夫人の室に入つて來た。驚いて用向を問ふと『華山府君の命令でお迎へに來たのだ』と無理に連れ出さうとする。夫人は『良人李小府に暇乞も出來ぬとは情ない』と涙ながらに身を起すと、入口の階段でバタリと頓死し、五色の雲はそのまゝ犢車を載せて消え去つた。

死んだ夫人を活かす

役所から歸つた李の悲嘆は譬へやうがない。屍體に取り縋り聲を擧げて泣いた。すると屍體は幾度も蘇りさうにするのであつた。その時誰か玄關へ來て『夫人を活かして上げませう』といふ。李は喜んで『どうぞ御助け下さい』と哀願した、其人は牀上に坐して、符を書く朱を持つて來いと命じた、なか〳〵持つて來ぬので、墨で書いて符を飛ばした、其のうち朱が來たので、又朱で書いて符を飛ばせ、笑ひながら『心配しなさるな、』といふ。その通り少時して夫人は蘇生した。李は非常に感謝して、大金を謝禮に出すと、その人は『人助けに、何が要らうぞ』と愉快に笑つて出て行つた。

正氣付いた夫人王氏は斯く語つた。

華山へ連れ込まれると、華山の山神は大そう喜び、山頂に幕を張り廻し、配下數人を招いで宴會を開き、宴畢つて、更に酌を迫られて居ると、突然黑雲に乘つた人が來て『上帝から王夫人をお召であるぞ』と呼んだが、山神は『用が畢るまで待つてくれ』と悠々

として居る。すると赤雲に乘つた人が現はれて大そう立腹し『上帝から華山神への詰問である。なぜ人間の婦人などを誘拐するか、早く還さぬときは、重刑を申し付けるぞ』と大喝され、山神俄かに恐惶して、使を付けて送り届けられたのであつた。

印度僧の雨請ひ祈禱

昆明池の龍神窮す

孫思邈

孫思邈は終南山道宣律師と親友で、互に往來して居たが、時恰も大旱魃で世間は大騒ぎだつた。折しも都に居た印度の僧が、宮城の昆明池に壇を築いて雨を祈れば必ず雨が降るといふことを朝廷に申出でたので、早速有司に命じ香華燈燭の準備を整へ、七日間の祈禱が始まつた。處が昆明池は數尺の減水を示したのであつた。

ある夜道宣律師の處へ一老人が現はれて、『私は昆明池の龍であるが、近頃の旱は私のせいではありません、近頃印度の僧が私の腦を取らうと圖つて天子を欺いて雨乞の祈禱を始め、昆明池を涸らして了ふので、私の命はもう旦夕に迫つて居ります。どうぞ和尚の法力でお助けが願ひたい』と懇願した。律師は『衲は戒律を守ることが專門なのだから、それは孫先生に頼んで見るが善からう』と云つた。そこで老人は孫思邈の石室を訪問して右の趣を述べ救助を哀願すると、孫先生は『昆明池の龍宮には三千道りの仙藥の處方があると聞いて居るが、それを私に傳授するなら、直ぐにお前を救助して遣らう』といふ。老人は『その仙方といふのは、上帝から人に傳授することを禁ぜられて居るのだが、今危急の場合だから、吝んでは居られません』とその仙方をそつくり孫先生の手に渡した。先生は『善し、還つて居るが善い、印度僧は心配するに及ばない』と言つて老人を返した。處がその時から昆明池は段々と水が增して、數日中には溢れるやうになり、雨乞祈禱の印度僧はすつかり兩眼を潰して憤死した。

救助の謝禮に三千の仙藥處方

玄宗雄黃を贈る

壁上の啓示

孫の死後、千金方三千卷の遺著が出た。一卷に一種類の處方が說明してあるのだが、何人もその意味を解するものはなかつた。唐の玄宗皇帝が蜀へ巡幸の折、孫思邈が武都の雄黃（藥名）を欲しがつて居るといふ夢の告を得たので、早速侍臣を使にして、雄黃十斤を峨眉山頂に屆けさせた。使が山の中途へ行つた頃、白髮白髯の老翁が二人の可愛童子を連れ屏風の前に立つて居て、前の大きな磐石を指し、『藥は其處へ置いて行け、上を見よ、そこに上帝からお示しの文がある』と言つた。使が上を仰いで見ると、石上に百餘

の文字が朱で書かれてあつたから、謹んで寫し取りにかゝると、一字々々寫取る毎に石上の字は消えて、全部寫し畢つた時は朱文字は一字も無く消えて居た。すると忽ち白氣が立ち上つて、今迄あつた物が悉く見えなくなつて居た。

一萬里を隔つ兄の消息

萬　回

萬回はうすぼんやりで誰からも馬鹿にされてゐた、兄が兵役で安西といふ西の涯に往つたぎり幾年も音問が無い、きつと死んでるものと、父母は夜も日も涙にくれてゐた。

すると萬回は

『お父さんお母さん、なぜさうめそ〳〵泣きなさる、兄さんの事が心配だつて？　それは大丈夫、生きてゐるよ、わしが往つて見て來るから、衣服や食糧、兄さんに給りたいものを揃へて下さい。』

父母は當にはならないと思ひながら、もしやにひかされて、支度を整へてやつた。其朝『そんならちよつくら往つて來るよ』と、飛出して往つたが、もう夕方には歸つて來て

玄宗の微行

血腥い安樂公主

『兄さんは元氣だつたよ』と手紙を出した。

封を發いて見ると細々樣子が書いてあり、兄の手蹟にまぎれが無かつた。弘農郡の其の家から安西まで一萬餘里もある、萬里を回つて來たので萬回といふ渾名がついたので本名は判らない。

萬回が祠異のわざは、此の後にもちよい〳〵現はれて、次第に世間から信仰される樣になつた。玄宗皇帝がまだ臨淄王で居た頃、時々微行に出ると、其の前に必ず萬回が現はれて來て『天子來る！』『聖人來る』と觸れてあるいた。

安樂公主は玄宗の妹だが、其頃韋皇后に取り入つて、詔勅さへ自由勝手にするくらゐ、權威朝野を傾くる勢であつたが、萬回は安樂公主の行列を眺めると、『おゝ血腥い〳〵』と顰蹙めてゐたが、間もなく韋皇后等と共に斬られることになつた。玄宗は帝位に登つてから、宮女二人を常に萬回の給仕として遣はしておいた。

吳道元

畫道の天才

字は道子、陽翟の人、少年の頃書を賀知章や張顚に學んだが、物に成らないので更に畫を學んだ。未だ冠も着ない内に早く畫に妙を得た。是は天禀の然らしむる所と見え、勉强や練習で到り得る境地ではなかつた。

初め兗州（山東省）瑕丘の尉となつたのを、玄宗が召し出して近侍せしめた、夫から天下に名を知られた。その畫風は張僧繇を師とするものゝやうだつたので世人は張の後身だと評判した

顧愷之が隣の女を畫いて、その胸に棘を刺して女を苦悶させたのは有名な話だが、道子が驢を僧房に畫いたら、毎晩ガタ〳〵と足踏する音がして僧が眠れなかつた。

僧繇が龍を描いて眼睛を點し了ると、雷の音を聞いて壁を破つて飛び去つたといふが、道子が龍を畫いたら鱗が一つ〳〵動くやうで、雨が降るだびに龍から煙霧が起つた。道子の妙技は顧愷之と僧繇とを兼ねたものと稱せられた。

水を撒きかけて壁畫

畫中の洞穴に隱れ去る

宮中に數尋の粉墻があつたから、玄宗は道子に山水を畫かせた。道子は鉢一杯の墨をその面に水を撒く樣にまき散した、そして暫く幕で隱して置いて帝に見せた。それを見ると山水林木人烟鳥獸悉く備はらざるなしといふ名畫が出來てゐた。帝歎稱措かず見とれてゐると道子は一つの岩を指して、

『この岩の下に小い洞が一つあります、その中に仙人がゐますから、扣いたら必ず答へませう』といつた。そこで指で擊つて見ると、忽ち其處に門が開けて童子が側からのぞいてゐた。道子は、

『此洞の中は大變佳い處でございます、私が先づ這入りますから陛下もお續き下さい』といつて洞の中へ入つて、頻りに帝を手招きするけれども、玄帝は這入ることが出來なかつた。その内に畫中の門は閉ぢられて、道子の行方は判らず、その畫全體が消え失せて、元の如く白地になつてしまつた。

妖怪を喫ふ

吳道子鍾馗を描く

鍾馗

唐の玄宗が瘧を患つてゐた。

晝寢の夢に、小い妖怪が出て來て、楊貴妃の香囊と帝の玉笛とを盜まうとした。帝が叱つて何者だと詰ると、妖怪は畏まつて

『私は虛耗と申す者でございます。人家の慶び事を憂へ事になすものでございます』といふ。

帝は怒つて武官を呼ばうとすると、忽然として一人の偉丈夫が現れた。位卑く見窄らしい扮裝ではあつたが、忽ち妖怪を引捉へ、その眼を刳り、體を劈いて啖つてしまつた。

『お前は何者だ』と帝が訊ねると、偉丈夫は階下に跪いて、

『下臣は終南の進士で鍾馗と申しまする、武德年間（唐の高祖）に試驗に應じて落第いたしましたから、石階に頭を碎いて果てました。ところが思はざる恩命を蒙りまして、高祖から綠袍を賜はりて葬られました。この御恩に對して何時かは報い奉らうと誓を立てゝ居りました。今虛耗の災禍を除きましたのも其の爲でございまする。』と奏し訖ると、帝の夢はさめた。而して病も其のまゝ癒えた。

帝は吳道子を召して鍾馗を畫かしめた。道子は暫く思案してゐたが、思ひ當るところがあつたらしく、圖を描き上げて奉つた。

帝はこれを見て、

『おゝ、お前も朕と同じ夢を見たのぢやなと感心した。

死人を復活せしむること妙

邢和璞

邢和璞は何處の人か判らない。東海のほとりに隱居してゐた。人の心術を見拔くことに妙を得てゐた。後に嵩山と潁川との間に居を卜して、潁陽書算心施空之訣を著はした。また能く法を以て頗死した者を活かした。

玄宗の開元十二年、都に出ると顯官たちが門外市をなして彼を訪問した。友人で白馬坡の下に居る者があつたから、彼はその人を訪ねると、前日に死んでゐて母親が哭き哀んでゐた。和璞は屍體を臥床に置き、自分も一緒に夜具を被つて寢た。良久しくして起ると湯に入つて、又屍體と寢て、到頭死人を蘇らせてしまつた。

崔司馬は彼と仲が善かつた、病が重くなつて既に危くなつた時、

『邢先生は何故私を見棄てるのだらう』といつた、すると病室の壁に穴をあける音がした。不思議に思つてそこを見ると小い穴が出來て段々大きくなつた。その中に前後のお供數百人を召連れて、和璞が紫衣大冠の姿で車に乘つてゐた。

『太乙（仙官の名）に請うて助けて遣はす』といつたかと思ふと、その姿も壁の穴も無くなつた、そして崔の病はケロリと癒つた。

房琯は桐廬の縣令で和璞を遇すること頗る慇懃であつた。或日和璞は笑ひながら琯にいつた。

『君は宰相となるだらうから自愛なさい、おしまひにはきつと鱠を食ふだらう、そして龜茲（新疆省庫車縣）を柩とするだらう、それは自宅でもなく役所でもなく、寺でも他人の家でない所だらう』と、

後果して琯は宰相にもなつたが、閬州に謫せられた、其處で病氣になつた、少し癒えた頃太守が郡の代官どもを招集めて鱠を馳走した。それを食ひ畢ると琯は又病が起つた。夢に神人が來て、

『邢眞人の言つたところに違ひはあるまい』といつたと見たが、翌日亡くなつた。そこへ商人が來て龜茲國産の板で老子の座を造らうとしてゐたから、その料で柩を作つてしまつた。邢が言つた通りだつた。

まんぼうの樣な上帝

和璞は終南山に廬を結んだ。道を學ぶ者が多く彼の許に集つた。その頃崔曙といふのが友となつて常に邢の左右に居た。邢は或日弟子に向つて

『近々に珍客が來るから接待の用意をせい、それからお客を窺ひ覘いてはならぬぞ』といつた。翌日果してお客が來た、身の丈は僅に五尺しか無いのに幅は三尺あつた、しかも半分は顔だつた。それでゐて緋色の服を着、笏を持ち髯を扱いて大聲に笑つた。口尻は耳に迫る程で頻りに談をするが、多くは人間の語ではなかつた。崔曙が庭先を通つたのを客がじつと見て和璞に、

『これは泰山の老師ぢアないかい』と問うた。

『さやうで』

御馳走がすむと客は歸つた。和璞は崔に向ひ、

『あのお客は帝だつたのぢや、わしにお戯になつたのぢや、泰山の老師と仰せられたことは思ひ當つたことがあるだらう』

『いつぞやも先生が私に泰山の老師の後身ぢやと仰せられましたが、どうも前身の事は覺えてゐません』と答へた。

和璞も其後何處へ行つたか知る者が無い。

李白

李白は字は太白、青蓮居士と號す。隋の末頃に祖先は西域にやられてゐたが、唐の中宗の神龍年間に其地から遁還つて蜀に居つた。

金星懷に入る

白が生るゝ時母は長庚星（金星）が懷に入ると夢を見たから、太白と名をつけた。十歳で早くも詩書に通じ、長じて岷山に隱れて書を讀んだ。蘇頲が益州の長史となつて來て、李白を見て不思議に思ひ、これは天才で相如（漢の司馬相如）に劣るまいと相した。

謫仙人

其の後李白は長安へ出て賀知章に謁した。知章は其の詩を見て歎じて、人間の詩では無い、天上の神仙が人間に謫せられてゐるのだと劇賞し、玄宗にその旨を奏した。玄宗は彼を召して共に時事を論じ、馳走の料理は親らその味加減をして與へた。

沈香亭の詩作

帝、或時、沈香亭で牡丹の滿開を賞しつゝ、李白に唱歌を作らせようと思ひ立つて、急に召喚させた。白は既に大醉してゐたから、左右の者が冷水で顏を洗つてやつて、少し正氣を出させた。帝は特に楊貴妃に命じて、白が爲に硯を捧げ持たせた。白は立どころに清平調の唱歌を三つ作つて、一向考へを費した樣子もなかつた。帝は彼の才を愛して、度々召し寄せては酒を與へた。

酒中の八仙

曾て醉つた末に、高力士に自分の靴を脱がせた。高力士は當時の宮內官中最も勢力のある者であつたから、深く之を恥羞として、李白が詩を種に楊貴妃を怒らせた。帝が白に高官を與へようとすると貴妃が、妨けてやめさた。白も帝に近づいてゐても安心されないことは知つてゐた。ために豪放な事ばかりして、爲たいまゝに暮してゐた。張旭など毎日酒ばかり飲んでゐるから、世間では彼等の仲間を酒中八仙と稱してゐた。白は故鄉へ還ることを懇願したから帝も金を與へて之を許した。

安祿山が反した時、永王璘は李白を呼んで幕僚とした。璘は兵を起して敗れ白も當に誅せられようとした　以前に白は郭子儀が罪を免るゝことに盡力してやつた事があつたから、今度は郭子儀が白の爲に贖罪を申出でた、それで白は死を免れて夜郎に流された、

赦されて潯陽に還つて居たが、又別の事に連坐して獄に下つた。その時宋若愚が吳の兵三千を率て河南へ行く途中潯陽に通りかゝつて囚人を釋放した、白もその時參謀にされたが幾もなく辭職して當塗令の李陽冰を訪ねて行つた。

代宗の時になつて都へ召されたが、世間では皆李白が醉はらつて江に墜ちて死んだといつてゐた。然し元和（憲宗の朝）の初年に或人が海邊で白を見た。白はその時一人の道士と偕に高山の上にゐたが、暫くして共に赤虬に跨つて霞の中へ消え去つた。

白龜年は白樂天が子孫である、曾て嵩山に登つて、遙かに東巖の古木を望んでゐると、幕を引廻した樣なものが地から湧き出た、足に任せて行つて見ると、人が現れて『李翰林がお待ちぢや』といふ。その人に附いて幕へ入ると、氣高い人がゐて

『わしは李白ぢや、先年水解して仙人となつた、上帝はわしに文書を掌らせて、早や百年からになるのぢや、お前の先祖の樂天も現に五臺山にゐて、功德所（仙府の廳名）を掌つてゐる』と一卷の書き物を取出して龜年に與へ、

『之ゝ讀めば鳥の言葉が解るよ』といつた。

その後、白海瓊も亦いつてゐた、

『李白は今に東華・上淸監・淸逸眞人となつてゐる、白樂天は蓬萊の長仙主となつてゐる』と。

顏眞卿（一）水解、水に落ちて死んだと見せて實は仙化したること

顏眞卿に仙法を得

顏眞卿

字は淸臣、師古五世の孫である。博學で文章に巧であつた。玄宗の開元年間に進士に擧げらて拔擢に拔擢を重ねて、眼覺しい出世をした。

德宗の建中四年に李希烈が叛亂を起した時問罪の勅使として出向せしめられた。眞卿が生きて還ることはあるまいと世人は信じた、親族は彼の爲に長樂坡で送別の宴を張つた。彼は醉つて跳つた。

『吾は夙に陶八八といふ道士に遇つて刀圭碧霞丹といふ藥を授かつたから今になつても老衰しない、その時、七十になつたら大厄が來る、けれども構はない、蓬浮山でお前が來るのを待つてゐると、道士はいつた。今日の事だつたのさ』といつた。

眞卿は大梁に行くと果して李希烈の爲に殺され、屍は城南に葬つた。希烈が敗れ（貞元二年）てから家人が眞卿の柩を開いて見たら、その狀貌宛ら生けるが如く、體は金色になり爪が延びて掌を貫いてゐた。鬚も髪も數尺になつてゐた、偃師縣の北山に改葬した。

羅浮山よりことづて

後、或る商人が羅浮山に行つたら、二人の道士が木蔭に碁を圍んでゐた。その一人が見咎めて、

『誰だいこんな所へやつて來たのは』といつた。

『私は洛陽の者で』と答へると、道士は笑つて

『さうか、では手紙を一つことづかつて貰はうかい』と商人に頼んだ。歸つて北山へ行き、顔が子孫に渡すと驚いて、

『これは正しく先太師の筆に相違ない』と怪んで、塚を發き棺を開いて見ると　中は何一つ無かつた。早速羅浮へ出かけて見たが、もうそこにも居なかつた。

その後白玉蟾（はくぎよくせん）がいふところによると、顔眞卿は北極驅邪院左判官となつてゐるといふ事である。

七百歳の仙女の多淫

大根食用を奬勵す

王晏

太和先生、王晏は仙道を得て常に五岳其他の名山を遊歴してゐた、容貌いつも三十許の人に見えた。其の父も道を得てゐた、叔母（をば）は父よりも一層上達してゐたといふが、誰も其人を見たものは無かつた。王晏のいふ所に依れば、叔母は主として衡岳に居り、時時天台山、羅浮山あたりへ出かけて來る、見かけは少女の樣であるが、實は七百歳を越えてゐた、房中術（性交に關する仙術）に由つて不死を得、到る處に樂（たの）くの夫（をつと）を有つてゐたといふ。

天寶年間、召されて宮中に到り、玄宗及び楊貴妃に禮遇せられ旦（あした）も夕も謁見をして、道術を講じてゐたが、其の要旨は修身、儉約、慈仁を主とするのであつた。何人に對しても好く勸めたのは、大根を食ふことで、其根も葉も常に食してゐれば功力が多いと主張するのであつた。後、牢山（ろうさん）（今の青島東北方の高山）に入つて仙藥を煉つた。

申元之

玄宗と仙談

長生藥の所望

玄宗の開元年中、方士の申元之は都に徵されて、開元觀に留つてゐた。帝室からの待遇は極めて厚かつた。

帝が洛陽に幸せられるのに、申元之は扈從を命ぜられた。帝と仙道の奥妙な談論をして長い時間をつぶすことも屢々であつた。楊貴妃の外、趙雲容其外四五人の宮女たちが御側に居て、此の談論を聽くことが出來た、雲容は茶や藥の給仕をするのであつたが、其のつゝましやかな風が、申元之の眼にとまつてゐた。隙間を見て、雲容は元之に少し命を延びる藥を戴きたいと願つた。元之は、藥は惜みはせぬが、あなたは久しく世に處ることが出來まいと言つた。それでも尙ほ頻りに賴んで、

『朝に道を聞けば夕に死するとも可なりとか申すではありませんか、大仙に斯う親しく接近する仕合せに遇ひながら度世（世を脫れ仙人になること）を得なければ寶の山から素手で出る樣なものでせう。どうぞ憐んで下さいまし。

墓中に在つて再生の期を待つ太陰鍊形の法

雲容の再生

如何にも切に冀ふので、降雪丹といふ仙藥を一粒與へて、

『此の丹を服むが可い、死んでも體が壞れない。棺もなるだけ大きくしておくことだ。墓の穴を大きくして、屍體の口には眞の玉を含ませておき、墓の內に風が通すやうにありたい、さうしておけば魂も魄も其のまゝで、散り又は壞るゝことが無い、百年過ぎて、生人の氣に遇ふことがある、其時復活することが出來る、これが太陰鍊形の法といふものだ、それでまづ地仙になり、復た百年經つてから仙洞の中に遷り住むことが出來る。

趙雲容は東都に隨行中病氣に罹つた。揚貴妃に可愛がられてゐたから、申元之の言つた事を申告げておいた。いよ〳〵卒去すると、宮內官の徐玄造に命じ、本人の願つておいた樣な墓所を營んでやつた。百年を經、元和の末に至つて、薛昌といふ人に遇うて雲容は再生した。申元之は尙ほ其の後も世間に出て來ることがあつた。

梁野人（名は戴、長沙の人）

手を振れば錢が出る

梁野人は仙道を修めて特に鉛汞修煉の術（金銀を練成する仙法）に長じて居た。嘗て廟の銅像の側に晝寢をして居たところ、長一丈許の金人が野人の左の手を取つて、金錢を一枚載せてくれて、

『錢が要る時、左の手を縮めて振れば錢が出る、此の事を人に漏すな』と云つた。野人は押し戴いたかと思ふと夢が覺めた。左の手掌が少し痛い、視ればむら〳〵と錢の形があつた。言はれた通りやつて見るといかにも効驗がある、金に不自由がないので、此れからます〳〵放曠で、飲んだり歌つたりして日を送つた。

兄に憐まる

母親は心配して、『二人の子をたよりにして居るのに、兄は幸ひ心掛が良くて、年少で登用試驗にも及第したが、そんなにお前がのらくらでは、賴りにも何にもなりはしない。』とこぼすのであつた。野人は一向平氣で『私は遊歷に出たい』と云つて、母が留めるのも管はず出て去つて了つた。十二年も音沙汰がなかつた。

兄の梁顏は廬州の太守に出世してゐた。或る日偶然弟が訪ねて來た。兄は視て喜んだが、また悲しみもした。兎に角久しぶりに兄弟酒を酌みかはした。兄はしみ〴〵弟に『俺が一州の太守となつてゐながら、其のぼろ〳〵姿が見て居られるか。』と、立派な衣冠に

夜半に錢の音がする

着換へさせようとした。弟は『道を修むる者は内觀が大事です、心の鍛練さへすれば可いのです、兄さんは形骸の上の詮索をなさるのですか。』と、ぷイと出てしまつて、出たらめに旅店に飛込み、一室に醉拂つたまゝ寢てしまつた。夜半になつてちやら〳〵錢の音がするので、店主は吃驚して、此の道士は盜賊かも知れんと、そつと戸隙から覗いたが何も見えなかつた。翌朝樣子を窺へば、もう居ない、室には山と盛りあげた錢があつて、太守宛の狀がつけてある。

『弟は野人でござる、烟蘿が待つてゐるので、御わかれにもえう參らぬ、御體を大切に召され。聊かの錢、貧乏人を賑はして下され。』

なほ其の外に、着てゐた弊衣が遺してあつた。其れが非常に佳い香がして、室一杯薫じわたつてゐた。早速行方を驗べにかゝつたが、屋根瓦が數枚めくれてゐた。其れから脫けて空に乘して去つたものらしかつた。

（一）烟蘿、山林の烟霧やかづらなどをいふ。自分は山林に住む野人だゝ其の山林が歸りを待つてゐるから告別もせず、急いで出立するといふのである。

張果

張果は數百歳になるだらう、吾々兒童の時から今と同じだからと、唐の初の老人達が評して居た。太宗、高宗も屢徵されたが之に應ぜず、恒州の中條山に隱れてゐて、時に汾州晉州あたりに出遊することがあつた。

則天武后が強ひて召されたので、山から出るには出たけれども、妬女廟前まで來て死んだ。恰も盛暑の候でたちまち腐つて蛆がわいた。武后も其の報告を得て確に死んだものと信じたのであつたが、程經て、恒州の山中で復た其の姿を見たものがあつた。

仙人のふてくされ

張果は平生白い驢馬に乘つてゐた、一日に何千里も何萬里も行くことがあつた。旅行が濟めば其の白驢をば疊んでしまふ、ちやうど紙を折つたほどの厚みになるのを手箱の內に納めておく、乘るときは水を噀きかけると、また白い驢馬になるのであつた

手提げ疊み込み式の驢馬

開元二十三年玄宗皇帝は侍從の裴晤を遣し張果を迎へしめた。裴晤が面會すると、張果は息が絕えて死んだ、裴晤は管はず恭しく香を焚いて、天子より御迎の思召を傳へた。

張果は蘇生した。裴晤は心得てゐるから敢へて無理に逼ることをせず、其のまゝ還つて天子に復奏した。更に徐嶠、盧重玄の兩人に鄭重なる詔書を持たせて、迎へに遣はした。張果は兩人に隨つて上京することになつた。張果は宮中に置かれて十分の禮遇を受けた。

玄宗は張果と打解けて對話中、『先生は得道の人でありながら、何故髮や齒がさう衰へて居られるのか。』と不審がられると、張果は『年のせいで致方がありません、お耻かしい次第です、いつそ皆除けてしまひませう』と、直に白髮を引きむしり、齒も叩き落してしまつて、口一杯血だらけになつた。玄宗は驚いて、『先生どうぞ暫く御休息なされ。』と退らせて、少時經つて更に召されたが、張果は艶々しい黑髮、生えそろつた白い齒、壯者よりも見事になつて入つて來た。

即座に若返る

神仙の事を問はれても張果は容易に答をしなかつた。呼吸法を行ふばかりであまり食事もしない、併し酒は善く飲んだ。玄宗が酒を强ひたとき、『私は餘り飲めませぬ、弟子に一人、一斗ぐらゐ飲むのが居ます。』と答へたので、其れを召せと詔があつた、程なく、一少道士が御殿の簷から飛下りた、年が十六七、みやびた姿である、應對の言語も明晰で禮儀作法も不束でない。玄宗は大に喜んで酒を賜はつた。飲むは〳〵、見る〳〵

酒飲みの選手を出す

一斗ばかり飲んでしまうた。張果は『もう賜されては可けませぬ、過ぎますと失禮を仕出かしまする。』と斷つたのに、玄宗が面白がつて、無理に今一つと飲ませられると、頂から酒が噴き出して、冠が地に落ち、少年は倒れて一個の酒樽になつた。驗べて見ると集賢院内にあつた酒樽で、一斗しか入らぬのであつた。

勳章佩用の仙鹿

咸陽の野に狩をして、玄宗は一大鹿を獲、大に喜んで煮させようとするのを、張果は止めて

『此は千歳に滿ちた仙鹿で、昔し漢の武帝が元狩五年に此の鹿を獲て放たれたのを、私が其の時お供をして存じて居りまする。左の角の下に銅牌が附いて居りませう。』と申上けたので、取調べさすと、果して二寸計の銅牌があつたが、年號の文字は磨滅して判らなかつた。

張果の眞の年齢や素性を知りたいと、玄宗は當時宮中に居た有名の方術者をして、色々調べさせたけれども、どうしても判らなかつた。葉法善といふ道士が、『私は存じて居りまする、が、申せば直ぐ死なねばなりませぬ、若し陛下が冠を脱ぎ跣足になりて張果に詫びて、私を蘇生させて下されるなら申しませう。』と言ふので、玄宗は確と其を請合はれた。『此れは渾沌初めて分れて天地成る時の白蝙蝠の精……』と言ひ終らぬ中に、葉法善は七竅（耳目口鼻）から血が流出して地に倒れた。玄宗はあわてゝ張果の所に往つて、免冠跣足（罪人のすがた）して罪を詫び、法善の復活を願はれたが、『此の兒は口が多過ぎる、きつと懲らしめなければ天地の機密を敗りまする。』と、張果が頑然拒むのであつた。玄宗はくれ〳〵も自分が無理にしやべらせたのであるから、此度だけは許してくれるやう懇願されるので、やう〳〵にして、張果は水を含んで噴きかけ、法善を復活させてやつた。帝は益之を重んじ、張果の像を畫かせて集賢院に掲げ、通玄先生と尊稱を賜うた。

饒舌に對する懲罰

張果は無理に暇を乞ひ恒州に歸つた。其後、天寶年間、玄宗は使を派して迎へさせられたが、張果はうるさがつて死んでしまひ、此度はつひに登仙して、再び人間に交らなかつた。

司馬承禎

司馬承禎は潘師正に事へて辟穀（穀食を絶つ）仙法導引（呼吸に關する仙術）の術を傳へられた。則天武后

司馬承禎

に召されたが間もなく辭して去つた。學問德行共に秀れて世人の尊崇を受け、特に陳子昂、王維、李白、孟浩然、賀知章、盧藏用、宋之問、王適、[illegible]構など當時第一流の名士と仙宗十友と稱せられた。天台山に隱れゐたが、睿宗皇帝の時又京師に迎へられ、帝に道を問はれて『道を爲めて日に損し、之を損して又損し、以て無爲に至る』と答へ、更に『身を治することは則ち爾り、國を治することは若何。』と問はれて、『身も猶ほ國の如し、心を淡に遊ばしめ、氣を漠に合せしめ、物を自然にして私を容るゝことなくんば、天下治まる。』と答へた。

辭して天台山に歸るとき、盧藏用は終南山（都に近き一名山）を指して、『此の中にも佳處あり何ぞ必ずしも天台のみならん。』と引留めようとしたのに、『僕を以て觀れば是れ仕官の捷徑のみ。』と言つた。それは、初め盧藏用が終南山に隱れて虛名を賣つて後、登庸せられ、俗界に羽振を利かせてゐるのを卑んだのであつた。

謝自然（獨の成都の女子）

謝自然は幼少の頃、道士から仙經を示され一讀して其の大旨を得、女道士となつて專念に修行を積んだ。四十歳の頃より各地の名山靈跡を歷訪し、司馬承禎が天台山の玉霄峯にゐる山を聞いて、往つて其の弟子となつた。每日薪を採り水を汲み炊爨の勞に服してゐた。師の承禎は容易に道を敎へないので、自然は一日玉霄峯の絅頂に登つて、遙かに海上を眺めた、渺茫たる海波の間に、點々、島山が見える、蓬萊の仙島も恐らく彼の邊に在るのであらうとなつかしい。『あゝ、折角良師に遭ひながら未だ明敎を蒙ることを得ざるは吾が命運の拙き故なり』と嘆息して、つひに承禎に辭れて、山を下つた。

女道士諦めて師に別る

海邊にたどりゆき、一枚の蓆を拾つて波に浮べ、其上に坐して海へ乘り出した、蓬萊に行かうといふのである。幸に新羅の商船に遭うて、其の船に便乘を許され、數月間航海を續けた。

とある島に船が泊つたとき、謝自然は獨り上陸して、山に登つて島の光景を眺めてゐた。五六人の道士が青衣の侍者を從へて、ぶら〳〵と出て來た。其中の一道士は冠も衣裳も殊に美しく氣だかい風采であり、侍者をして『何處に往かれる』と自然に問はしめた。『蓬萊に參つて師を求め度世（仙人になる事）が致したいのでございます。』と答へると、道士

舊師の許へ遊戯り

たちはみな笑つて『蓬萊は大海三萬里を隔てゝなか〳〵船ではむづかしい、仙人ならでは往かれぬ處ぢや。天台山には司馬承禎が居る、仙人の名は隱れもないものぢや、何故其れに就いて道を求めぬ、汝の師は彼ぢや。』道士は船の者を呼んで『此の女子を天台に送れ。』と命じた、忽ち强風が起つて、元來た方へ船を吹き返して、僅か三晝夜で天台山下に着いたのであつた。自然は山上に馳せ上つて師の承禎に、以上の顚末を申し述べて深く罪を謝した。承禎は吉日を擇び、壇を設け儀式を整へて、仙道の秘訣を傳授した。謝自然は蜀に歸つて、貞元十年、白日昇天の本懷を遂げた。

圖(一)　司馬承禎の傳記には謝自然が焦靜眞になつてゐる。

裴老人

『好酒三杯を啜り、好花一枝を挿む、古今の事を思量するに、安樂是れ便宜』

裴老人は近頃清源山(福建省內)の麓に移住して、のんきな生活をして斯んな詩など吟じてゐた。

虎が迎に出る

南京蟲に人身御供をそなへてゐた

住居の邊に十餘頭の虎が居り、十日に一人、人を食ふので、裴老人は一塊の肉を買つて來て、虎のゐる處へ行き『十日毎に此をやるから、此から人を捕つてくれるなよ』と言つた。果して此から虎の害が絶えた。

老人が、時に泉州の城下に出る事がある、朝出て歸りは晩になるが、いつも虎が城外の闇がりに待つてゐて、老人を騎せて歸るのであつた。

嘗て萬福山の頂に登つた、渴いて來たので、拳で岩を扣いたら清水が迸しつた、其れ以來山上に泉が絶えない、今、聖泉岩といふ。

隣村に相公廟といふ祠があつて、靈驗著しく村民の信仰を得て居たのは好いが、一年毎に一個の孩童を生きながら供へなければ、村中に祟つて大災厄が降るのであつた。八十餘歲の老翁で、唯一個の孫を有つたのがあつた。此度其の子を供へねばならぬことになつた。老翁は其の孫を抱いて廟の門に立ち、さめ〴〵と泣いて居た、たま〳〵裴老人が通りがかり、其譯を聞いて、『よし〳〵俺が好い樣にしてやる。』と老翁を慰め、其の子を取つて廟內に入り升で燈火を覆うて待つて居た。夜半、相公の像の口の中に轟々と音がしはじめて腥氣が廟內に滿ちた。燈を出して見るとうよ〳〵と臭蟲(南京虫)が口の中

老人昇天の眞相

から出てゐた。裴老人は子を抱いて廟を出た。翌日熱水を以て相公の像に澆ぎかけて臭蟲を鏖にした。此から後、相公の靈驗も祟りもさつぱり絶えてしまつた。

また泉州城内では、橋の上に高座を設け、毎年中秋の夜、八十歳以上の老人を一個其の上にあげる、夜更けて一對の紅燈が雲中より降つて其の老人は迎へ去られる、老人の子孫親戚は高座の下に宴を設け客を請じて、此の昇天を榮譽とするのであつた。依つて橋を登仙橋と稱へ、城内の老人は昇天の候補に選ばれるのが老後唯一の思出であつた。裴老人が此の騒ぎに行き合せて、『此は魔だ、俺が除いてやる』と言つた城中の人は素から裴老人の道行秀れたることを尊信してゐたから、敢へて之を拒まなかつた。

裴老人は劍を執つて高座に登つた。例の時刻に紅燈が來ると、ぱつさり一擊した、血が流れて橋上に溢れた。天明を俟つて、城民は其の血をたどつて行つた、清源山の後の大磐石の下にはいつた。洞穴の奥に大きな蟒蛇がうめいて居たので多勢で刺殺した。洞内に骸骨が堆くなつてゐたのは、此れまで所謂昇天した老人達の骨である。

居留守して仙道を得損なふ

陳安世（京兆の人）

陳安世は、十三四歳の頃、權叔本の家に傭はれ働いてゐたが、曾て殺生をせず殺したもの丶肉も食しなかつた。主人の叔本は仙道の修行に志してゐた、或日二人の仙人が書生と化つて訊ねて來た、叔本の志を試めしたのであつたのを、叔本は其れと氣が付かず、普通の客として待遇して返した。

叔本が奥にゐて馳走をたべようとする時、再び二人が來訪した。門に陳安世を見て、

『主人は御在宅か。』

『居られます。』

安世は奥に入つて取次いた、主人は直に出迎へようとしたのを、其妻が、

『餓鬼書生が腹つくりに來たのですよ。』と言つて引止め、安世に『不在だ』と言はせた。

二人の者は、

『さつき在宅だと言つたのに、今不在だといふのはどうした。』

書生の安世に仙道教授

『でも旦那がさう言へとおつしやいましたから。』

『おゝお前は正直だ。實はな、お前の主人が求道の志があるから、吾々わざ〳〵出て參つたのに、書生の風體だと侮つて疎略な取扱ひをするは、平素の心掛が宜しくないからぢや。時に貴公は遊戯は好きか。なに嫌ひぢやと。道を好むか、仙道はどうぢや。』

『好いて居りますが、知りようが有りません。』

『きつと、お前が好きならば、明日、あの路の北の大樹の下に參れ。』

二人は斯う約束して歸つて去つた。安世は早朝から大樹の下に往つてゐたが、日が暮れかゝるのに昨日の人たちは影をも見せぬ、すご〳〵歸りかけて『書生たちがわしをからかッたんだな』とつぶやくと、

『安世々々、どうして遲かつたのぢや。』

何時來たものか二人は自分の側にゐたのであつた。二人は安世に二粒の丸藥を與へて、

『お前は此から物を食べるなよ、人と離れて寢る樣にせい。』

此から、屢、安世の獨り居る處に兩仙人が來ては種々の話をして聞かせた。主人は安世が獨居の室に人聲のするのを怪んで、覗いて見たが何も視えなかつた。安世に訊すと獨語をいつて居たと答へた。併し安世が物を食はず、人と別居してゐるのは、どうも常の人では無ささうに思はれた。『貴いものは年齢でも身分でも無い、道と德だ、我に生を與へたのは父母だけれども、此生を長しへならしむるものは師より外に無い、我より先に道を聞いてゐる者は卽ち我の師とすべきものだ師は尤も尊いものだ。』と嘆息して、安世を崇めて弟子の禮を執り、朝夕に之を拜し、安世の爲めに其の室の掃除までして、恭敬の意を盡すことゝなつた。其後安世が成道して白日昇天する際、道術の肝要な點を叔本に傳へた。由つて叔本も亦後日仙となることを得た。

主人が安世の弟子となる

裴沆

病鶴を救ふ

同州司馬(官名)裴沆といふ者が、洛陽から鄭州へ行く途中、ある處で夕方馬から降ると道の傍で人の呻る聲が聞えた。草叢を掻き分けて見ると、一羽の鶴が病氣と見え首を投げ出し、羽翼を下げて居た。よく見ると翅の上關節の處の瘡がひどく破れ、すつかり毛も拔けて居て異樣な聲を出すのであつた。忽ち白い道服を着けた老人が杖をついて現

人生三世の血が薬

はれ、『君はまだお若いやうだ、鶴を哀れと思ひませぬか、此の鶴は人の血で治療して遣らねば飛ぶやうになれぬのだが。』といつた。

裴はなか〳〵心がけのよい男だつたので『それでは此の私の臂から血を取つて遣らうではないか』といつた。老人はこれを聞いて、『君は却々感心な青年だ。けれども、治療に使ふ血は三世人間に生れた人の血でないと役に立たぬ。折角だが君の前世は人間でなかつたのぢや。洛陽に居る葫盧生といふ男は、三世人に生れて居る。君さして急ぎの用向でもないのなら、も一度洛陽へ還つて、葫盧生に貰つて來て呉れないか』といふのだつた。裴沆は早速取つて返し、葫盧生の所を訪ねて、事情を話して頼んだ處が、葫盧生は嫌な顔もせず風呂敷包から兩指位の小さな石の函を取出し、針を臂に刺して、その場で石函に一杯血を絞つて裴沆に手渡し『人に喋べつては不可いぞ』と云つた。

裴沆は大急ぎで鶴の處まで來て見ると、以前の老人も居て、大さう喜んで『本當の信士だ』と賞めて、鶴の瘡へ血を塗けて遣つた。さて老人は裴に向つて『俺の住居はつい近くだから、そこで一休みしないか』といふ。どうも凡人ではないと思ひながら後へ跟いて行つて見ると、竹籬の草屋で、その邊は狼籍たるものであつた。喉が渇いたので『茶を一杯頂戴したい』といふと、老人はそこの棚を指して『そこにあるからお飲みなさい』と云ふ。開けて見ると棚の中に杏の核と眞白い水がある。飲んで見るとすつかり饑渇を感じなくなつた。杏の搾液のやうなものだつた。

此包を見るまいぞ

裴沆は此は確かに仙人だと思つたので、『どうぞ召使つて下さい』と頼んだ處が、老人は『君は世間で出世が出來るのだから、此處に居ても永續きはしまい、君は知るまいが、君の叔父さんが道を得て居るんで、俺とも舊い友達だ。言傳を頼まうと思ふが、きつとこれを屆けて呉れ給へ』といつて、風呂敷包を作つた。中味は椀位のものだつたが、老人は『決してこれを開けて見てはならんよ』と念を押すのであつた。そして鶴にも會はせた。鶴はもう大分回復して、毛も立派に生え揃つて居た。別れ際に老人は『君は杏の漿を飲んだから長生をするよ。それから、酒と色は深く愼まねばならぬ』と誡めてくれた。いよいよ洛陽への歸路に就いたが、途中いろ〳〵と氣を揉んだ、頼まれた包みを開けて見たくて堪らぬ、とう〳〵開けようとした處が風呂敷包の四角が忽ち赤蛇になつて頭を擡げるので遂に開けずに了つたが、受取つた叔父が開けるのを見て居ると、中から大麥の乾飯のやうなものが一升ばかり出たのであつた。叔父はその後王屋山に遊んで終

る處を知らない。婁沆は九十七まで長生した。

泰山四郎

泰山府君の四男との戀

四郎張を追ふて前途を戒む

鄒縣（泰山の南、二百里許）張といふ者は某縣の次官を勤めたこともある男だつたので、唐の貞觀十六年、求職のため長安の都に赴くに際し道すがら、泰山に參詣して禍を祈つた。岱廟には泰山府君、夫人、諸子の像が祀つてある、張は一々禮拜をしてまはつたが、第四子の儀容が取りわけ秀美だつたので、心のうちに、此の四郎さんと交際して詩酒の樂を偕にすることを得ば一生の願ひ足れり、仕官など出來なくとも可いと思うた。

泰山の麓から北東へ、長安街道を數十里往つた頃、後より數十騎、驅走で追付いて來たのは、『泰山四郎』であつた。『さつきの御懇情を重じて出かけて來た。』と言ひつゝ馬を近寄せて『君は今歳は選拔に會はれない、復た上京の途中に災難も生ずる、上京は罷めにされたが可からう。』といふのであつた。張は非常に其好意を感謝した。併し上京を中止するわけにも行かず、惜しい別れを告げて馬を急がせた。ところが百里ばかりにして日が暮れると、强盜が現はれて旅裝一切掠奪されてしまつた。張は天を仰いで『四郎さん助けてくれぬかなア』と祝ると、間もなく、四郎の車や從騎の一行が駈けつけて來た、手を分けて賊を追ひかけ悉く逮捕して、物品は取り還し賊共には數十杖を與はせて追ひ拂つた。

果然求職は駄目

四郎は路傍の大樹を指し、『兄が還りには此處で呼びたまへ、さよなら。』直ぐ歸つてしまつた。張は此から先は無事に、都まで着くには着いたけれど、求職は出來なかつた。すご〳〵故郷へ元の路を還りながら、約束の大樹の下に到つて、『四郎さん〳〵』と大呼した。三聲目を呼ばうとした時には、もう四郎の行列は目前にゐた。

父の府君に紹介す

四郎の邸宅に案内された。堂々たる殿堂は王者の威嚴であつた。少時もてなしたあとで、『父に會つておきたまへ。』と言つて、先に立つて導いた、十五六の門を潛つて、大きな殿堂に入つて拜謁するのであつた。張は泰山府君の前に進ませられたが、其像容にうたれて顏も得擧げなかつた。府君は侍者をして『そちは吾が兒と交遊であるのは喜はしく思ふ。數日ゆるりと滯在したが好い。』と傳へさせた。此の言葉を戴いて、張は引き退るのであつた

首枷を嵌められた妻に逢ふ

四郎の案内で見物やら宴會やら、張はおもしろく三日ほど過ごした。四日目の朝、獨り庭に出て逍遙してゐた、とある一棟の窓の内を、何氣なく覗き込むと、驚いた、自分の妻が其處に居るではないか。妻は數人の官吏の前に立つてゐる、首枷を嵌められて、囚徒だ、何だか取調べでも受けてゐる模樣だ。泰山は總ての死者が來る處だ、妻も死んだに違ひないと、恐ろしくもあり、張は急いで室に歸つたが、穩かならぬ其氣色に、四郎は『どうかしましたか』と訊く。今見た委細を話すと、四郎も大に驚いて『令閨が此處に來て居られることは知らなかつた。』と直に審判所に往き、問うて見ると果して然であつた。

夫人は善根の功で放免

棺中の妻蘇生す

やがて、審判官は、張の夫人に對しては、平生寫經持齋の功德あり、未だ死す可らざりしものなりとの理由を以て放免の處分を爲した。四郎は張に此後夫婦共に功德を積んで壽命を益すに勉むる樣諭した。夫婦は喜んで一緒に故郷へ向つて出立した。我家近くなると號哭の聲が聞えた、妻の姿は忽ち見えなくなつた、張が家に入つて急いで妻の棺を開かせた、蓋を除けると妻は嫣然笑つて起き上つた。

妻が死んでから蘇生するまでに六七日經つてゐた。

註（一）唐時代までは泰山の廟は專ら泰山府君を祀りしものと見ゆ。宋以後當廟には泰山府君を祀ゝす、現今祀れるは「泰山之神」といふ。

（二）死者の靈魂は皆泰山に歸すといふ信仰も今は衰へてしまつた。

（三）六朝及唐時代には寫經讃經及び持齋の效果は一切の罪障を消滅し災厄を除去することを得るものとして信仰せられてゐた。

羅公遠

傳授の手加減

唐の玄宗皇帝が羅公遠に就いて、隱形の法を學んだ。公遠は思ふ所があつて、傳授に手加減を加へて置いたので、一緒にやれば二人とも全く形が隱れて了ふけれども、帝が一人で試みると、帶の垂れや、冠の頂、手脚の端など、必ず隱れきれない所があつて、すぐ宮人に見付け出される。何遍やつても、どうも巧く行かないので、羅公遠に怨みを言はれた、彼は、

白龍魚服の譬

『陛下は天下を視ること黃帝の如くならずして、却つて道術を以て玩弄となさるから可けません。隱形の術とても悉く秘訣をお授け申したら必ず御濫用になつて民間に微行

りませんか。私も學問を始めた頃には、今にも功名手に唾して取るべしと先づ勢ひこんで居りましたが、もう三十を超えて、尙ほ碌々、野良仕事をしてゐるやうではつまりませんよ。」さういふうちに、盧生は眠がぼつとして眠氣を催して來た。

粟飯を炊き始む

此時、茶店の主人は、ばたくさ粟飯を蒸しかゝつてゐた。呂翁は旅嚢の中から磁製の枕を取り出して、盧生にあてがひ、

盧生美人を娶る文官試驗に及第す

『これをしたまへ。榮達は君が思ふまゝぢや。』と云つた。

その枕の兩端には、一つづゝ穴があつた。盧生が之を頭にあてがふと、何だかその穴が次第に大きく中が明るくなつて、入れさうに思へたので、ずつと入つてみると一軒の家があつた。そこは清河といふ所の崔氏の家であつた。盧生はそこの娘と結婚した、女は美人で家は豐かな有名な門閥家なので、盧生は俄に幸福な生活となつた。

とん〳〵拍子の出世

翌年進士の試驗を受けると優等の成績で及第して直に校書郎に任ぜられ、とん〳〵拍子で三年の後には同州の知事となり、次に陝州に轉じた。彼は土木が好きなので陝西から八十里の運河を開鑿した、地方の者は交通の便を喜んで頌德碑を建てた。其の後、刺史、採訪使の任を經て都に召還され名譽ある京兆尹に任ぜられた。此時、北方の狄が侵入し、之が防禦の節度使は敗死し、都の人心洶々となつたので、皇帝は北狄討伐に、適當の將帥を求められた、盧生は之に選ばれて、御史中丞・河西隴右節度使を拜命した、彼の方略宜しきを得て大いに敵を破り、忽ちに北狄の地九百里の地域を征略し、要害の地に三城を築き防備を全うして紀功の碑を立て凱旋した。

軍事上の成功

彼は殊勳者として恩賞を賜はり、御史大夫、吏部侍郎に任ぜられ、人望日に盛んとなつて來たので、他の宰相等は之を嫉み密に流言を放つて彼を中傷したゝめ、遠い南の端州の刺史に左遷されてしまつた。が、三年經つて召し還され、再び內閣に入り戶部尙書、中書侍郎と歷任し、賢相の譽を博した。すると又もや閣僚の嫉妬を受け、邊疆の武將等と結托して不軌を圖るものと讒せられ遂に審判に付せられることゝなり、突然彼の家に捕吏を差向けられた。彼は驚き悲しみ妻に別れを惜んで、

內閣に入る

『自分は山東の生れで、家には田畑數町あり、衣食に困ることはない、なまじ官祿を求めて到頭斯んな事になつた。昔のやうに短褐を着白馬に乘つて、あの邯鄲街道を逍遙することも今ではもう出來ないのだ。』

讒言に遭うて獄に入る

悲憤の餘り刀を執つて自殺しようとしたが、妻に押止められて意を果さず。遂に入獄

臺石中寸余の羅公遠

山芥の贈物

し悪戯など爲されませう、一層高技の者に出遇されたら至尊の身を辱められること、彼の白龍魚服の譬の様なことを惹起さぬとも限りません。』

憚る所なく言つた。

玄宗が怒つて彼を罵つたから、宮殿の柱に身を匿しながら、まだ帝の失政の數々を並べ立てた。帝益怒つて其柱を取外して毀した、すると彼はその臺石の中で又大言を吐く、卽ちその臺石を掘り出して見ると透き通つて、中に公遠の姿が見えて身の丈が一寸餘しかない。その石を散々に叩き破つた、その破片毎に一々公遠の形が見える。是には帝も閉口してしまつて陳謝した。そして公遠が姿は消えてしまつた。

後に蜀に使した者が黑水の道中で公遠に逢つた。笑つていふには、

『陛下に宜しく申してくれ、わしは羅公遠ぢや、蜀の當歸（山芥）を帝にことづけよう。』と

後玄宗は安祿山の亂の爲に蜀へ奔らねばならなくなつた。その時公遠が態々當歸を贈つた意味が判つた。

落第の盧青年と道士呂翁

大丈夫の志

邯鄲盧生の夢

開元十九年、道士の呂翁が邯鄲街道の茶店に休息してゐる處に、やつて來たのは土地の青年、盧生といふ者で、短褄を着て白馬に乘り、田圃へ行く途中立寄つたのである。呂翁と並んで腰を下ろし、四方山の話におもしろく時を過ごしたが、盧生は不圖自分の穢い服裝を顧みて、

『どうして斯う不遇なのかな、私は。』と嘆息した。すると翁は、

『君は、顏の艶も好く、體も肥つて健康らしいし、話も仲々さばけて居られる、どうして不運だとこぼされるのかね。』

『生きてるといふまでです、私には、ちつとも好いことはありやしませんよ。』

『それで好くないつて？　では一體どんなのが好いのかな。』

『大丈夫たる者は功名を樹てたいものです、大臣、大將となり鼎を列ねて食し聲を選んで聽き、多くの使僕を役して一家安樂にくらせなくつちや、男の生き甲斐はないぢやあ

粟飯を炊き始む

りませんか。私も學問を始めた頃には、今にも功名手に唾して取るべしと先づ勢ひこんで居りましたが、もう三十を超えて、尚ほ碌々、野良仕事をしてゐるやうではつまりませんよ。」さういふうちに、盧生は眠がぼつとして眠氣を催して來た。

此時、茶店の主人は、ぼたくさ粟飯を蒸しかゝつてゐた。呂翁は旅嚢の中から磁製の枕を取り出して、盧生にあてがひ、

『これをしたまへ。榮達は君が思ふまゝぢや。』と云つた。

盧生美人を娶る文官試驗に及第す

その枕の兩端には、一つづゝ穴があつた。盧生が之を頭にあてがふと、何だかその穴が次第に大きく中が明るくなつて、入れさうに思へたので、ずつと入つてみると一軒の家があつた。そこは清河といふ所の崔氏の家であつた。盧生はそこの娘と結婚した、女は美人で家は豐かな有名な門閥家なので、盧生は俄に幸福な生活となつた。

とん〳〵拍子の出世

翌年進士の試驗を受けると優等の成績で及第して直に校書郎に任ぜられ、とん〳〵拍子で三年の後には同州の知事となり、次に陝州に轉じた。彼は土木が好きなので陝西から八十里の運河を開鑿した、地方の者は交通の便を喜んで頌德碑を建てた。其の後、刺史、採訪使の任を經て都に召還され名譽ある京兆尹に任ぜられた。此時、北方の狄が侵入し、之が防禦の節度使は敗死し、都の人心洶々となつたので、皇帝は北狄討伐に、適當の將帥を求められた、盧生は之に選ばれて、御史中丞・河西隴右節度使を拜命した、彼の方略宜しきを得て大いに敵を破り、忽ちに北狄の地九百里の地域を征略し、要害の地に三城を築き防備を全うして紀功の碑を立て凱旋した。

軍事上の成功

彼は殊勳者として恩賞を賜はり、御史大夫、吏部侍郎に任ぜられ、人望日に盛んとなつて來たので、他の宰相等は之を嫉み密に流言を放つて彼を中傷したゝめ、遠い南の端州の刺史に左遷されてしまつた。が、三年經つて召し還され、再び內閣に入り戶部尚書、中書侍郎と歷任し、賢相の譽を博した。すると又もや閣僚の嫉妬を受け、邊疆の武將等と結托して不軌を圖るものと讒せられ遂に審判に付せられることゝなり、突然彼の家に捕吏を差向けられた。彼は驚き悲しみ妻に別れを惜んで、

內閣に入る

『自分は山東の生れで、家には田畑數町あり、衣食に困ることはない、なまじ官祿を求めて到頭斯んな事になつた。昔のやうに短褐を着白馬に乘つて、あの邯鄲街道を逍遙することも今ではもう出來ないのだ。』

讒言に遭うて獄に入る

悲憤の餘り刀を執つて自殺しようとしたが、妻に押止められて意を果さず。遂に入獄

貶謫、間もなく拔擢

當代無比の榮寵

した。

共犯者と認められた若干の人は殺された。彼も嚴刑に處せらるべきであつたが、宮中の人の辯護に依り輕減せられ、驩州の刺史に貶せられた。また數年を經るうち皇帝は彼の寃罪を覺り再び拔擢して中書令に任じ、つゞいて趙國公に封ぜられ、恩賜優渥比ぶものなき榮耀を極めた。

彼は五人の男の子を儲け、皆な官途に就き夫々一流の門閥から妻を迎へ、十餘人の孫も出來た。

彼は遠荒の地に竄せらるゝこと二度、宰相の位に登ること二度、武將として政治家として中央及び地方に歷任し、內閣に出入すること前後三十餘年、當代隨一の勢望を收めた、いよ〳〵老年になつて、骸骨を乞うても一向許されなかつた。其のうち病氣に罹つた。すると宮中よりは絕えず見舞を賜はり、有らゆる名醫が手を盡したが、彼はもはや再起の望みなしと覺悟して、最後の謝恩及辭別の上表を奉つた。天子は驃騎大將、高力士を差遣はして病氣を視させ、優渥なる恩召を傳へさせた。その夕方彼は長逝した。

盧生は此時大きな欠伸をして目が覺めた。彼はさきの茶店に寢てゐて、その傍に呂翁

夢醒む、粟飯未だ熟せず

がゐた茶店の主人が炊きかけた粟飯はまだ出來上らなかつた。すべては眠る前と同じ事だつた。彼は蹶然と起つた。

『あゝ、夢だつたのか。』

呂翁は笑つて、

『世の中のことは、すべてさう云つたやうなものぢやよ。』

盧生はしばらく憮然としてゐたが、やがて云つた。

『榮辱、得失、生死の道理を悉く知ることが出來ました。これはあなたが私の欲望を抑へるために敎へて下すつたのでせう。謹んで服膺します。』

彼は叮嚀に頭を下げて立ち去つた。

圍（一）邯鄲夢の枕、盧生の夢などと日本にも名高くなつてゐる話で能樂にも作られてある。

（二）此の傳說では盧生が道士呂翁から夢を見せられたのであるが、別にまた、仙人呂洞賓が此と類似の夢を見せられた話がある。

史論

桃を尋ねて山奥へ

齊州（今の山東）の刺史史論が獵に出たとき、或る山寺に憩うたが、桃の香が旨さうにほふので、僧に尋ねて見ると『近頃人が給れました。』と二個の大きな椀ほどの桃を出して來た。餓えてゐたので二個とも喫べて了つた、核が鷄卵ぐらゐある。

何處で獲たのかと問ひ訊すと、僧は笑つて『さツきは僞りを申したので實は、此處から十里許山奥に在るのです、貧道、行脚の折に發見して五六個採つて參りましたのです。』と白狀した。『それなら今から直ぐ供は此處に待たせておいて、徒歩で和尚と二人で往つて見よう』と迫き立てるので、辭み切れず、案内に立つて北の方の山の中へ分け入つた。五里ばかり行くと川があつた。『閣下には渡れますまい』と僧がいふ、史論は『なに渡れなくて』と僧がするのに倣つて、衣を脱いで頭の上に戴せ泳ぎ渡つた。それから又川を越え、山に登り、澗を下つて、段々往くと瀑があつて附近の景色が格別に好くなり仙境ともいふべき處に往きついた。數百株の桃の樹があつて、幹は皆低いが實は累々と熟し鼻を突くほど芽ばしくにほつてゐる。二人は大きなのを選んでやつと一ツ喫べるともう腹一杯になつたのである。史論が澤山採つて衣に裹まうとすると僧は押止めて、

仙桃は貪るべからず

『此處は靈境です、貪つては可けません、貧道、師匠に聞きましたが、昔し此處に來た人が五六個も懷に入れたが、路に迷うて歸れなかつたといふことです』史論は此の和尚も常人で無ささうに思はれて來たので、唯だ二個だけ取つて返ることにした。僧はくれぐ〳〵も他言を戒しめた。

史論は城内に歸つてから、此の僧を迎へにやつたところ僧はもう亡くなつてゐた。

權同休

便利な下男

權同休といふ落第秀才が、蘇州湖州にぶら付いて居て、貧乏のどん底で病氣に罹つた。かれこれ一年ばかり一個の若者を走り使に賴んで置いたが、甘豆湯が飲みたいから甘草を買つて來てくれと賴んだが出て行かぬ、只湯を沸す器たけ持つて來たから、横着者だなと思つて居ると、やがて木の枝をポリ〳〵折つて、一握ほど火の上へ二三回かざすと

服罪中の仙人だ

それが甘草になつた。どうも不思議だと思ふうちに、少時して砂利を一杯持つて來てザラ〳〵落したのが豆になつて居た。てつきり道者に違ひないと思つたが、その甘豆湯を飲んで見ると普通のものと少しも變らなかつた。そのうちに病氣も癒つたので、秀才は若者を呼んで『此の通りの貧乏だから仕方がない』と垢染みた着物を脱いで渡し、『これを何うかして、少し酒と肉を工面して來てくれ。それで村方の人達を招んで、小遣錢の才覺でも頼まうと思ふのだ』と言付けた處が、その若者は笑ひながら『工面にも才覺にも及びませんよ。私がして上げませう』といつて、一本の枯桑を切つて來て、幾本かの小切れに刻み、卓子の上へ戴せて息を吹き掛けると牛肉になつた。また水を瓶へ汲んで來て傾けたのを見ると旨い酒になつて居て、招かれた村の者は食つて飲んで上機嫌に醉つて行つたばかりか、返禮として立派な反物五十反をよこしてくれた。秀才は大に慚謝して、

『私は迂濶で、道者である貴方をこき使つて居たのは申譯がなかつた。今日からは改めて私を從僕として使つて貰ひたい』と申出でた。若者は『如何にも自分は仙界の者であるが、少し失態があつて、下賤の境遇に置かれて居るわけである。それで貴方に使はれて居るので、此處で一定の刑期に滿たない場合には、別な人に追使つて貰はねばならぬのだ。どうか今迄通りにして、此の役を濟ませて貰ひたい』といふのであつた。

仙力の及ばぬ物二つ

秀才もそれで承諾はしたものゝ、呼捨にして用を命じながら、何となく氣の毒らしい不安の色が顏に出るので、若者はこれでは不可んと思つた『貴方はどうも私の本望を遂げさせてくれぬから駄目だ』といつて暇を取ることにし、秀才に盈虛窮達の理を說き且つ、

『何物でもこれを化し得ざるものはないが、唯泥の中にある朱塗の箸と髮の毛だけは、どうしても藥力で化することの出來ぬものだ』といつた。何處へ往つたかその後の消息は判らない。

陳惠虛

石橋の冒險

天台山國清寺に陳惠虛といふ僧があつた。同寮の僧たちと石橋へ遊びに往つた。石橋は兩山の相迫つた所にある天然の石橋で、橋の下の谿流が瀑布と爲れる絶景、平生猿な

會眞府の境致

どでなくては渡るものが無い。衆僧は石橋きはまで來て下を見れば千仞の奔流に眼眩き脚が慄えて一歩も蹈み出せる者はなかつた。ひとり平氣でずん〳〵歩いたのは陳惠虛で、渡り終へて更に對岸の石壁に攀上つた。夕方になつても返らないので、待つてゐた僧達は詮方なくその儘にして寺へ歸つた。

惠虛は崖の外側へ出、おぼつかない小徑をたどつて行くと稍平濶になつて來て、立派な宮殿があつた。見渡す限り珍卉異花が咲き亂れ、高臺樓閣が十里ばかり、霞の間に連つてゐる。門を見上げると額に會眞府と題してあつた。左の門には金庭宮、右の門には桐柏とあり、三門相向ひ、金樓玉窓、百丈もある高いものだ。その右方の內側にまた右弼宮と題した一つの黃色の樓門があつて、數千の柱が見事に立並び、玉の階段にところどころ遣水が潺湲と流れ、人工天巧の美を極め、殆んど歸りを忘るゝばかりである。それで一向人影が無い。

一院內に入ると、五六人の童子が居て、顏を見合つてクス〳〵笑つて居る『此處は何ういふ處か』と再三問うた處が『張老に詢いて御覽』といふ。振り返ると、杖をつき花を持つた一老人が『こら俗人何しに來たか』といふ。惠虛は『石橋の向に羅漢寺があると

仙人の一小都會會眞府の制度と神仙の檢定試驗

仙道入門の要領

上眞王君の還御

いふことである、俗界へも遙に鐘の聲が聞えることがあるので、態々尋ねて參つたのですが、羅漢寺と申すは何の邊でありませうか』と詢ねた處、張老の言ふには『此處は眞仙の福庭、天帝の下府であつて、金庭不死の鄉と號し、眞を養ふ處の仙境なのだ。周圍百六十里、神仙右弼・桐柏上眞・王君の御支配であつて、列仙三千人、仙王、力士、天童、玉女、參萬人が住居して、仙人の一小都會となつて居る。一年に三たび太上老君が此の宮に降臨して、天下の仙道修業者の檢定を行はれ、修業程度の等級を定められる。神仙の都であつて羅漢の居所ではない、上眞王君と申上げるのは、周の靈王の王子で、上眞の位に在らせられるのだ』といふのであつた。

『神仙を學ぶことが出來ませうか』と惠虛は聞いて見た、『功を積み德を累ねれば肉身のまゝ昇天することが出來る。其れには、堅い意志と長い辛抱とがなければならぬ。其の方も此の福庭まで來た程だから、滿更見込がなくもあるまい』といふので、更に神仙學の入門に就いて詢ねた處が、張老は『內に神を保ち氣を練り、外は丹華を服用せねばならぬ、變化して神仙となるのは要するに神丹の力である。が、ぐづ〳〵して居てはいかぬ。上眞王君今しがた東海にお遊びにお出ましだつたが、もうお還りになる、護衞の者など

病中に大還丹を買ふ

に見つかつて咎められては面倒だぞ』というて門外へ連れ出された。十餘歩行くと國清寺に歸つてゐるのであつた。

それ以來、惠虚は仙道を慕ふやうになり、身裝などは毫も顧みず、煉丹方術を心得た人と聞けば如何に遠方でも訪ねて往つた。丹石の代價に注ぎ込んだ金も莫大なものだつた。晩年は終南山の捧日寺に籠り追々老衰したが、慕道の志は益盛であつた。一月ばかりの病氣で、大そう衰弱してゐると、ある大雨の後、一老叟が寺に藥賣りに來て、『大還丹（仙藥の最上品）は入らぬか』と大きな聲で境内洽く流して歩行いた、坊主共は笑ひながら病僧惠虚を指して、『あの老僧が還丹好きだから賣つてやれ』と云つた、賣藥叟は喜んで惠虚の處へやつて來た。惠虚は『還丹か、如何にも靈藥だ、一劑幾らか』と訊くと『資力次第です』といふ。惠虚は『一月も枕の上らぬ病態だ、二三錢しか儲へが無い、どうかこれで賣つて貰へまいか。』老叟は快く、五六粒の藥を出し詳しく服用法を敎へて行つた。惠虚は、早速服んで見た。雲水共が『どうだ還丹を買つて服んだか』と見舞つた處が、惠虚は『臭い、嫌やな臭ひだナ、傍へ寄つてくれるな』と遙に手を擧げて雲水共の近寄るのを遮り『もう全快だから、新しい着物が欲しい』といつて跳ね起きる大變な元氣に、

張老との邂逅

雲水共は驚きながら新衣を取つて與へた。惠虚は突然殿上に飛び上り、少時泰然として居たが、手を振つて衆僧に『さよならー』といひつゝ、飄然と浮き騰り、雲を踏んで昇天して了つた。これは大中（唐の宣宗）十二年戊寅の歳の事であつた。惠虚は、此の年桐柏觀へ往つて、道士達と、得道の徑路を語つた。曩の賣藥屋の爺は、そこに居た張老だつた。

古墳を盗發

陳　金

陳金といふ者は、江西節度使麾下の軍人であつたが、劉信が虔州を包圍した時のことであつた。金は同僚五人と共謀して大きな古墓を發掘した。棺の中には眞新しい白帷子を着た老人の屍體があつて、顏は宛ら生けるが如くであつた。開棺の時白氣迸り、墓中異樣なる妙香に滿ちて、蓋の上に粉のやうなものがあつた。プンと硫黄の氣がする。嘗て棺中の硫黄は藥になると聞いて居たので、陳金は懐中に入れた。外に目につく珍寶もなく、墓は元通りに埋めて、隊へ還ると、隊の者は驚いて、『ひどく好い香がする今日何

三百年墓中に在つて再生

處へ行つたのだ」と怪しんだ。陳金は竊に『成る程』と思ひ、彼の粉を水で全部服んで了つた。

當時虔州城内の者は、寺へ避難して居つたが、寺僧のいふには、この城中のある富豪の先祖に當る人に道術家があつた。子孫の言傳へた處に依れば、異人は硫黄を服むことを敎へられ、一旦壽命盡きて死んだが『死後三百年經つと解化の時期が來るから、墓を開けて見よ』と遺言した。今が正當、三百年だつたので、或は再生してゐるだらうと、僧は陳金と伴れ立つて、彼の墓を又た發掘して見た處が、棺の中には白帷子が一枚、蟬の脫殼のやうになつて居た。爾來陳金は全く無病になり、追々立身して淸海軍の將官と昇進し、年は七十を越えても、その健かに身輕なことは、青年血氣の輩も及ばなかつた。

尹眞人

尹喜の石函

犍爲郡（四川省内）から十餘里東方の深巖、石壁四壁せる中に一道觀があつた。その殿堂中に安置された三尺ばかりの石函には、實に鬼神の妙工と思ふばかりの精妙な鳥獸花卉が彫つてあつて、之を封ずる鎖が又極めて堅固に出來てゐた。土地の者は尹喜の石函と呼び傳へた。尹喜眞人が昇天の際これを弟子に授け、『この函には大事の符籙（道家のまじなひの文字）を納めてあるのだから、決して開けてはならぬ。開けたら大きな禍があるぞ』と言ひ遺したといふので、非常に之を畏敬して居た。唐の大曆（代宗の朝）年間に至り、この犍爲郡の太守に任ぜられた淸河縣の崔君といふ人は、非常な剛腹な人で、『これも新垣平（漢の武帝の時の詐僞方士）の詐り事だ』と、その鎖を壞せと命じたので、道觀の主人顏道士は、『尹眞人の誡もあり、仙官の掟を犯されぬ方が善い』と止めたが、崔君は『眞人は千年も前に死んだものだ。その人の石函だなと、乃公は信じない』と益々腹を立て、無理に函を開けさせたが、鎖が堅くて、びくともしない。そこで函の角へ太い綱を結び付け、數十頭の牛にその端を曳かせ、やたらにその牛を鞭つた。半日掛つて漸く開けて見た處が、中から出たのは、黄色の絹に朱で書いた符籙類の卷物で文字もはつきりとして、今書いたもののやうであつた。崔君は一通り、通覽して『何だ、めづらしい寶物でも出るかと思つて壞して見たが、符籙ばかりだ、つまらない』と本の通りに閉ぢさせたのであつた。

崔君の横車

仙人の封を破る

崔君はその夕歸宅すると、突然人事不省になり、三日の後に蘇生した。管内の文武諸

歸宅と同時に頓死

官がお見舞に行つて様子を尋ねると、崔君の話には、自分は甚だ愚昧であつた。神仙のことなどは聞いたことがないものだから、尹眞人の石函を開けて、爲めに冥府の官人に追捕された。初め紫の衣を着た一人が、自分の坐敷へ來て『自分は冥府の官吏だが、今命に依つて君を召喚するのだ、拒むことは相成らぬ。拒めば更に禍は大きくなるばかりだから早々參るがよい。』といふ。これは困つたことになつた。何とか申し遁れようとしたが、とう〳〵使者に連られ郡城を出て五十里程して冥府の廳へ着いた。處がそこの冥官といふのは故の宰相呂公であつた。自分に向つて『困つた事をしたではないか、尹眞人の石函を開くなどとは……上帝の命に依つて、君の祿と壽とを削るのだが、君何うしたものだ？』と云つて、下役を呼んで、祿と壽命の帳簿を調べさせた。下役が呂公に報告する處を聞くと『崔君の官は五任（一任は三年）でありまして、壽命はまだ十七年あります。只今上帝の符に準じて、五任の官は皆削り、壽命は十五年を削り、二年だけが殘ることになります。』と言つたのだと崔君は物語つた。崔君は後二年で果して歿したのであつた。

子寶を求むる刺史夫婦

畫料百萬貫の壁畫

黒叟

唐の寶應年代（肅宗の時）のことである。越州の觀察使皇甫政といふ人は、陸氏といふ美しい妻との間に子の無いのを殘念に思ひ、州内寶林寺の魔母神を信仰し、政は『一人の悴を授けて下すつたら、錢百万貫を投じて、お堂を建立いたします』妻は『願が叶へば、化粧料を百萬錢まで蓄めて神仙の壁畫を献上します』と云ふ願を掛けた。

程なく身重になり、玉のやうな男子が生れたので、夫妻は大そうな喜び、立派な一宇のお堂を建立し、妻陸氏が繪を獻げることになり、『百萬錢の値ある繪を書く名畫工を普く國中に募集した。希望者は毎日群をなすのだが、あまり報酬が多過ぎるので、天晴吾こそ書いて見せると云ふ自信が乏しいのであらう、名乘り出て引受ける者はまだ無かつた。處が一人劍南から來たと云ふ畫工が『私が畫きます！』と申出でたが、決して姓名は名乘らなかつた。いよ〳〵書くことになつたが、毎日朝から晩までお堂の壁間を瞰み獨りで首肯いて居て、一ケ月餘になつても筆を下さない。主事の僧が痺れを切らし『見て

一夜にして名畫成る

眞黒けな老大漢現はる

壁畫を破壞

ばかり居ないで、早く仕上げて呉れないか』と催促した。畫工は微笑して、『今晩中に畫いて了ふから、燈火の用意をしてくれ』といつた。其の通り用意してやると、成る程夜明迄に素破らしい立派な壁畫を書き上げて、書いた本人は何處かへ往つて了つた。

いよ〳〵出來上つたので、大規模な落成式を擧げ、諸方から大きな商人が店を出して、大そうな賑ひを呈した。政は更に吉日を擇んで、文武官を始め州内の人々を請待して、大舞樂の獻納を行つた。その日の正午頃であつた。その賑ひの中へ、容貌といひ、服裝といひ、甚だ醜惡な眞黒けな男がやつて來た。身のたけ八尺ばかり、破れ笠襤褸着物に鋤を擔いで居るので、門番が入場を斷つた。けれども政は『目出たい日だから入れてやれ』と云ふので通してやると、その男は土足の儘お堂へ上り、擔いで來た鋤で、燦爛たる件の壁畫を滅茶々々に叩き碎して了つた。驚いたのは參詣の群衆である、涌き返るやうな騒ぎとなつた。

『それ狼藉者！』と警戒の士卒がその場にふん捉へた。その百姓爺は平然たるものだつた。皇甫政以ての外に腹を立て、『貴樣は狂者だナ』といふと『否』といふ。『此れ程の繪が書けるのか』と言ふと矢張り『否』といふ。『どうして貴樣はかういふ大それたことをし

壁畫の天女はおれの嬶の美にも若かず

藁屋の中の美人

たかと一喝すると爺は『イヤ一體畫工が僭上なことをしたから、やつたんだ。旦那と奥樣と合せて二百萬錢を出して神仙の姿を書かせようといふのに、此れは何だ、只の人間の美人程にも書けてゐない』と吐き出すやうに嘲つたので、政は益湯氣を立てて怒る。老爺は手を打つて笑ひこけ『虚言だと思はつしやるなら、俺の嬶と較べたら判るだ』といつたから、政は『貴樣の女房は何處に居るか。』と尋ねると『湖南から二三里先の處が住居だ』と云つた。

そこで皇甫政は十人の者を此の爺に付けて、その女房を連れに遣つた。往つて見ると老爺は一軒の藁屋の中から十五六位の女子を連れて出たが、ほんのりと薄化粧をして、服裝こそ贅澤なものは着てないが、目の醒めるやうな美人だ。愛嬌を含んだしなやかさは、一目見て恍として了ふ程である。間もなく實林寺へ連れて來た。目に餘る程の群衆が、この美貌を見ようと潮のやうに雪崩れ寄る『ヤア壞された壁畫の美人などは問題にならない、素敵だなア』とわい〳〵云ふ。お堂の前へ出たのを見て、夫人陸氏も吃驚して了つた。皇甫政は爺に向つて『貴樣のやうなもの〻女房には勿體ない。これは天子の宮仕へに差上げたがよろしい。』爺のいふのには『どうか里へ歸つて家族共に別れを告げて

黒叟夫婦白鶴と化し去る

來る間お待を願ひたい』といふので、俄かに五十人の兵隊を護衛に付け、十人の腰元を添へて其家まで送つて行つた。渡し場へ差かゝつた。その女房はお附の者と共に大傳馬に乘り、亭主の方は小船で漕出した處が、急流の處へ行つて突然その女房は夫の方の小船へ飛び移つた。御附の者が大騒ぎで追蒐けたが、とう〳〵追付けず、手を取つて向ふへ行く二人は、やがて一雙の白鶴となつて飛んで行つて了つた。

地下の天倉自然に飲食の設備あり

薛　逢

河東の薛逢が唐の咸通年間綿州（四川省内）刺史となり、一年ばかりの後、ある洞府に入つた夢を見た。その洞内には多くの珍味佳肴が置いてあつて、人影は見えなかつたが、手を出さずに歸つたのであつた。翌日幕僚にこの夢の話をすると、或る一人が「綿州界の昌明縣に天倉といふものがあつて、洞中に自然に飲食物が備はつてゐる、修業者などが往々其を見つけて食ふことがあるさうです」といつた。

そこで薛逢は道士孫靈諷に親近の者を附けて見にやつた。洞内十里ばかり炬火を掲げて行くと、やうやく明るい處へ出た。更に三五里行けば廣々として世間の様子と異りもない千人も容れる程の大岩室があつた。平坦な處に石の椅子、卓などが並び、卓上に各種の食物が夥しく、今作りたてのやうに好い香がしてゐた。道士靈諷は拜禮の上それを食ひ、尚ほ薛公に話の證據にもと思つて其食物を二三品取つた。その邊一體に飲食材料の散らばつたのも見え、處によつては貯藏品の堆積せられたのが、見通せぬ程であつた。歩きまはるうち、溪流奔湍の對岸に、明媚なる山水があり、樓臺點々として配置された勝境を見たがその谿谷は越えなかつた、岸の砂に履の跡があつた、人の往來があると見えるが、其足跡が大きくて皆二三尺もあつた。歸途に就いて洞口を出ると薛公にと携つて來た食物は、皆石になつてしまつた。

州吏と道士の天倉探檢

沙上に印する二三尺の大足跡

地輿志の記述に據れば、少室山（河南省内中岳嵩山）に自然の五穀、甘果や、神芝、仙藥がある。周の太子晉が道を學び上仙した時、九十年間の食糧を遺して置いた。少室山は嵩山の西七十里にあり、東南より登ること四十里の地點を下定思といひ、更に十里の上を上定思といふ、その十里の間に大石門のある處を中定思といふ。中定思より西、崖の下に石室があつて、中に水あり、白色の石英を産する。室内には自然の經書と自然の飲食がある

中岳嵩山に於ける天然經卷及食料

食つた僧は石に化す

といふ。

又、天台山（福建省内）の東に洞がある。洞の奥十餘里の處に住民があり飲食物の店などがあるともいふ。乾符年代にある雲水の僧がこの洞に入り、市中を巡つて居る内に空腹を覺え、甘さうな香に我慢が出來ず、その食物を買つて食つた。同行の中の一僧はただ氣を吸うて飲食をしなかつた、更に十餘里行くと洞を出て、意外にも青州の牟平縣（山東省東北端）へ出た。すると、洞内で物を食つた僧は石に化して了つた。

世話燒き婆の家に金色の犢の車

王烈の石髓、張華の龍骨と稱する物なども既に修道の功を積んで居る者がたべて、登仙の緒たることが出來るので、凡人が食へば必ず石になるといふことである。

太陰夫人

唐の大宰相の盧杞が、若い頃、東都の或る古長屋に間借をして居た、隣に麻氏といふ老婆が居て病氣の時の世話などしてくれた。ある晩、麻婆の家の前に金色の犢牛に牽かせた美しい車が駐つた。ソッと覗いて見ると十四五歳の窮窕たる美少女が居たので吃驚して了つた。翌日麻婆を訪れると

『あれをお嫁さんにどうです、掛合つて見ませうか』

『吾々貧乏書生ではネ』

と含羞んだ。處が老婆は

『何かまひません。』

日が暮れると老婆はやつて來て、にこ〳〵顔でいふ。

『うまく行きました。就ては三日間齋戒をなさい。城東の廢觀で見合をしませう』

天女との見合ひ

約束した見合の日、往つて見ると散々荒果てて久しく、人の住んだ跡もない。その内俄かに電雷風雨が起つて、忽然、樓臺が現出した、金殿玉帳燦爛たるものである。空中に車の音がして出て來たのは、いつか覗いた時の少女であつた。盧杞の側に並んで

『上帝から人間界に配偶者を求めよとの仰せを受けましたが、貴郎は仙相がおありなさるとお見受けして、麻婆に申含めたのでありました。更に七日の齋戒がお濟みの上、またお目に掛ります』

麻婆を呼んで、天女は二粒の丸藥を渡すと、再び雷霆が轟いて嬌姿は見えず、舊のご

瓠を割つて航空船

天上の水晶宮

とく古木荒草の廢觀であつた。

七日の齋戒が濟んだ。婆は庭を掘つて先日の丸藥を下すと、忽ち芽が生え、蔓が延び、蔓には大きな瓠が生り二斗入りの甕ほどになつた。麻婆は庖刀でそれを眞二ツに切つて中のわたを除けた、三枚の油衣（防水布の着物）を用意して、婆と杞が二ツの瓠の中へ坐り込むと。忽ち風雷が暴起し上空に舞ひ上つた。滔々と波濤を行くやうな聲が耳を打つて、次第に寒氣がして來ると、婆は『油衣を着なさい』と云ふ。一枚ではまだ寒い、氷雪の中を行くやうだ。三枚重ねると大きに暖かになつた。その時婆は『早いでせう、もう洛陽から八萬里來ましたよ』といつた。

瓠が止つた。目覺むるばかりの宮殿で、墻も柱も悉く水晶の建築。武裝嚴めしき數百人の天兵が一行を迎へた。婆に伴はれて紫殿に入ると、百人許の宮女が居て、美酒佳肴の馳走を出す。花嫁の天女は杞に寄り添うて。

『貴方に三ツの資格を上げますから、その内好みの一つをお取り下さい。第一が此の天宮に留まつて天と同じ壽命を保つこと、第二は地仙となつて常は人間の中に生活するが、折々此處へ來られること、第三は中國の宰相となることですが、孰れになされます』

天女のむつごと

天使より三問

『此處に居られれば誠に結構です』と杞が答へたので、少女は大に喜び

『此處は水晶宮と申して、私は太陰夫人、最高級の仙格ですから、あなたも白日昇天の身となられます。併し定まつてしまふと變更が出來ませぬから、奏上を經ることにしませう』

と念を押し、清い紙に表文を認め、天を仰いで恭しく之を讀んだ、上帝に奏聞したのであらう。程なく東北の方に聲あり、『上帝の御使が見えました』との註進があつたので、太陰夫人は諸仙と庭に降りた、幢節、香幡（行列のはたさしもの）を擁して、一朱衣の少年を迎へて來た。朱衣の少年は嚴かに上帝の命を宣した。

『盧杞！　太陰夫人の狀に依れば、水晶宮の住居がいたしたいさうだが、左樣か』杞は目をパチ〳〵して居る。夫人が

『早くお答をなさい』

杞は矢張り無言であつた。夫人を始め左右の諸仙は大いに恐懼して、一人は奥に馳け入り、鮫綃五匹を齎し使者に賂うて勅問の猶豫を願つた。

少時經つてから、勅使は改めて尋ねるのであつた。

仙人ならむより人間の宰相を選ぶ

「盧杞、汝は水晶宮の住居を願出たる段相違ないか、若しくは地仙を願ふか、或は人間の宰相たることを願ふのか、明白に即答いたす様」

そこで、杞は大背を上げて

「人間宰相！」

朱衣の勅使はすツと退出する、太陰夫人は色を失つてしまつた。

「麻婆、お前の過ちだ、連れて歸れ」

盧杞は直ちに瓠に押し込まれた、再びヒユウ〳〵風水の聲がして、杞は埃だらけの長屋の一室へ歸り着いた。時は夜半であつた。塵埃だらけの榻は舊のままで、瓠と麻婆は見えなかつた。

田先生

田先生といふのは、九華洞中の大仙である。元和の頃、饒州の鄱亭村に隱れて、十數名の村童を集め、讀み書き、行儀を教へて居た。神仙だと知る者は一人もなかつた。

太守の愛孃産褥に死す

同じ饒州の太守、齊推といふ人があつて、娘を進士李生に嫁入らした。數月後に娘は身重になり、李生が長安へ進士試驗を受けに出た後で俄かに産氣が付いたので、州廳の官舍へ産褥を設けた處が産婦は、夢に鬼神が出て、『此處を腥い穢血で穢すことは怪しからぬ』と立退を命ぜられた。で其を父の齊推に語つた。けれども齊推は常に鬼神などを信ぜぬ人だつたので、その儘にして置くうち分娩し、産婦は惡鬼に責められ、鼻から夥しい出血をして死んでしまつたので、假葬りをして官道の傍に置き、任期滿了を待つて、故郷に還すことにした。

靈魂歸途の夫に寃死を訴ふ

明年婿の李生が落第して饒州へ歸る途すがら、野道の中で日が暮れた。すると、目の前に妻が現はれて、産の時に鬼神に取殺されたことを訴へ『どうぞ鄱亭村の寺小屋へ行つて、田先生に御願して、神力を借して貰へば、或は娑婆へ歸られます』との頼みであつた。李生はその言に從つて、寺小屋を訪れ、田先生に會つて大に哀願した。先生は「不可い」と言下に拒絶したが、李生は涕泗滂滂、夜になつても歸らず五體を投げ出して、如何にも切なる哀願の情が表はれたので、先生は子供達が皆歸つてから「それ程赤誠を示す上は、何を隱さう、が早くその事を頼んで來ないからもう屋舍（屍體を）が壞れてゐ

田先生訪問

忽然として桑林中に大宮殿出現

るのは困つたものだ、けれども一處置して見よう。』といつて出て行つた。李生が跟いて往くと、一丁餘で桑の林へ來た時に、夜は深く、四面昏暝であつたが、忽ち赫灼たる光明がさして、白晝の如く、そこには高壯なる門があり、内は嚴然たる廳府であつて、宜屬威儀森然として列なつて居る。先生は嚴めしき寶冠を着け紫の儀服を纏ひ、机を前に豊かに控へ王者の如き威容である。嚴肅な命令を下して、地界をお喚びになると忽ち各百餘騎を陳ねた十餘隊が、ぞろ〳〵と參入した。いづれも身の丈一丈餘の大兵であつた。取次の役が一々名を呼んで中へ入れた、廬山、江濱、彭蠡等の神靈が到着したのであつた。

下手人は鄱陽王吳芮

先生は『刺史の娘が惡鬼の爲めに殺されたる件は、受け付けた儘申理せぬは何う致したか』と訊問される。係りの役は『告訴人がないので着手いたしません、本件の下手人は、鄱陽王の吳芮であります。齊刺史の官舍は吳芮の居所でありましたので、分娩の穢血の流されるのを怒り、勝手に兇暴を働いたのであります』と申上げたので、天曹に牒を傳へ吳芮は直ちに召出して死刑に處せられ、更に審理の結果、李氏の妻は命數尚ほ三十二年あり、二男三女を産むべしといふことであつた。先生から更に『屋舍の壞れたのは、何う致すか?』とお詢ねがあつた時、一人の老吏が出て『昔東晉の鄴都で一人の誤死があつて、矢張り屋舍が壞れて居るのを生き還らせたといふ、即ち例があり、今回の事件と同一なのがありますが、當時は葛仙君が居て、英斷を以て魂だけで本通りの身を作りました、尤も其者の壽命の盡きた時は、殘るべき死骸が無かつたのであります』と申上げた。先生は『よろしい、其通り取り計らへ』との裁斷を下し、李生の妻の魂魄を召び出して一體とし膠で塗り合はせ、大王が復活を申渡されると立派に生き還つたのである。

葛仙君の前例

桑林に立つ三人

一同の官屬が退散した。その後へ殘つたのは李生と妻と先生と三人だけ、元の桑林の中に立つて居た。先生は『此の話を人間にしてはならぬ。只自然に再生したと云つて置け』と言つたが、李生夫婦は家へ還つてから、壽命も子供の數も前に聞いた通りであつた。

張志和

字は不同、唐の金華の人である。母が腹の上に楓が生えたと夢を見て生んだ。肅宗のとき、進士に拔擢せられ志和といふ名を戴いて、翰林に列した。始の名は龜齡

釣と畫と酒

であつた。兄の名は松齢だつた。

親を見送つてからは仕を辭して江湖に悠遊し、自ら烟霞釣徒或は玄眞子と號した。釣を垂れるけれども、魚を捕る所存でないから餌をつけなかつた。畫を善く描き、酒は三斗も飲んで醉はなかつた。眞を守り氣を養つて雪の中に臥しても凍えず、水に入つて濡れなくなつてゐた。

陸羽や顏眞卿と仲善しで、顏が湖州の刺史となつてから、毎日相唱和してゐた。眞卿が平望驛に來遊した、志和は共に飲んだが宴酣にして席を水上に敷き泛べ、自分は其上に坐して酒を飲んだ。席は宛ら舟の如く浮んでゐた。

そこへ鶴が飛んで來て、彼の頭上に輪を描いて舞つた。彼は手を擧げて眞卿に挨拶しつゝ天へ昇つて行つた。

蕭洞玄

王屋山の靈都觀の道士蕭洞玄が、神人から仙丹の秘訣を授つた時に、神人が『法はとれで盡きるのだけれども、も一人の同志を得て、始めて表裏完成するのだから、その人を探すがよいと教へて去つたので、洞玄は天下を周遊して到らざる處なく、十餘年にもなつてまだその人に會へなかつた。貞元の年號に變つた頃、浙東から揚州の陵亭埭へ行つて、舟の中に宿つてゐると、丁度船の集つた時で、舳艫萬艘、其の間を無理に漕ぎ拔けようとする上下の船の船頭が、いづれも黑い臂を張つて押し合ふ態は物凄いばかりであつた。するとその船の間に一人の男が、右の臂を挾み折られた。見る者はぞッとする程の大怪我なるにも拘はらず、本人は眉の毛一本動かさず、うんとも云はずに船室へ歸り平氣で飲み食ひして居る。遙に望見して洞玄は『是れだ！　天の引合せだ』喜んで、名を聞くと終無爲といふものであつた。

二人は深く交を結び、相俱に王屋山の道觀に歸り、洞玄は煉丹の秘訣を無爲に示して、互に工夫を凝らすこと二三年に及び、修行し上げた時、洞玄は改めて無爲に向ひ「いよいよ滿願の行を勸めようと思ふが、その晩には自分は法術を守るから君は神丹を煉る竈を守つてくれ、五更まで無言の行を通せば、二人手を携へて昇天が出來るから』といつた。無爲は『自分は別段の能はないが、忍耐へぬいて、物を言はぬだけのことは君が

腕を折つた男が合棒

滿願の行

既に知つてゐる通りだ。よろしい、行らう』と遂に壇場を設けて、金鑪を焚き、丹竈を飾ること十日、洞玄は嚴かに壇を遶りて虚を歩み、無爲は藥竈の前に端坐し、五更までは死すとも言はずと心に誓つて行ひ澄ました。

誘惑百出頑として動かず

やがて、一更の後、忽然として二人の道士が天降り、『上帝からのお尋ねである。道法が成就したかどうか』と問うた。無爲默然として答へない。須臾すると多勢の仙人が見えた。王喬、安期生等の輩であるといふ。無爲に向ひ『先程上帝が近臣を以て御尋ねがあつたのに何故に御答を致さぬか』と詰問した。無爲は依然答へない。今度は艶麗花の如き二八ばかりの少女が現はれ、傍に寄り添うて嬌態の限りを盡し、柔かい纖い手を無爲の肌に觸れて、極端な挑發を試みたが、閑然として一顧をも與へない。すると虎、狼等の猛獸十數種類が無爲の前後左右から、躍りかゝり、物凄い咆哮と共に一咬みに咬殺さうとするが、無爲は微動だもしなかつた。又少頃すると、亡くなつた父、母、祖父や祖母などが現はれて、『お前は私達に逢うて、なぜ挨拶をしないのか。』といふ。無爲の頰には涙が流れたが、とう〳〵物を言はない。忽ち身の長三丈の夜叉が現はれ、赤銅の針を植ゑたやうな髪を逆立て電光の如き眼を怒らし、血盆の如き口には鋸の牙を鳴らし、

驀然と無爲に衝いてかかつた。無爲は矢張りビクともしない。

飽くまで無言でとほす

すると今度は黄色の衫を着けた人が、二人の捕手を從へて來て『大王の召喚だ、行きたくなくばさう言へ、』と迫つたが、無爲は飽くまで答へない。黄衫の人は無爲の襟髪を執つて引き摺らせた。巳むを得ぬので引き摺られて行くと、大きな官府へ着いた。正面に几に凭つて居るのは平等王といふさうである。怖ろしい聲で『其方はまだ此處へ來る身ではない。一言申開きをすれば返して遣る』と云はれたが、無爲は矢張り無言であつたので、今度は地獄の中を引廻され、見るに堪へざる慘虐の數々を見せてから『どうだ言はないなら、此處へ打ち込むが』と云はれたのには無爲も少々怖れたけれども、とう〳〵無言で押し通して了つたので、平等大王は『これは駄目だ、本へ歸れぬやうに、生れ變らせて了へ』と嚴命を下した。流石の無爲も、これには尠からず狼狽したが、もうその時は覺えがなかつた。』

氣が付いた時は、もう帝都長安の貴族王氏の妻の胎内へ生を託して居た。胎内に居る間は洞玄との誓約を明瞭に記憶して、完全に無言で居た。生れてからも決して啼かなかつた。王家は親戚知巳を請して祝宴を張り、誠に賑かなことであつたが、乳母が抱えて

出て、『可哀さうに、どうして啼けないでせう』と不思議がつた。兩親は行末立派な者になるやうと貴郎といふ名を命け、日増しに智惠が付き三歳で歩行くやうになつたが、いたづらをしない、五六歳になつても物を言はぬ。十歳の時は筆を操れば、立どころに文章になる。元服の頃には、人品といひ擧動といひ、模範的な青年になつたが、口がきけないので、官に就くことが嫌やだといふので、富裕の家だけに、心の儘に贅澤を盡し、廿六で矢張り富豪の娘で評判の美人を妻に迎へ、一年のうちに長男が生れた。その子も聰明な端麗な子で、貴郎は非常に鍾愛し、子供狂者と云はれる程であつた。

一撃で修行をむだにす

ある麗かな春の日であつた。貴郎夫妻は庭園へ子供を連れ出して遊んで居た。庭の中央に十人坐れる程の大きな石があつたが、突然妻がその子を石の上へ持つて行つて、貴郎を顧み『あなたは十分私を愛して下さることは知つて居るが。今日こゝで一言私に物を言つて下さらないならば、この子を石へ落して殺して了ひます』と今にも落さうとするので、奪ひ取らうと爭つたが、取り得ない、妻は子をさしあげて石に叩き付けた。子供の頭は粉碎した。『あッ』と思はず貴郎は驚きの聲を出した。

恍乎として我れに返つて見ると、身は丹竈の前に在つた。時に洞玄は壇上の修法が方に畢りに垂〳〵とし天も今曉けんとする所であつた。無爲の嘆聲に依つて忽ち丹竈は所在を失して了つたのであつた。二人は慟哭した。

修行は更に行り直しを要した、彼等は其を完成して後、終る處は知られずなつた。

賈躭

見當のつかない使者

唐の相國・賈躭は、滑洲の節度使に一揃の鹿皮の衣を作らせ、一健脚の兵卒に持たせ、手書を添へて『これを山中の荆棘の生滋つた處へ往つて、張尊師といふ方を尋ねお渡しして來い。何處の山でも構はない』と命じたので、使卒も大に當惑したが、兎も角山へ往つて百里餘り分け入つて見た處が、そこに荆棘の深い非常に嶮岨な處があつた。その中腹に石壁聳え立つた下で、二人の道人が碁を圍んでゐた。使者が丁寧に頭を下げると、道者は『ア、賈公の使が來た。』と手紙を開いて見て高らかに笑ひ、返事の手紙を渡し、『なぜさう富貴にへばり付いて居るのかと傳言してくれ』といつた。使が歸ると賈公は甚だ喜んで重賞を與へた。

井中の道書を盗む

又或る時井戸の中から數卷の道書を採らせ、十數人の筆生に書寫させた。寫し畢つた時、突然、一道士が飛び込んで來て、賈公の姓名を呼び『道書を盗むとは不都合千萬だ』と怒罵した。賈公は平あやまりにあやまり、道士はその書を持つて行つて了つた。

忠實な從僕

又鄭州の僕射陂の東に一つの塔がある。賈は使に手紙を付け塔の中から一羽の白鴉を取つてくれと、州の役所へ懸け合つた、州では塔を掩うて、果して白鴉を捕へ得たので、籠へ入れて送つたことがある。どういふ譯か世間の人には判らなかつた。賈公といふ人は、天上から貶謫を受けた仙人であるといふ話は種々あるが、就中この三つが尤も有名であつた。

丁　約

唐の大曆中のことである、西川採訪使韋行式の姪子威といふ道書の好きで神仙修練に凝つた青年があつた。丁約といふ從卒が、萬事の用をたして居たが、取り廻しが親切で、且つなか〳〵の恪勤家であつたから、子威も非常な親しみをもつて居た。處が、ある日、

お別れに一粒の仙丹

尙ほ兩塵の隔あり

突然しほ〳〵として『私は餘所へ往かうと思ひます』と言ひ出した。子威は『苟も軍籍に在る者が、勝手に出來るか?』と甚だ不機嫌であつたが、丁約の言ふには『もう仕度が出來て居るのだから、留まる譯には行きません。しかし私も滿二年お側に居たので、忘れ難い思ひがいたし、何か恩報じをしたいとは思ひます。實は私は漫然と飯を貰つて食ひ、べん〳〵と俗間の生活をいたす人間ではないのでした。ここに一粒の藥があります。お別れに之れを差上げませう。この藥は長生するのではないが。定命のうち病氣をせぬだけのものです』といつて、懷から粟粒のやうな藥を出して進呈して『貴方は誠に道情が深く。卑吝の心が一點も無い、いづれ俗界を棄てられるが、まだ兩塵の隔たりがあります。』と、子威改まつて、『兩塵とは何か?』と詢ねると『儒者の方では「世」といふ、佛敎では「劫」といふ、道家ではこれを塵といふのです。折角修行なさい、また五十年も經つたら、京師の近くでお目に掛ります。けれどもその時驚きなさるな』と言つて、丁約はフイと出て行つた。子威は驚いて跡を追はせたが、所在不明であつたので、上官に歩卒丁約逃亡の報告を出して、兵籍を刪除したが、子威の心には丁約の事が氣になり、より〳〵氣を付けて蹤跡を探したが、遂に判らなかつた。

五十年後の邂逅

その後子威は、明經進士に及第し、貧乏縣の知事を勤めて、年も六十を超え、鬢髪も眞白の善い老人になつた。元和十三年いよ〳〵奉職先から京師への歸途、驪山の宿屋へ泊つて居ると。表通が大そう騒々しい。『何事が起つたか?』と詢ねた處が、劉悟が、逆賊李師道の一味を逮捕して、今京師へ護送する處だといふ。出て見るとなる程、賊團の一味は手枷足械嚴重に縛められ、物々しい軍隊に警護されて居た。と見ると、その囚徒の中に丁約が居た。兩手を後へ括られて西の方へ追ひ立てられて行くのであつた。見掛けは昔の儘の若者なので、不思議なことだと思うてゐると、幾百千人見物の黒山の中に、丁は早くも自分を見付け微笑しながら遙に『臨卯でお別した頃を覺えてますか一瞬五十年、よくお目に掛りましたナ。どうぞ次の驛まで送つて下さい。』といふ。

獄窗から酒樓へ

滋水驛に着すると、囚人は驛舍に入れられ、小窓から食物など與へられるのであつた。子威が覗きに行くと、丁約は手械足枷を脱して、それへ席を被せ、ヒョイと窓から飛出し、『サア行きませう』と子威の手を携へて、とある旗亭に上つた。さて『暫くでしたなア、けれども貴方はひどく年を取りましたなア、』と、しげ〳〵顔を見られたので、子威は『仙兄は立派な先見の明を有つて居ながら、何だつて謀叛人などに與したものかな

囚を脫するは容易

ア。』といふと、丁約は『其れは前から定まつて居たことだ、前に蜀で別れるときに京の近くで會ふと言つておいたではないか? 今更不思議がらぬが善い』といふ。子威が『では刑に就くのか。』と詢くと『道術の中には、尸解、兵解、水解、火解、その他いろ〳〵ある。嵇康、郭璞などは兵解だつたのだが。俺もそれで脫けようと思つてる、韓信彭越の徒のやうな土くれ同然の死とは異ふ。俺が逃げる氣なら、此處からでも逃ける、誰が捕へることが出來るものか。』といつた。子威がまた話し掛けると、丁約は『筆をかせ』といふ、子威は文房具袋から出して遣つた。『明日の刑場は大變な見張りであらう。どうして脫けるか』といふと丁約は『まだ〳〵! 夕方から豪雨が來るから執行は迚も出來ぬ。二日で雨は止むが國の故障で延びる。十九日がいよ〳〵期限だ。その時君、も一度會はう。』とその場は別れたが、丁約は先刻のやうに窓から入つて枷械をはめて坐つた。

夕景から風が吹き出し、夜中には大變な豪雨になつた。明けると一面の滑泥るみで行動が取れぬ。刑の執行は延期された。二晝夜で豪雨は止んだが、今度は皇族に不幸があつたので三日間の廢朝となつたから、結局十九日が死刑執行の日となつた。その日子威は夜の白々明けから、馬にも馬丁にも十分腹拵へをさせ、矢來の外に詰めかけた。正午

筆一本が身代りの斬罪

の時の號音のころには、何萬と見物が集つた。爪も立たぬ鮨詰の雜踏に押され、隅の方に小さくなつて見て居ると、囚人はぞろ〳〵と入場した。丁約はもう正確に子威の所在を見出して居た。遙に目で知らせ笑つて、三四度うなづいた、いよ〳〵順番が來た、丁約の後に氷の如き白刃が躍つたと見ると、スパリ斬り落した。それは子威の目だけには曩に渡した一本の筆だつた。丁約は眞に紫電一閃の間に刑場を躍り出し、群集の中を大り拔けて子威と共に小料理屋へ上つた。暫く歡を盡し、さて子威に向ひ『いよ〳〵これで自由の身になつたが、まだ兩塵を障てゝゐる、崑崙の石室で御待ち受けする』と料理屋を出て、飄然西へ出かけたが、數十歩去ると見えなくなつた。

蟻の王國（大槐安國）

山東の淳于棼は酒豪で、財產あるに任せ、常に諸方の豪傑を招いて食客にしてゐた。曾つて、淮南軍の裨將に補せられたが、酒癖のために失脚し、爾來落魄したけれども相變らず酒に浸ることを止めない。

大槐樹下の鯨飲

紫服を着た二人の官人に迎へらる

思ひ掛けぬ王女との緣談

往年の飲仲間

彼の邸は廣陵郡東十里の所にあり、家の南面に古い槐の大樹が一株、その枝は附近二三千坪を優に蔽うてゐた。貞元七年（唐德宗）九月の或る日も、彼は例の豪傑達と此の樹下に酒宴を催し鯨飲したが、惡醉したので、二人の友人が彼を家に運び、『安眠したまへ、僕達は足でも洗つて、君の少し快くなるのを待つて歸らう』と云つた。その中、彼はいつか夢現の境に入つてゐた。

ところへ紫の官服を着た二人の使者が、槐安國王の命だと云つて迎へに來たので、彼はわけわからずに使者に隨ひ門へ行つた。そこには白馬をつけた青塗の車が待つてゐて、七人の從者が彼を扶けて車に乘せ、一路彼の大槐樹の洞へと急ぎ、使者はずん〳〵その中へ入つた。彼は不思議に思ひながら、矢張り使者に隨つて行くと、四圍の風物悉く此世のものと思へぬ程珍らしかつた。やがて、一大城郭があり、城下は甚だ雜閙してゐた。朱塗の樓門が高く聳えて、額には金文字で『大槐安國』と書いてあつた。

淳于棼は、案内されて一先づ東華館と云ふ所で休息してゐた。間もなく、右丞相がうや〳〵しく進んで來て、彼を迎へたのは、王女と婚姻の爲めだといふ事を告げた。

そこで彼は右丞相の案内で、參内することになつたが、一の朱門を潛ると諸種の武器

が飾り立ててあり、數百の官吏がずらりと堵列してゐた。その中に食み仲間の周弁がまじつてゐた、彼は無上に悅しかつた。大きな御殿に昇ると、正面には國王であらう、白い服に朱い冠の氣高い老人が端然と着坐してゐた。恐懼拜伏すると、國王は

『予は御尊父の懇命に依り次女瑤芳を御身に參らせん所存なるぞ。』

と嚴かに宣はせられた。彼は唯頭を垂れたまゝだつたが、やがて、王の命により貴賓館に引き退つた。そして、これは確かに、父が北邊の征伐に從軍中敗北して行方不明となつてゐるが、恐らく北蕃を經て此國王と交通することにでもなつてゐるのだらうと考へた。

少女の追憶

共夜、盛大な宴會が開かれ、結構な贈物が飾られ、華陽姑、清溪姑、上仙子、下仙子などと云ふ美人が多數の侍女と共に席に侍し、妖艶な風情で彼をもてなした。その中の一少女は、過ぐる上巳の日に禪智寺で淳于棼が馬から下りて來るのに出逢つて色々話した事や、七月十六日に、契元法師の觀音經講義を聞きに行つた際、簪を喜捨したのを見て、その席にゐた彼が感心して自分の名だの家だのを聞かれたが、その時には答へなかつたと云ふ樣なことを物語り、彼に、覺えてゐるかと訊ねたから、『その事なら覺えてゐる』と答へた。

舊友田子華に逢ふ

話の中に、三人の盛裝せる役人が來て、國王から駙馬（天子の聟）お附き役を命ぜられた者だと告げ、その中の一人は駙馬を知つてゐると云つた。淳于棼がよく見ると、それは飲み仲間の田子華なので、なつかしさに確く握手した。そして、どうして此處にゐるのか、また、周弁もゐる筈だが知つてゐるかと訊ねた。田子華は、右丞相・武成侯段公の引立で此國に足を止めてゐると答へ、周弁は今、司隷（警視總監の如き官）の役で、權威が盛んだと云つた。そして、どうか自分を見棄てないやうにと願つた。

始めて王女を視る

此時、傳令が來て駙馬閣下のお出を促したので侍者等は起ち上つた。行列中には妙なる音樂を奏する數十名の少女が居り、美觀眼も眩まんばかりだつた。彼は車中に端坐し、含羞みながら落着かなかつた。田子華は時々話しかけては慰めた。

やがて、修儀宮に着く。淳于棼は車から降り、叮嚀な出迎を受けて御殿に送り込まれ、そこで始めて王女を視た。王女は金枝公主と云ひ、十四五で仙女のやうな美しい人であつた。

彼は夫婦仲睦じく、萬事の取扱ひ國王に次ぐくらゐ優遇された。或る日、王の命で、

都の西方靈龜山に狩獵したが、此山は峻嶮で附近には湖水河川があり、樹木茂りて無數の禽獸が棲息してゐた。大獵を獲て夕方歸つた。

十八年前に別れた父と書信の往復

淳于棼は、或る時、十七八年前別れたぎりになつてゐる父に一度逢ひたくなつたので、王に此の由を願つたが、王は、父が彼の地に在つて大切な役目を仰付かつてゐるが、交通は困難だから行かずとも手紙を出せば好いではないかと答へた。そこで、彼は贈物と共に手紙を持たせてやつた。數日の後、返事が屆いたので、取る手遲しと披見すると、昔に變らぬ筆蹟で詳細に現狀を報じた上、自分は僻遠の地にゐるから逢ひに來るには及ばぬ。何れ丁丑の年には逢へるからと書いてあつた。彼は熱涙に咽んだ。

非常な榮達

彼は妻の勸告と王の懇命により、南柯郡の太守になり、輔佐役として周弁、田子華を伴つて就任した。周は司憲に、田は司農の各局長に夫々任命された。善政二十餘年、人民は悅服して太守の德を頌し、功德碑を樹てるやら、生き神樣として祀るやら大變だつた。此の間に、彼は二男二女を生んだが、門閥を以て男は高官に就き、女は王族に嫁ぎ、一門の榮華は輝くばかりだつた。

不幸つゞき

突然隣國の檀蘿國が攻め寄せ、周弁が兵三萬を率ゐて瑤臺城に防いだが一敗地に塗れ

單身繩に逃げ戻ると云ふ醜態を演じた。その後周弁は憂憤の餘り疽を發して死んだ。間もなく淳于棼の妻も亦病死したので、彼は力を落してしまひ、太守を辭して都に歸つた。妻の遺骸は都の東端、盤龍岡に葬られた。

驚くべき不吉の密告

淳于棼は南柯郡太守で評判が好かつたので、都に歸へると訪問、答禮、宴會と交際廣くなり、次第に威勢が盛んになるにつれ、王は聊か疑惑を感じた。時しも一通の密告が宮廷に投ぜられたが、それには次の如く書いてある。

『天文に據れば、國に大事變勃發の兆あり、首都は遷徙し、宗廟は崩壞し、他國との戰鬪起らむ。禍根は親近にあり。』

人間に歸れとの仰せ

王は、淳于棼が其の禍根だと考へ、彼に閉門蟄居を命じた。彼は怏々として樂まない。或る日王は彼を招き、姻戚二十餘年、不幸にして娘が夭折したのは殘念である。子供等は引取つて面倒を見ようから、久し振りに家へ歸つたらどうかと諭した。

牛車に乘つて歸國

『家はこゝで御座います、何處へ歸へりませう?』

そこで、王は微笑して淳于棼が人間であることを敎へた。彼は忘れてゐた今迄のことを急に思ひ出し、涙ながらに歸國を決心した。そして、悄然として粗末な牛車に乘つて、

槐樹下に夢の跡を探る

もと來た穴へと歸路に着いた。穴を出ると、すべては最初に召された時と同じだつた。家に入ると榻の上に自分の體が横臥してゐる。あきれて突立つてゐると送つて來た役人が大聲で自分の名を呼んだ。ハッと氣付くと、二人の友人がまだ足を洗つてゐるのであつた。ほんの一寸の間に、彼は一生を過ごして來たのだ。彼が友人に夢の話をすると早速槐樹の下へ行き、穴を捜し出したので、下男に命じて入口を切りひろげさせ、穴の内部を探査すると、ベンチ一脚を入れ得る洞があり、その中に蟻が密集し、中程に白い翼に朱い首をした三寸位の大蟻がゐた。これが大槐安國王なのだ、探査の歩を進めると、南柯郡、靈龜山、盤龍岡と覺しき數個の洞があつた。其のまゝにして壞さずにおいたが、夕方暴風雨があつて、一蟻の姿も見えなくなつた。これは夢の中の、國難來るとの豫言に的中してゐる。

蟻の國の大國難

それから檀蘿國征伐の事を思ひ出し、其處等を捜すと五六町距つた所に檀槐の大樹があり、藤蘿が卷着いてゐて、そこにも穴があり、中には矢張、蟻が密集してゐた。これが檀蘿國なのであらう。

蟻ですら斯くの如き我等の到底測知し得べからざる神秘がある。況や大いなる天地の間にはどんな不思議なことがあるか想像の及ばぬことである。

酒色を絶ち道に入る

その時、淳于棼は、十日許見えない飲み仲間の周辨や田子華のことを思ひ出し、下男に樣子を見にやると、周辨は急病で死に、田子華も亦寢込んでゐると云ふことであつた。彼は南柯の榮華の空虛なこと、人世の倏忽なることを深く感じて、神仙の道を修め、遂に意を決して斷然酒色を斷つたが、三年後四十七歳で長逝した。此の年は父の手紙にあつた丁丑の歳だつた。

もの食はぬ裸の牝馬

伊祁玄解

彼は髪黑く、顏若く、氣自ら香潔で、常に黃の牝馬に乘るのであつたが、其馬に秣を食はせるでもなく、轡や手綱をつけるでもなく、唯背に青毛氈をかけて置くばかりであつた。

常に青州齊州の間に遊んで、人と千年の古事を語るのに皆目擊した事のやうであつた。唐の憲宗彼が事を聞いて召し寄せ、九華の室に居らしめた。毎日龍膏酒を飲ませ、帝自

仙草栽培

木刻りの蓬萊山

身で彼を訪ねて頗る敬つてゐたが、本人の玄解は魯朴で臣下の禮など更に知らなかつた。帝は尋ねた。

『先生は年を取つても顏色は老いないのは何故です』

『海上に靈草があるのを食ふばかりです』といふので、其種を殿前に播いた。靈草といふのは雙麟芝、六合葵、萬根藤であつた。帝が之を食すると頗る効驗を覺えた。

玄解は辭して東海に還らうと願つたが帝はまだ許さなかつた。そこで宮中で木を刻んで蓬萊の三山を作り、極彩色の麗はしいものとした。帝は元日に玄解と此作り物を見て、

『上仙でなくては此境には入られまい』といつた。

玄解は笑つて、

『蓬萊三島僅かに咫尺の間ではありませんか、何の難かしいことがありませう、私は無能ながら試みに一遊して見ませう』と身を空中に躍らすと見たら、漸々に身體が小くなつて、到頭其の金銀で作つた蓬萊宮の中へ入つてしまつた。人々驚いて名を呼んだが復び出て來なかつた。帝は彼を惜んで病氣となる程だつた。其作り物の山には藏眞島と名をつけた。

桃の樹から落ちて仙化

其後十日ばかりして、玄解が例の牝馬に乘つて、海を渡つて行つたと、青州から報告があつた。

韓湘子

字は清夫、韓文公(退之)の猶子である。

磊落不羈で純陽先生(呂洞賓)に遇つて、其から從いた歩いてゐたが、桃樹に登つて墮ちて死んだ。そして尸解した。

それから文公の前に現れたから、公は學を勉めよと勸めた、湘は、

『私が學ぶところは公が學ぶところと違ひます』と澄してゐたので文公は悅ばず、その志を見ようと詩を作らせた。

青山雲水の窟は、此の地これ吾が家なり
夜更けて瓊液をすゝり、朝とく紅の霞を喰ふ」
琴は碧玉の調を彈じ、爐には白珠の砂を煉る

韓退之へこまさる

牡丹花中に金字の名詩

寶鼎には金の虎を存し、芝田には白き鶴を養ふ」

一瓢の中に造化を藏し、三尺の劍能く妖邪を斬る

即坐に酒を造ることを得、寸時に花をも開かしむ」

能く我に學ぶ人あらば、同じく共に仙境の花を看ん」

文公は此詩を見て、造化を奪ふ事は出來まいと言つたが、然し即座に樽を開いて醇酒を滿へ又土を寄せ集めたかと思ふと一枝の碧花を咲かせて見せた。其花は牡丹に似て大きく、色は更に麗はしかつた。花間に一聯の金字が讀まれた。

雲は秦嶺に横つて家何くにか在る。

雪は藍關を擁して馬前ます

文公は此句の意味が解せなかつた、湘は『そのうちに御自分で體驗なさいますよ』と澄してゐた。それから幾もなく、文公は佛骨を諫むる表を奉つて勅勘を蒙り、潮州に貶せられた。

其の途中で雪に逢つたが、俄に雪を冒して來る者を見ると湘であつた。

『公はあの花間の句を思ひ出したでせう』といふから、文公は玆の地名を問ふと藍關だといふ。公は驚歎して句を足して一首とした。即ち文公集中に在る左の詩が、さうである。

一封朝奏九朝天　夕貶潮陽路八千
本爲聖朝除弊事　豈將衰朽惜殘年
雲橫秦嶺家何在　雪擁藍關馬不前
知汝遠來應有意　好收吾骨瘴江邊

文公は湘と共に藍關の旅宿に泊した。湘は別るゝに臨み一瓢の藥を出して公に與へて、『一粒を服用すると瘴毒を禦ぎます』といつた。そして文公が悄然としてゐるのを慰めて、

『久しからずして遷られるでせう、御無事であるばかりでなく、又復び朝にお立ちになります』

『今後復た相見る機會があるかね』と文公は名殘を惜んだ。

『さきの事はよく判りません』とぼかりで別れ去つた。

呂巖（字は洞賓）

呂洞賓は唐の蒲州永樂縣の人である。祖父の呂渭は禮部侍郎、父の呂讓は海州の刺史であつた。德宗の貞元十四年四月十四日の巳の刻に生れた、そのための純陽子と號した。

呂純陽の異相

母が產蓐に就く時異香室に滿ち天樂空に聞えた、一羽の白鶴が天から下つて產室へ飛込んだまゝ姿が消えた。

產れた子は金形、木質、道骨、仙丰、鶴頂、象背、虎體、龍腿といふ姿で、鳳眼は天に朝し、双眉は鬢の中まで生え込み、頸長く顴骨秀で、額廣く身圓く、鼻梁は聳えて直く、面色白黃であつた。左の眉の角に黑子が一つあり、足の裏の紋は龜甲が表れてゐた。

少年から聰明で記憶が良く、作文が捷かつた。身の丈は八尺二寸、好んで黃い衣を着たり華陽巾を冠つたりして張子房に似てゐた、二十歲になつても妻帶しなかつた。

まだ嬰兒の頃、馬祖が彼を見て、

『この兒の骨相は凡でない、自然と風塵外の物たる事が分る。將來廬に遇つたら居れ、

文官試驗は落第

鐘（酒盃）を見たら叩け、努々忘れるなよ』といつた。廬山で敎を受くべき人に逢ひ、又酒間に知己を得べきを豫言したのである。

長じて廬山に遊びて火龍眞人に遇ひ、天遁劍法を傳へた。會昌年間（武宗）に二度まで進士に出たが及第しなかつた。その時は旣に六十四歲だつた。

長安の酒肆で靑い頭巾に白い袍を着た道士が壁上に三絕句を題すのを見た、其詩は

『坐臥常に一壺の酒を携ふ、双眼をして皇都を識らしめず、
乾坤は許大なれども名姓なし、人間に疎散す一丈夫』

『道を得たる眞仙には逢ひ易からず
幾時か歸り去つて、願くは相從はん
自ら言ふ住處は滄海に連れり
卽ち是れ蓬萊の第一峰』

『厭ふ莫れ歡を追うて笑語の頻なるを
離亂を尋思せば心を傷む可し
閒かに指を屈して頭より數ふるに

異人に逢ふ

清平に到るを得る者幾人か有る』

呂洞賓はこの道士の風貌奇古にして詩意飄逸なるを訝り、恭しく姓氏を問ひ坐に請じた。羽士曰く、

唱和の仙詩

『一絶を吟じて見せさつしやい、子が志の程を見たいものぢや』

洞賓筆を執つて書いた。

生れて儒家に在りて太平に遇ふ
纓を懸け帶を重くするより布衣は輕し
誰か能く世上に名利を爭はんや
天皇に上玉清に事へんことをのみ欲す』

雲房先生の仙人試驗

道士、此の詩を見て

『わしは雲房先生ぢや、終南山の鶴嶺に居るのぢやが、おぬし跟いて來さつしやるか』

洞賓は即答しなかつた。雲房も强ひてはいはず、共に一室に入つて休んだ。雲房は共處で自分で粟飯を炊ぎはじめた。洞賓は枕を取つて假寢をした。

洞賓は都へ登つて試驗を受けて見ると第一番で及第した。各省や內閣に歷任して樞要の地を占め、二度まで富貴の女の娘を娶つて數人の子を設け、其子等もそれ〳〵嫁いだり娶つたりして、孫共も多勢になつた。さういふ賑やかな世を四十年から送り、自分が宰相たることも十年、權勢竝ぶ者もなかつたが、偶重罪に陷されて、家產は沒收され、妻子眷族は四散し、自分は遠疆に流されて孤獨の寂しさに惱み、憔悴して風雪の中に馬を立て浩歎を發したと思つたら恍然として夢が覺めた。而かも先刻炊きかけて居た粟飯は未だ出來てゐなかつた。

人世は一大夢

雲房は笑ひ乍ら吟じた。

『黃粱なほ未だ熟せざるに一夢華胥に到れり』

洞賓驚いて

『先生は今の私の夢を御存じですか』

『おぬしが先刻から見た夢は、浮沈榮枯千態萬端で五十年の間を一瞬に過したのぢや、得るも喜ぶに足らず失ふも悲しむに足りない、大きく覺むれば人世は一大夢たることが分るものぢや』

洞賓は感歎して雲房を拜し仙道に入るの術を問うた。

十個の難關

雲房は洞賓が決意を試みようと『おぬしの骨筋は未だ完備してゐない、仙人たることを得るには二三度生れ更つてからの事ぢや』と飄然と行つてしまつた。洞賓は落膽もしないで斷然儒を棄て切つてしまつた。

雲房は是から十度洞賓を試みたが彼は皆それを切り拔けることが出來た。

その第一試。洞賓が遠方へ行つて歸つて見ると家人は皆病死してゐた。彼は徒らに悔恨することなく厚く葬具を整へてゐると、死人は皆甦つた。

第二試。洞賓は市に物賣る店を出した。客が來ても値を聞いてフィと行つてしまつた、又僅に半額しか拂はない人にでも決して爭ふことをせず、品物を持つて行くまゝ任せた。

第三試。元旦に門を出ると乞食が來た、求むるまゝに殘や品物を施したが、乞食は厭かず貪り貰つた末に惡口をいつた、然し洞賓は唯笑つてゐた。

第四試。羊を山に放牧してゐると餓虎が飛出した、彼は羊を免れしめて我が身を以て虎に向つた。虎は敢て彼に迫らずに去つた。

第五試。山中の草庵で讀書してゐると十七八の美人が來て、路に迷つて歩み惱む者だからと賴んで庵に入つて憩うた、そのうち美人は頻りに洞賓が心を動かさうと嬌態を盡して、夜になると一緒に寢るといふ、さうすること三日に亘つたが、彼は遂に動かされなかつたので女も去つた。

第六試。或日留守の間に家財悉皆を盜まれてしまつた。彼は更に怒つた色もせず、自ら耕して食糧を得ようと畑に鋤を下すと、ザクリといつて數十片の金が現れた、彼は一枚も取らないで直ぐさま土を被せて隱してしまつた。

第七試。銅器を賣つてゐたから買つて歸ると、それが金だと判つた。卽ち賣主を搜して之を還した。

第八試。風狂の道士があつて街に藥を賣つてゐた、その能書を述べてゐるのを聞くと、此の藥を呑む者は立どころに死ぬが、今度生れて來ると仙人になれるといつてゐた。十日も賣つてるが買手がない、洞賓がそれを買つた、道士は『早速死後の用意をせよ』といつたが、洞賓は飲んでも何ともなかつた。

第九試。洪水が出たから洞賓も衆と共に水を涉つた、中流へ出て浪が暴れ狂ふので皆怖れ騷いだが、彼は端坐して動かなかつた。

三千年後の人も欺かず

第十試。洞賓が一室に獨坐してゐると、奇怪の鬼魅が無數に現はれて、或者は彼を擊たうとし、或者は彼を殺さうとした、はれども彼は毫も懼れなかつた。今度は數十の夜叉が現はれて罪人を拷問にかけた、血迸り肉飛ぶので罪人は號泣しながら洞賓に向ひ、

『お前は前の世でわしを殺してゐる、今此場でわしに代つて罪に服せい』といつた。洞賓は、

『命を殺したから命で償へといふのは尤ぢや』と刀を執つて自盡しようとした、忽ち空中に大聲に叱る聲が聞えたかと思ふと、今まで居た多くの鬼神は忽ち消失せた。そして雲房が大笑しながら天降つて來た。

『十度おぬしを試みたが遂に心を動かさなんだ、必ず道を得るであらう、然し未だ功行完しとは言へない、わしが玆で黄白の術（金銀を作る術）を授けるから、世を濟ひ物を利し、三千の功を滿たし、八百の行を圓かなさしめたら、其時わしが現れて得度させよう』

『此の法で作つた金銀は後で變質する事はありますまいか。』

『ある、が三千年の後の事ぢや』

『三千年の後の人に迷惑を掛けることは罷しませう。』

雲房笑つて、

『お前の功行はもう其れで滿つたのぢや、さアお出で』と洞賓を伴つて鶴嶺へ行き、悉く仙道の秘訣を傳授した。

雲房は上帝に召されて九天金闕の選仙となつた。當に行かうとする時洞賓に向ひ、

『わしはお召で天へ昇る、おぬしは人間に住んで功德を積んで居れば他日必ずわしがやうに召される』

『私の志は先生と違ひます、天下の衆生を濟度し盡して後に昇天したいと思ひます』と洞賓は答へた、雲房は雲に乘つて去つた。

洞賓はそれから江淮に遊んで蛟害を除いたのを手初めに、隱顯變化すること四百年、常に湘潭、岳鄂及び兩浙汴燕の間に遊んでゐたが、人が誰も見識らぬから回道人（呂の字の謎）と自稱してゐた。

宋の政和年間（徽宗）に宮中に妖怪があつて、白晝に現れて寶物や官女を盜んだ。林靈素、王文卿等が一旦は退治したけれども復た起つた。帝親ら潔齋して禱ること六十日に及んだ。そして晝の夢に東華門外に一人の道士を見た。

其道士は碧蓮冠を戴き紫鶴氅を纏ひ、水晶の如意を携へ、帝に揖していふには、

『臣は上帝の命を奉じて此妖魔を治めに參つた者でございまする。』とて一人の金甲の武將を呼出した。其の武將は妖魔を捉へ引劈いて昭ひ盡した。帝が此の勇敢な丈夫の誰なるかを問ふと、道士は、

『此者は陛下が贈封遊ばされた崇寧眞君關羽でございます』と答へた。

師は繰返して其の勞をねぎらひ、張飛は何處にゐるかと問うた。關羽は、

『張飛は累劫世々男子に生れて臣となつてゐます。今も既に陛下の爲に相州の岳氏の家に生れてゐます』と答へた。帝は更に道士の名を問うと、

『臣が姓は陽、四月十四日に生れました』と答へるかと思つたら帝の夢は覺めた。

夢の中で道士がいつた事を調べて、それが呂洞賓であると判つた。此事あつて宮中も無事となつたから、天下に詔を下して洞賓の香火處には皆正妙通眞人の號をつけた。その神通妙用を讃へた詩や詞を碑文に錄したものが世に傳へらるゝ。

岳武穆の父が張飛が生るゝ夢を見たから其子に飛と命名した。關羽が夢に語つた通りである。

關羽現はれて、妖魔を捉ふ

呂洞賓は五代宋元明に亙り、屢其の姿を現すと信ぜられて傳說甚多し

王卿

居酒屋の顧客

巖壁に突き當る

唐の貞元の頃、郢の南郭附近に王卿といふものが居酒屋を出して居た。

物日には必ず一人の道士が飲みに來た。何年と續いたが、ある時王卿が道士の歸途をそつと尾行して往くと、道士は振り返つてビツクリし、『何しに來た?』と見咎めた。王卿は拜伏して『神人、どうぞ召使に使つて下さい』と賴んだ。道士は『不可ん』といふが强ひて跟いて行つた。谷間、岩道を超え、一丈ばかりの崖につき當り、道士がヒラリと飛び越えたので、王卿も續いて飛んで見ると、造作なく飛べた。行くこと數十里、高さ百餘丈の大巖壁に行當り、道士は輕々と身を躍らせて飛び上つたが、サア登れない。道士は上から『何だつてついて來るのだ、諦めて歸れ』といつたが、王卿は極力哀願するので、道士は巖から手を下げてくれた。それに捉まつて目を閉ると、ふわりとして身は已に巖上に登つて居た。見渡すと廣々とした景氣は、到底人間の世界でない。十餘里行

つた處に道士の家があつた。表のかゝり誠に整肅なものである。『此處に居ろ』といはれる儘に傍の草原へ潜込んだ。道士は『此處に居れば俺が飯を運んで遣る。そして折を見て天師に謁見を願つて遣らう』といつた。三日ばかり辨當を運んで呉れた。ある日天師が杖をついて御出門になつた。形狀誠に魁偉たるもので、眉疎に目明にして如何にも尊嚴な風丰である。四五人の侍從が左右に從つて居る。道士は王卿を呼んで道傍へ出て拜謁したのであつた。天師はジロリと見て驚いた樣子『どうして其方は此處へ來た？』との御尋ねである。王卿は謹んで始終を申上げた處が、諸道士が「見た處謹厚な男だ、使ひ者になりさうだから、竈番にでも使ひませう』と、推薦した。天師の許可があり、漸く院内に入れられ、臺處へ行つて見ると、一ッの大竈があつて下から熾に火を焚いて居る。竈の上には鐵筒があり幾重も嚴重に蓋がしてあつた。道士の指圖でいよ〳〵竈番になつた。その時『專心に番をせねば不可ん。妄りに覗いて見ると取返しの付かぬことになるぞ』と言聞かされた。

天師の謁見

竈番を申し付かる

嚴禁の箇條は竈の中を覗くこと

それから四五人の道士は、或は水を汲み或は藥草を採集し、飯拵へをして天師に供へるといふことが大體の仕事だ。竈番の王卿は夜も竈の側へ臥て火の番をするので、六七日經つたが、誰一人竈を看に來る者はない。王卿退屈でもあり、何心なくそつと開けて何んな藥かと覗かうとすると、鐵筒の中から突然一匹の白兎が飛び出し、ガタンといふ音がした。『しまつた！』と叫ぶ道士の聲が聞えると、どや〳〵やつて來てこの樣子を見、一同蒼白になつて居る。すると天師が大に怒り『俗人などを連れて來るから、藥を失つて了つたのだ』と大そうな不興である。曩の道士はひどく叱られ、鞭たれる筈のところを、陳謝しで『も一度白兎を取つて來ますから』と引退がり、數人の道士が庭へ出て香を焚きながら足ふみをして居ると、道士二人が一双の白鶴となつて天に飛び去つた。一寸の間に歸つた鶴は一匹の白兎を下げて居た。早速竈へ放り込んで漸く取返しがついた。同時に王卿は放逐になつた。道士が王卿を連れ出して『君の爲めにはひどひ目に遇つたまだ心が堅固でないから駄目だ、歸つて行け』と高い巖壁の處まで來て手を離し、『後、二十年、汾州の市中で再會しようよ。』と言つて道士は去つた。

遂に禁令を犯す

煉丹の行り直し

下界へ放逐

王卿は此から道士となつて、十餘年經つて太原の方に往つたが、果して曩の道士に遇つたものやら。

陶尹二君

唐も末の頃であつた。

陶太白と尹子虚といふ仲善しの老人があつた。共に仙家養生の方など修めて、をりを

松の枝上に二人の笑聲

り嵩山、華山に入つて、松脂、茯苓、其他の藥材を採集してゐた。ある時芙蓉峯に登り。だん〳〵景色を貪つて深入りし、大きな松林の陰に憩んで、用意の瓢を酌みかはしてゐた。掌をうつて笑ふ聲がした、松の梢に二個の人が居るのであつた。

『貴方がたは神仙で有らせられませう、如何で御座います降りて一杯召上つては。』

『いや〳〵仙人でも、山精木魅(山や木の精靈)でもない、秦の世の者で、俺は役夫、此の人は宮女ぢや。酒が欲しいんだが、姿が異つて毛だらけになつてゐるから、びつくりされるだらうと思うて降りないのぢや。少し待つてくれい、今、穴に往つて換衣して來るから。』

『よろしい、早く御出下さい。』

やゝ暫く待つてゐるとやつて來た。

儼然たる丈夫と絲衣の少女

一丈夫の古服儼然たるのと、鬟鬢絲衣の女子とが松の下に立つた。四人は互に拜禮して小酒宴となつた。さて陶太白は問ふ。

『貴君はどういふ次第で此の山に來られましたか、どうぞ御聞かせ下さい。』

徐福の一行から脱走

『俺は秦の者で、十五に爲つたとき、天子が神仙の術を好み、不死の藥を求むるため徐福に童男童女千人を附けて東海の仙島に遣されることになり、俺は選ばれて其數に入つた。船は小さし人は多し、海は荒れつゞくので苦しさに堪へず、奇計を設けて俺は船を脱して上陸した。姓名を易へて學問に志し儒者になつた。儒者連中に國政を誹謗する者があつたので始皇の怒に觸れ、四百何十人一時に坑埋めにされた、私も其數に入れられたのを辛うじて逃げ出し、土工の中に隱れてゐたところ、萬里の長城の大工事に駈り出されて役夫となり、ひどい苦勞をさせられた、又隙を見て逃げ出した。此度は大工になつた。すると始皇が崩じて其陵墓を築くに、金工石工木工有らゆる工人が徵發されて、又た其の内に入れられ、工事が終れば墓中に封じ込められる筈のを、又々奇謀に依つて脱るゝことが出來たが、もう世の中が恐ろしくなつて、とう〳〵此の山に隱れて松實を食つて饑を凌ぐうち、不思議に長生の法を得たのぢや。此の毛深

殉死する宮女を救ふ

くなつてゐる女子は元、秦の宮女で、始皇の墓に殉死として閉ぢ込められるのを、俺が救つて一緒に逃げて來た。一體今は何の代で、あれから何年になるのかナ。』

仙丹は用ひず木の實が常食

陶と尹とは、今は、秦から漢、魏、晋、何々と九代の末で千餘年も經つてゐると、二人交る〳〵歴代の興亡の話をして聞かせた。そして二人は、

『不思議の御縁でお眼にかゝりました、どうぞ私共に長生の藥を御授け下さい。』と懇願した。

『俺は前申す通りの凡人ぢやて。此山に隱れて以來一切世間の思慮を絶ち、たゞ木實ばかりを食つてゐる中に死ななくなり、體に偏く深毛が生えて飛行も自在になつたといふまでのこと、金丹仙藥そんな物は知らんのぢや。』

『では其の木實はどうして食べれば好いのでせう。』

『俺は初め柏の實を、次に松脂を食つてみた、滿身に瘡を生じ腹中が痛み非常の苦痛を覺えた、一月たゝぬ中に、皮膚が滑澤になり、毛髪もつややかになり、數年後には空を行くのも自由になり、飄々然として風のまに〳〵翔ることが出來た。今は天地と一體になつた樣な氣持でな、病むこともなく死ぬることもない身の上になつた。』

丈夫吟じ綵女和す

遺れた衣が蝶と化し花と舞ふ

星を仰いで時勢を慨く

其のうちに瓢の酒も盡きかけた。丈夫は微醉機嫌で松に凭れ吟じ、女子も之に和して歌うた。

『こゝに萬歳の松脂と千歳の柏子とを少し持つて居る、此を二人で分けて服むが可い。其の内に世を脱することが出來よう。』

二人は推戴いて、直に酒で嚥み下した。二人の仙人は別れを告げて立ち去つた。先刻着て居た衣の其處に殘つてゐたのが、風に吹かれて花となり蝶と化し空中に舞ひ揚つた。

陶、尹二公は其後、蓮花峯上に居り、顔の色は紅く、毛髪は黑く、すつかり若返つてゐた。雲臺觀の道士が之に遇うて其成仙の次第を聞いた時話したのが此れである。

王常

王常は意氣を尚ぶ慷慨の士で、不埒な奴と見れば直に斬り倒し、貧困な者には着てゐる物も脱いで助けるといふ風であつた。

唐の至德二年終南山に登つて風雨に遇ひ、山中に宿した、其の夜半、からりと雨が霽

始皇武帝は何故欺かれたか

れた滿天の星燦としてかゝやく、王常慨然として、

『あゝ此の凉しい靜かな山の景色に引かへて世は亂れはてゝ天子（玄宗皇帝）は西蜀に落ちさせられ都は安祿山、腥さいえびすどもに蹂躙されてゐる、何といふ意氣地の無いことだ、乃公は天下を平げてやりたい、だが誰も乃公に兵權を授けてもくれず、尺寸の封土も無い、何と思うても空拳では萬民の饑寒を救ふことは出來ない、天神地祇は何をしてゐるのやら、此んな時何の役にも立たぬではないか。』

と慷慨の聲を漏らしてゐると、一神人が空より降つて來て、

『汝は何を申して居る？』

王常は劍を握つてぢつと其の神人を見つめつゝ、落付いて、

『今言うたのは、拙者が平生の志で御座る、降臨なされたは何の神であらせられるや。』

『我れ、術あり、黄金成る可し、水銀死すべし、天下の禍亂を根絶さするには足らずとも、人民の饑寒は幾分救濟が出來よう、汝、我が術を受けて世人を救ふの意はなきや。』

『其の神仙の術は兼て耳にして居れども、秦の始皇、漢の武帝、孰れも方士に欺かれて後世に笑を貽したに過ぎませぬのは何故で御座りませう。』

水銀を黄金にするは容易なり

『彼等は帝王――人を救ふの位に在りながら、其位に伴ふ權力を以て人を救ふことをせず、却つて神仙の術を假らんとするを天は容されざりしなり。汝、世を救ふの地に非ずして世を救ふの大願を有す、故に汝に此の術を授けんとするなり。』

『果して「黄金成り、水銀死す」-左樣の事が出來ませうか。』

『疑ふ勿れ。夫れ黄金は山石にして其始なり、山石の精なり。此の精、百千年を經て水銀となる、水銀は太陰の氣を受けたるものにして流蕩として凝らず。今若し微しく純陽の氣合するに遇へば、倏忽にして黄金に化するものなり、仙人煉金の術は、水銀を死して其の始めに還らするに過きず、事甚だ容易なり、今若し水銀を黄金と化せしむるには必ず山に在ることを要す、山に在らざれば即ち化せざるなり。我れに書あり、汝に授く、ゆめ〳〵疑ふことなかれ。』

煉金術の傳授書

王常此に於て、はじめて神人に再拜頓首した。神人は袖中より一卷の書を取出して王に授けた。

『此の書を讀まば黄白の術（黄金白銀を作成する仙法）はすべて明かならん、他日適當の人を得ば傳ふ可し、輕しく授くるなかれ、頑に祕することなかれ。貴人に授く可らず、道士僧

山神仙術を奪ふ

侶の輩に授く可らず、ゆめ〳〵不義の輩に授くることなかれ、彼等は他人の饑寒を意とせざるものなり。黄金成らば人を濟ふの外奢逸に費すことを得ず、若し我が誡を守らざれば天罰立ちどころに到らむ、恐る可し慎む可し。』

『難有き御教へ、謹んで嚴守致しまする、して、此の聖術を授けたまふは如何なる神に渡らせられるや。』

『我は山神なり。昔し道人あつて此の書を我が山に藏せり、今、汝義烈の士たるを認め得て、汝に授くるものなり。』

言ひをはつて忽然として神人の形は滅した。王常此より天下を歴游し其の化成せる黄金を以て、到る處に窮乏貧苦の人民を救濟した。

齊映

大宰相の齊映が初め進士の試驗で都に上つたとき、各省に知人を訪問してあるくうち雨に遇うて、或る墻の下に佇んでゐると、一老人の二個の僕を從れたのが來て、齊公に

誘ひ合はした一老翁

彩しい酒の賣上高

宰相か昇天か

敬禮をして、『俺の處は遠くないから暫くお休息なさいと』勸めた。是れ幸と跟いて行つた。途中で老人は一僕を齊公に付けて『そろ〳〵お出下さい、俺は一足お先に往つて準備を致します』と言つて、白い驢馬に乘つて飛ぶが如く馳せ去つた。

齊公は一僕に案内され、街路を幾曲りかして、とある靜かな横町に入つた。立派な門構への宅に着いた、老人が出迎へた。十數人の侍婢が取りまいて中堂に通した。華麗清潔な設備がしてあつて馳走の品々も極めて結構づくめであつた。其のうちに、澤山の錢を持ち込んで老人に何か報告して去つた。老人問はず語りに『此れは俺の酒舗の收入です、自分は一丸藥で一甕の酒を作るのです』など〻話した。日が暮れかゝつた齊公が辭を告げると、老人は、

『貴郎は好い人相を有つてゐられます、宰相に爲りたいですか、それとも白日昇天（仙人となる事）ですか、どちらをお採りになります。

齊公は、ぢつと考へた擧句

『宰相！』と言つた。

老人は笑つて

天機泄る

『明年は及第せられます、任官せられたら、帛を何十疋か贈りませう、併し此事は御他言ない様に。お閑があつたら又御出下さい。』

齊公は拜謝して歸つた。此後しば〳〵往つた、往くたびに何か貰つた。明年の春果して及第した。同年たち（同時に及第せる進士をいふ）が齊公が車服萬端支度の行届いてるのを美み、宴會の時に種々詰るので、齊公も醉つたまぎれにつひ饒舌つでしまつた。其ならば吾々も訪ねようと、其翌日、二十幾人が一緒に老人に拜謁に押しかけて行つた。老人は甚だ迷惑して、病氣だといつて面會を謝絶して一匹づゝの縑を進呈し、獨り齊公のみを呼入れさせて、

『なぜ輕々しく泄したのです、昇仙の事も略定つてゐたのに、此でぶちこわした。』

齊公は老人に慚謝して引退り、十日計して復た往つて見ると邸宅は主がかはつてゐた。老人の行方はそれきり判らない。

李生

煉金術を秘する所以

唐の僖宗の頃、李生は進士の試驗を受けに長安の都へ上る途中、一道士と路づれになり、幾日か同じ宿にも泊つて心安くなつた。都近くなつていざ別れようといふ際、黄白術（金銀化成の仙法）の話が出た。

『點化の事（煉金の術）といふものは神仙道に於ては卑淺の術に過ぎないのであるが、世人が、貪欲で此の事を重大視する。其奴等は此の術を得て奢侈心を滿足せしめようとする、其を惡むから仙道に於て此術を秘して容易に傳へぬことになつてゐるが、實は仙方は簡易なものぢや、之に用ゐる藥も求め難いものでは無い。君の性情を見るに廉直寡欲の様だから、其法を傳へよう。之を用ゐるのは自他の窮乏を濟ふに必要なる程度に止めなければいかぬ。仕官をしたらば煉金は罷めるが可い。』

道士は其の法を記して渡した。有り觸れた藥品の若干を要するに過ぎないのであつた。此に依つて行へば容易に黄金が出來て多くの人を助けることが出來た。其内進士に爲つて官に就いたが、段々陞進するに隨ひ金の出來方が減じ、南昌の令に榮轉すると全く出來なくなつてしまつた。

章泛

冥土の物語

人違ひで冥土へ召さる

唐の大暦年間、潤州金壇縣の尉(官名)章泛といふ者が吳興に遊びに行き、興國寺の岸に舟を停めて居たが、何故かわからず突然死んでしまつた。檢屍や何か大騒ぎをして居ると二日して復た生きかへつた。そして其の間の事をかう話した。

一官吏が召狀を持つて來て自分を伴れて往つた。三四十里ばかりで一城に達した。守衛甚だ嚴重に見えた、門を入ると通行の人に知人が多いから『一體此處は何處でせう。』と役人に訊いて見て、始めて冥土だ、自分は死んだといふことが判つて驚いた。

數人、騎馬の人がやつて來る、服裝其他堂々たる大官らしい、顏を見ると友達の某だツたので、意はずヤアと聲をかけた、其人は驚いて、『ヤア君どうして來たのか。』『役人に召喚されて來たのだ。』と言ふと、『はてナ僕が召魂(魂を冥府に召喚する主任)を主つてゐるんだが、君を喚び出した覺えは無いが……』と一寸考へる風であつた。『おゝさうだ、間違ひだよ、召喚したのは同姓名なんだが、金壇縣尉の章泛といふんだ、君は金壇縣尉だのに、下役が間違へたんだ、氣の毒したネ。』早速役所に伴うて、送還の手續をしてくれたので章泛は安心をしたが、心安だてに、『僕の壽と祿はどうなつてゐるのかネ、內所で教へてくれたまへ。』と言つた。其人も一應は拒んだが遂に、密かに一吏に何か命じた。其吏は章を別室に伴ひ行き、左の手に朱筆で、『前楊復後楊、後楊年年强、七月之節歸元鄉』と書いてくれた。

泥濘浚ひ仙人

章は復活の後、太原陽曲縣主簿と爲り、其後楊子縣巡官と爲り、建中元年六月二十八日立秋の日に死んだ

淘沙子

蜀の大東市の施療病院は乞丐や貧病者などが、自由に宿泊することが出來るのであつた。中には每日畚鍤を擔いで町々の溝渠を廻り、泥を浚ひ、銅鐵片や木屑などを拾つて生活して居る者もあつた。此の職業は淘沙子と呼ばれた。ある歲、淘沙子の內に妙な奴が一人あつた。それは何處から來たか、名を何といふかも判らず、いつも古帽を被つて

淘沙子進士文谷を驚かす

鐵把や竹箒を擔いてゐた、よく寺や道觀のやうな物靜な處へぶらついてゐた。

文谷といふ落第進士が、聖興寺の知合の僧を訪ねた時、此の淘沙子が佛殿の上に坐つて居た。容貌古峭たるもので、音聲爽かに、文谷が近頃作つた數首の詩を吟じた。文谷愕然として居ると、今度は自作の詩を吟じ出した。時事問題を皮肉つたのもあり社會に對する警告もあり神仙を云つたのもある。文谷は煙に卷かれて居ると『君は今何處へ往くつもりか』と問ふから『此寺の友達の僧に金を借りて、更に一分別しようと考へて居る處だ』と答へた。するとその淘沙子は、懷中の布袋から麻紐へ通した小粒銀の内を一枚取つて文谷に與へ、辭儀をして、さて古帽をかぶつて、道具を擔いで寺を立ち去つた。

天子淘沙子を景慕す

その後文谷は蜀の通奏使・王昭遠と同席したとき淘沙子の話が出て、

九重城裡人中貴　五等諸侯闕外尊、
爭似二布衣雲水客一　不レ將二名字一掛二乾坤一

と、その時の詩を朗吟した。王昭遠は『如何にも異人の作だ』と蜀の天子に奏聞し、廷臣をして諸方の町々を探させた。當時淘沙子は東市・國清寺街の富豪宇文氏の邸前にある大桐樹の下に休んで居た。宇文は元來道術の熱心家だつたので、淘沙子を常人でないと見て、座敷へ上げ、其の職業や嗜好などを尋ねて見ると『俺は詩と酒が好物だ。』とばかり、言動甚だ凡俗を脱して居る。酒を二三杯飲んで、また來ると言つて別れた。

銅錢を白金に化す

半月ばかりして、門前へ來て、例の破帽を門番に突付け『主人に取次げ』といふと門番は怒つて『貴樣のやうな乞丐に主人が會ふものか』と怒號り付けた。宇文はそれを聞き付けて駈けて出『好く御出下さいました。實は日に〳〵御待して居りました。』と座敷に請じて酒を出した。『神仙道といふものは學び得るものでせうか』と問ふと、淘沙子は『心次第サ』といつた。そこで宇文は『私は數年前、ある人に嘘氣の術を敎へられたが物にならず廢して了ひました』といふと『何でも初の通り行れば、十分行けたのだが、大抵行り始めても中途でなまけるから、折角修業したのを臺なしにする。どうかな、金銀は有るかな、欲しくはないかな』といはれ、宇文は『執着はして居りませぬ、有つて居無いともいはれませぬが、特に好きだと言ふのでもありませぬ。』すると、淘沙子は主人に銅錢十文を出させ、己れの懷から一粒の藥を出し、醋に浸けて燒くと、銅錢は白銀になつた。『これが神仙の技術の擬ひない處ぢや。世間に本者は少ない、多くは虚妄ばかりサ』というて返つて行つた。

一束の髻を置土産

翌朝未明、一ツの手拭包みを持參して、『淘沙子が主人への土産だ』と投げ出して行つたものがある。宇文が開けて見ると、一括りの頭の髻で何の事か判らなかつた。處がその日、日たける迄門番が起きて來ないので、起しにやると、門番は『今朝明方の五更頃熟睡中何者かに頭髪を切り取られました』といふのであつた。蜀の天子が此の事を傳聞き、宇文の宅へ訊ねられたので、宇文が施療病院に訪ねて見ると、『今朝出たまゝです』といふことであつた。爾來其後消息がなかつた。

註　本文の蜀の天子は五代の蜀なり

馬士良

水邊の仙女

唐の元和年間、萬年縣の馬士良といふものが、違法の事があツて、逮捕を懼れて南山へ逃げ込んだ。炭谷湫といふ澤の岸の柳の下へ隱れて居ると、夜明け方五色の雲に乘つた一仙女が水際へ降りた。金槌玉板を取り出して、仙女がそれを五ツ六ツ扣くとパラパラと蓮が湧き出した。仙女はその蓮の三四葉を摘んで食ひ、また雲に乘つて飛び去つた跡を見ると金槌玉板がまだあつた。士良は飛び降りて扣いて見ると、やはり蓮が出たので十數枚頻張つた。身體が頓に輕く宙に飛び擧がれさうになつた。谷間の蔓を傳ひ五色の雲の行先を逐うて行くと、高崇な宮殿に向の天女が仙人團の中に居て、大いに驚き、士良を竹杖でさん〳〵撲つて高い崖から谷間へ引曳り落した。へと〳〵になつて、動けない、そのまゝ寐込んで了つた。

仙女に結婚を迫らる

眼が覺めると、そこに兩鬢を結んだ少女が、刀を磨いで居て『靈藥を盜んだから主君の仰せで命を取りに來た。』といふ。士良、平伏して只管助命を哀願した處が、『それは覺束ない、けれども神液で救けて上げるから私を妻になさらねばなりませぬ。』直に取つて來たのは、青い小甌に入つた白飯の樣なものであつた。士良は其を食つて一寐入りし、こんど目覺めると少女は『藥が出來ました』と見せたのは、光澤のある青色の藥七粒であつた。士良は腹を出して見ると刀瘢が赤く通つて居た、それを少女が今の藥で撫廻すと忽ち消えて了つた。さて少女は『專ら仙學を勉强なさい、人には話してはなりませぬ。万一漏洩すれば、今の腹の瘢痕から忽ち破裂します。』と戒めた。そして『私は谷神の娘で、上仙の靈藥を見張る役なので、あなたを救けることが出來たのです。』といつた。會

谷神の娘

昌年代まで炭谷湫で往々此の夫婦を見かけた者もあつた。

維楊十友

維楊の十友といふのは、皆困らない物持達、分を守り、足ることを知り、祿位を求めず、貨財を貪らず、道を知り玄を慕ふ人々の社交團體で、交の厚きこと兄弟の如くであつた。會員の廻り持ちで會合を開き、酒食を娯しみとして、浮世を面白く遊びくらしてゐた。

十人の富豪の享樂會

ある時この十友會へ一人の老叟が訪れた。服裝も穢く、顏色も惡い、その日の生活に困るといふ樣子であつた。わだかまりなき十友は、可哀さうなものに思ひ、今日は誰れ翌日は誰と例の廻り持ちで、十分馳走してやると、十日ばかり好い氣持に昏して歸つた。

貧乏な老叟を優待す

其後又來て十友に言ふには『先日は皆樣に御款待を受けまして御禮の申上げやうがない。御禮心に私も一會を催したいのです、某日某所まで御來駕を願ひたい』といつた。十友も興あることに思つて、約束の通り往つて見ると、例の貧叟は、途中に出迎へ、連れ立つてぶら〳〵行くと、東塘郊外まで來たのだが、さう遠いやうにも思はなかつた。

貧叟の答禮あばらやに富豪の請待

會場は草叢の小さな藁屋で、危い程に朽ち傾いて居る處へ『どうぞ』といふ譯である。見ると七八人の乞丐が居た、蓬髪鶉衣、甚だ見苦しい。叟が行くと皆起つて氣を付けの姿勢で命を俟つてゐる、部屋の内外を片付けさせ、藁を敷き菅菰を延べて『こちらへと請ぜられる儘、そこへ車座に着席した。もう午時なので十友は空腹を感じて居る。まづ長い竹箸を出して、一々客の前に配つた。七八人の者が長さ四五尺の大きな板を運んで來て、席の中央に据ゑた、油布が被せてあるから何だか判らない、空腹の十友は互に顧みて喉を鳴らした。油布を除けた、湯氣が一杯騰つて見えなかつたが、やがて收ると蒸し物は十四五歳の兒童で全身煮え爛れ、目、鼻、手足は半ば崩れ落ちて居る。貧叟は一禮して『どうぞ召し上がれ』と勸めるのであつたが、十客は胸を惡くして誰も手を出す者はない。『十分です、腹はまだ空きませんから』と辭退はしたが、竊に腹も立つのであつた。逃げ腰になつて居ると、貧叟は頻に箸を執り、獨り如何にも旨さうな食振りである。

御馳走は童兒の丸煮

やかて先の乞丐を喚んで『下げろ、食つて了へ』と食卓を取拂はせて、『唯今のは千年を經た人參で、甚だ得難い貴重なもので、此程不思議に手に入つたから、皆さんへお禮

千歳の人参乞食共みな登仙す

心に一箸差上げた譯でした。これを食へば白日に昇天し、肉身のまゝ仙人となるのだが、お上りにならぬのは、此も命運で致し方はない』といつた。十友始めて驚いたが既に遅かつた。貧叟は『皆の者、濟んだら出て來い』と呼ぶ、先程の乞丐共はいづれも化して妙齢の童男、童女となり、幡蓋相從つて叟と共に昇天した。十友はぢだんだを踏んだが、もう姿は見えなかつた。

葛長庚

西湖の水底一晝夜の醉臥

葛長庚は白玉蟾と號す、宋の瓊州の人だ。武夷山に入つて、陳翠虚に事へ海瓊子とも號した。九年の修行で道を得、蓬頭亂髪、甚しい破れ衣を着、跣足でそこら漫遊してゐた。詩文共に巧にして、書も畫も妙と稱せられた。かつて自讃の詩がある。

千古蓬頭洗足、一生服氣餐霞、笑指武夷山下、白雲深處吾家。

西湖に遊んだとき、醉うて水に墮ちた、舟人が驚いて捜索したけれども、日が暮れて遂に見つからなかつた。夜明けて見ると玉蟾はまだ水の上に轉つて酒が醒めずにゐた。

金元兩朝の優遇

ある時刀を拔いて脅かす者があつたのを玉蟾が一喝すると刀が墮ちて、其男は逃出した。一時、天子の召を受けて太一宮に居ることになつた。間もなく居なくなつた、其後、各地の名山に往來して神異測られない。

丘處機（字は通密、長春子と號す）

丘處機は山東登州の人。寧海の全眞庵に王重陽の居ることを聞いて、往つて弟子となつた。後、師に隨つて梁に遊び、間もなく師が逝去したので、外の弟子たちと棺を護つて終南山に葬り、三年が間墓側に廬居して喪に服した。

金の世宗から召されて優遇を受け、後、元の太祖に尊信せられ、天下の道家一切の事を委せるといふ勅命があつたほどである。ある時梨の花を張去華に贈つた、張公が之を瓶に活けておくと、秋に爲つて十四の實が熟した。延祥觀に槐樹が枯れてゐたのに、杖で毆りまはつて『此の槐は生きた』と言つたが、今に至つても繁茂してゐる。

朱橘

朱橘は淮西の人、翠陽と號す。母は懐胎已に十五月を經て未だ分娩の期が到らぬので、甚た憂へてゐた。偶ゝ途上で一道士が一個の橘を與れて『此を食べたら子が生れる。』と言つた『有り難う御座います、どうぞ御名前を……』と尋ねた。『鞠君子』とさう言つて見えなくなつた。

鞠君子の賜物

橘を食べると直に子が生れた、名を橘と命けた。幼より學問を勵んだが登用試驗は通らなかつた。落膽して、池に臨んで悄然自分の影を見て居るうち、忽然と悟る所があつて以來名利の念を去つて、道術修煉に志した。

狂者の歌

ある日、橘を手にせる一道士に遇うた。氣が狂れてゐるやうで、行きながら歌つてゐる其文句が判らないもので『橘、橘、橘、人の識るなし、惟だ朱姓の人あつて、方に、這の端的を知らん』といふのであつた。誰にも判らない狂人の歌が、橘一人には判る樣に思へた。それで道士を尾けて郊外まで往つて、人の無いのを見計らつて拜禮した。

『鞠君子でせう。』と言ふと、

『お前は誰ぢや。』

『朱橘と申します。』

『ふむ、お前か、何が欲い。富か貴か、擇べ、欲するままぢや。』

人生の富は海上の漚

『人生の富貴は海上の漚、空中の雲、何ぞ慕ふに足らむ、願ふ所は唯だ神仙不死、其をどうぞ御教へ下さりませ。』

道士は玆に於て要領を授けた上、此より皖公山に往き修煉せよと告げ、忽ち雲に乘つて去つた。朱橘は直に皖公山に赴き一室を構へ、此に在つて專念に修養した。一小兒の潔白、玉のやうなのが、此の草庵の前の池に遊んでゐた、其のあるくのが、星の流るゝ樣だつた、人が不審に思ひ尾けて見ると庵の中に消えた。小兒は橘が分身だと皆が謂ふのであつた。

小兒は橘の分身

『俺は縣廳の前に立ちながら仙化する、清淨な土で護つてくれ。』と同鄕人の陳六に謂つた。其の日限に、其の場所に、果して朱橘は立ちながら死んだ。陳六は泥を塗つて其のまゝ塑像にした。縣の吏員が怒つて打ち叩いた處、泥が剝がれて地に墮ちたが、中に朱

橘の屍體は無かつた。宋の理宗の淳佑二年の事である。

陳摶

婆の乳に啞が治る

陳摶、字は圖南、扶搖子と號した。亳州（河南省）眞源の人である。幼時もの言ふことが出來なかつた。四五歳の時渦水の岸で遊んでゐたら、青衣の老媼が來て抱き取つて乳を呑ませた、夫から口をきくやうになつた。のみならず敏悟人に過ぎ、經史は遺すところなく讀破し、十五になる時は、詩禮書數から醫藥の書に至るまで究めざる莫しといふ程だつた。

『今まで學んだところは姓名を記するに足るを得ただけぢや、もはや親は亡し、官祿を貪るの必要も無い。是から泰山へ行つて、安期、黃石（仙人の名）など丶出世の法を論じ、不死の藥を調劑しよう、この卑劣な世俗と伍して生死輪廻の間に迷つてゐられるものぢやない』

斯ういつて盡く家資を散じ、一つの石鍋を携へたゞけで行つてしまつた。後梁、後唐の士大夫等は其の淸風を汲んで、彼の顏を見識ることを景星慶雲を見る程に有難がつた。

一度死んで活き返る

然し彼は誰とも交はらなかつた。

後唐の明宗が彼の名を聞いて親書を以て召した、彼は帝の前へ來たけれども臣下のやうに拜することはしない、それでも帝は愈々懇に待遇して宮女三人を賜うた。彼は一詩を賦してこれを斷はつた。

雪の膚と玉の腮と
有難し君が賜物
處士が興は巫山の夢にあらず
雲雨を陽臺に下らすも詮なけん

遁れ去つて武當山の九室巖に隱れ、穀物を斷つて凡そ二十餘年、華山へ移つた頃は七十餘歳であつた。常に門を閉ち、臥したまゝ幾月も起き出さなかつた。

後周の世宗の顯德年間に、樵夫が山麓に死骸を見つけた。古くて既に土にならうとしてゐた。近づいて熟視すると圖南であつた。そしてやがて身を起して、

『よく睡つてゐるのに、何故邪魔をするのぢや』といつた。世宗は彼を召して號を雲先

生とつけた。

宋の太祖が帝位に即いたといふことを聞いて、彼は手を拍つて大笑し、

『天下は是から定まるンぢや。』といつた。

天下是より治る

太祖も彼を招いたが應じなかつた。再び召されて

『九重の仙詔、丹鳳をして一片の野心を啣み來らしむるをやめよ、既に白雲に留住らる』

と斷つた。

太宗の雍熙元年になつて始めて召に應じて都へ出た、建隆觀に居を與へられた、其處に戸を閉ぢて一月餘りも熟睡して、起き上つたかと思ふと山へ還つてしまつた。號を希夷先生と賜うた。

端拱元年(太宗)に彼は門人に語つて

『來年の中元の後には峨嵋山に遊ぶのぢや』といつた、翌年門人をやつて張超谷に石窟を鑿らせた、それが出來上ると、自分は玆で歸するのだと、その中で左手に頤を支へたまゝ終つてしまつた。然し七日經つても色つやも變せず、身内は溫かだつた。五色の雲は其の谷の口を塞いで、月を越えても散じなかつた。年は百十八歲であつた。

彼は易學に精しく人物を見るに鋭かつた。五代の亂世に宋の太祖の母は未だ幼い太祖と太宗とを籃に入れて亂を避けた。彼はこれを見て、『今の世に天子がないなどゝ言ふが天子は檜の上に御坐るわい』

と歌にうたつた。又太祖太宗が趙普と長安の市に遊ぶのに出逢つて共に酒店へ入つた。張普が太祖太宗の右に坐つたのを見て、彼は

『お前は紫微垣の一小星に過ぎない、天子と並ぶ柄では無いわい』といつた。

周の世宗と宋の太祖とが同行してゐるのを見て、彼は城外に二天子の氣ありといつた。

种放は始め彼に從つてゐた、放に向つて、

『お前は明君に遇つて名を揚げるが、天地の間に完き名は無いものぢや、名が起らうとすれば何か之を妨げるものがある、用心せい』といつた、果して放は其の晩年を完うしなかつた。

陳堯咨が及第して後彼に謁した、其の座に居合せた老道人が陳を見て、頻りに南菴々々といつて何處かへ行つた。陳は不思議に思つて尋ねると、今のは鐘離子ぢやといふ。陳は追かけんとすると彼は笑つて

南菴々々

『もう數千里の外へ行つてるわい』といふ。

『南菴といつたのは何の事でせう』

「いつか自分で判るよ』といつたのみだつた。

陳堯咨は後に閩中(福建省)に行つて、或處で田舍女が其子に聲高に言つてるのを聞いた。

『お前は南菴へ行つてお父さんに早くお歸りといつておいで』と。堯咨は驚いて、其の南菴といふのへ行つて見ると、荒廢した伽藍があつた。其處には墓石が立つてゐて

『某年月日南菴主人滅す、玆に其眞身を祠る』と刻してあつた。その年月日は堯咨が誕生の日に當つてゐた。

意中を洞察す

陳圖南は又人の意中を洞察するに妙を得た。道士賈休が、陳の大瓢を欲しいと思つて未だ言ひ出さないのに、童に命じて瓢を休に與へしめた。

郭沆といふ者が圖南の居る所に近く宿つた。夜半に彼は郭を呼起し自宅へ歸れと自ら送つて行つた。少し行くと郭が母の死を知らせに來る者に逢つた。彼は郭に藥を與へて行かしめた。その藥を死人の口に注ぎ込んだら直ぐ甦つた。華陰の令の王睦が彼に向つて、

留守番は白雲

『先生は谷間に居て寢る室がありますが、お留守番は誰がします』と尋ねると、彼は笑つて吟じた、

華山の峰は是れ吾が宮
　出るには空を凌ぎ曉風に跨る
臺榭金鎖閉づることを須ひず
　來時自ら白雲の封ずるあり

或人が彼を訪ねると彼は睡つてゐた、然るに其側に一異人がゐて、彼の寢息を聽いてはそれを筆記してゐる。それは何だと訊ねると、

『先生は今華胥に遊んで混沌の譜を奏べてござるのぢや』といつた。

宋の太宗が彼が人を相するの妙を聞いて、召して皇子(恒、後の眞宗)を相せしめようとした。彼は皇子邸の門まで來ると其のまゝ引返して歸るから、その理由を聞いたところが、

『門番の小者等が既に將相の器ぢや、何も王を見るには及ばない事ぢや』といつた。そこで恒を立てゝ太子とするに決した。

彼は种放が爲めに墓地を卜定してやつたが、未だ墓穴の工を竣らないのに放を葬つた。其時彼は『此地は佳い處ぢや、穴は安らかにして置け、後に名將が出るやうに』といつたが、种放には妻子が無く甥の世衡が跡を嗣いで名將となつた。

彼は易學を、穆伯長に授けた、穆はそれを李挺之に授け、李は邵康節に授けた。一方に彼は象學を种放に授け、放は許堅に、堅は范諤に傳へた。其の糟粕は後世に存してゐる。

■　武當山は湖北省武當縣、華山は陝西省華陰縣、峨嵋山は四川省峨嵋縣、

申屠有涯

宋の人、宜興にゐた。

常に酒壺を携へてゐた。或日渡船に乘つて、船中で壺の酒を飲んで大に吐いた、乘合の者が彼を惡んで船から上がらせた。彼は岸に上つて

酒壺の中に飛込む

孔子は賢ならざるにはあらず
世の爲に容れられざりしのみ
愚鈍なるかな乘合の人々
人中の龍を見分け得ず

と吟じ終ると身を躍らせて持參の酒壺の中へ飛び込んだ。衆人は駭いて其壺を碎いて見たが中には何も入つてはゐなかつた。

侯先生

何處の人か判らない。

宋の大中年間（眞宗）に藥を都で賣つてゐた。年四十あまりで鬚も眉もなく、瘤が身體中にむく〳〵と出來てゐた。酒に醉へば乞丐と一緒に寢たりした。馬元といふ者が夏の頃侯先生に從つて郊外へ出た、池があつたから侯は水浴をした、馬元がよくそれを見ると浴してゐるのは人ではなく大きな蝦蟇だつた。

「やがて池から上つて衣を着るのは侯だつた、笑ひながら馬元に向ひ、

墓になつて水浴

『お前にはわしの姿が見えたかね』といつて、酒屋へ伴なひ、一粒藥を取出して、

『この藥を服用したら百まで生きるだらう』といつて與へた。

其後侯先生は見えなくなつたが、蜀から來た者の話では、あちらの市で藥を賣つてゐたさうだ。

遣人啞兒を語らしむ

林靈素

字は通叟永嘉の人である。

母が夜その寢所に入ると紅の雲が身體を包んだと思つたら妊んだ、二十四箇月も產をしなかつた。或夜の夢に綠袍玉帶の神人が眼から日光を出して、明日此處を借ると告げたと見たら、その翌日に靈素が生れた。金色の光が產室に滿ちた。

然るに彼は五つになつても物を言はなかつた、或時一人の道士が默つて入つて來て靈素に向ひ

『久しぶりだつた、態々訪ねて來たのぢや』といひ乍ら顏見合せて大に笑つた。それから此の子が口をきくやうになり、七歲にして詩を作つた。

仙法を得

蘇東坡と一緒に稽古したときに、一度讀んだものは忘れぬので東坡も驚いて

『君が聰明は迚も及ばぬ。富貴は請合ぢや』といつた、靈素は笑つて、

『生きて侯に封ぜられ、死して廟を立てられても、鬼たることを免れないのは予が志で無い』といつた。

彼は三十の時西洛に遊んで趙といふ道士に神霄天壇玉書といふのを授つた。其の書には神仙變化法と雲を起し雨を呼ぶ呪符、百鬼を驅使し萬靈を役する法などがあつた。是から何をしても靈妙ならざるはなかつた。

次の年に岳陽の酒肆で復び趙道士に逢つた。

『わしは漢天師の弟子趙昇ぢや、此前に授けた玉書を謹んで行つてゐたら、行く々々は神霄教主兼雷霆大判官となつて東華帝君を輔佐するやうになるであらうぞ』と道士はいつた。

徽宗皇帝は崇寧五年八月十五夜、玉帝の召に赴く夢を見た。空高く上つて遙かに天門を望み遂に玉闕に入つて玉帝に謁した。歸りに天門を下る處で、青衣青巾で青牛に乘つ

徽宗帝と夢中の知遇

た道人が、前後に供を從へ肅々と上つて來るに逢つた。帝の前を過る時その道人は『萬歲』と叫んだ。帝は夢が覺めてもその道人を忘れなかつた。

大觀二年に天下に詔して有道の士を求めた時、茅山の宗師は林靈素を推薦した。林は帝の前に出た時、如何なる法術が有るかを問はれた。

『臣は上は天上を知り、中は人間、下は地府を知つて居りまする、先年中秋に陛下が玉帝に朝せられた際、天顏を拜した事がございまする』

『さやうであつた、朕も思ひ出した、あの時乘つてゐた青牛は何處にゐるのか』

『唯今外國に預けてあります、近々に進上しませう』帝は林に對して弟子の禮を取つた。特に神霄宮を建立した。落成した時、帝は百官と之に赴き、

『宣德五門萬國を來たす』

と吟じた、お供の蔡京等は之に附けることが出來なかつた。靈素卽ち

『神霄の一府諸天を總ぶ』

と附けたので、帝は大に喜んだ。

徽宗は雷書金經を編修して、道藏の中に加へたいと希つてゐたが出來ずにあつた。靈素が靜夜に神を飛ばして上帝に乞ひ奉つた、上帝は玉女を遣はして雷霆司の印と雷書五卷を彼に授けた。彼はそれにより雷書を錄して奉つたので同書が始めて完備した。

政和七年に果して高麗から青牛を献上して來た。帝大に喜んで靈素にこれを與へた。重和元年に華山の三清殿から雷文の法書といふものが帝の手に入つた、それを見ると先に靈素が錄して奉つた雷書と一字も差はなかつた。

帝、彼に金門羽客の號を賜うた。

或日帝は嘆しながら靈素に向ひ、

『亡くなつた皇后の事が頻りに想はるゝ、先生の力で何とかして一度逢はせてもらひたい』

『承知しました』と彼は夜に入つて供物を整へ、皇后の靈を招いた。帝に奏して曰く、

『皇后は今玉華宮で王母と御酒宴中ですから、程なくお出でになります』

俄に異香人を襲ひ、天花亂れ落ち、仙樂空に滿ちて、皇后は青鸞に駕して來た、

『妾は昔仙官の主者でありましたが、陛下と神霄宮でお目にかつゝて愛慾の念を起したゝめに一時人間界に下されてゐました。今還つて原職に復しました。丙午の歲には亂が

起る徴がありますから、お氣をおつけなさい、忠に任じ奸を斥け童蔡（童貫と蔡京とを指す）を誅して天下におわびをなさつたら無事ですみませう』と皇后がいつたので、帝は更に問うた。

『御身が以前に仙班に列してゐた頃は、何職であつたのですか』

『妾は紫虚元君といふ陰神で、陛下は東華帝君だつたのでございます』

『今この禁中にゐる諸官の中にも上界から降つて來てゐる者がありますか』

『明節は紫虚玄靈夫人、王皇后は獻花菩薩、太子は龜山の羅漢尊者、蔡京は北都六洞魔王大頭鬼、童貫は飛天大鬼母、林先生は神霄教主兼雷霆大判官、徐知常は東海巨鰲の精でございます』

『國運は安泰なることを得ますか』

皇后は是には答へないで、次第にその容を消した。

靈素、或時太清樓下の宴に侍つて。元祐の黨の碑を見て禮拜をした。帝は不審して其の故を訊ねると答へて、

『あの碑に刻まれてゐます人々は皆天上の星宿でございます』と一詩を賦した。

元祐黨人は天上の星宿

蘇黄は文章の伯とならずして
童蔡かへつて社稷の臣たり
三十年來定論なし
奸黨の何人たるを知らず

帝又如何にして眞武（四神の一玄武）の聖像を見るべきかを問うた。靈素は、

『虚靜天師と同じくお招き致しませう』と御符を焚いたら、忽ち黑雲日を蔽ひ太雷轟き渡り、電光の中に先づ龜蛇が現はれ、暫くして大きな足が一つ現はれて殿前を塞いた。帝は之を拜して

『願はくは聖祖の全身を顯はして仰き見ることを得させて下さい』といふと、一丈餘の全身が現れた。端嚴妙相で、黑袍に金甲、玉帶に劍を佩き、髮を捌き跣足で立つた。帝は自らその像を寫したが、それは太宗皇帝の時に寫した者と同じ相貌であつた。

又西王母を見たいと望んだから靈素は唯小い御符一つを焚いたゞけで、王母は諸玉女を率ゐ雲に乘つて降つて來た。帝は香を焚いて再拜した。王母は、

『東華帝君久しくお目にかゝりませんでした』と挨拶をした。帝が教を請ふと西王母は

偉大なる一本の足

神丹補益之法を授け、別れ去るに際して、

『姦臣の罪を正し都を長安にお遷しなさい、太祖太宗の政治を法となさい、さもなければ必ず後悔しますよ』と訓へた。

錢型の中に仙宮

靈素は常に一室を鎖して居て、帝が行つても内へは入れなかつた。蔡京が帝に讒言して彼の室内は帝座に象つてゐるから見せないのだと告げた。帝は卽ち京と共に彼の室に入つて見ると、其處には何の裝飾も無く白壁と明窓と卓子椅子が二脚あるばかりだつた。京は恐懼してその罪を謝した。靈素は何を蔡京が謝まるのかと帝に問ふたから、その理由を打明けた。彼は笑つて壁上を指すから其處を見ると、金殿玉樓が錢の如く小く現れてゐた。

十二の方士林靈素を殺さんとす

後、太子が彼は妖術だと奏した。

『陛下若しお信じにならぬならば諸法師に仰せ付けて彼の邪法を破り、罪を明かにしてからお殺し下さい』といつた當時法術を善くするものが十二人あつた。帝彼等を召して凝神殿で法を試みしめ、太子諸王群臣に見せた。

靈素は一口の水を噴いて五色の雲を起した。其の雲の中に金龍、獅子、仙鶴が居て殿前に躍つた。十二人奏して曰く

『これは皆紙で造つた物でございます、私等が大神呪を誦して元の紙に返してお目にかけます』と一齊に呪文を唱へて念じた。ところが龍や鶴は愈益その數を增すばかりであつた。

十二方士皆敵せず

『負だ、外に何か術はないか』と帝にいはれて十二人は、

『水を祈つて沸立たせませう』と申出た。然し靈素が水の盆を一吹き吹くと水は忽ち氷となつた。今度は靈素が、

『炭を聚めて火洞を作り、私が先づ入りますから十二人の者も後に跟いて來るやうにして下さい』と進んで火洞に入つたが衣は少しも焦げなかつた。十二人の連中は地に伏し泣いて赦を乞うた。帝は怒つて彼等の面に刺青して開封府に流した。

靈素は朝政の日に非なるを見て、密かに上疏して曰く、

『蔡京は鬼の頭領であるのに重任を委ね、童貫は國賊であるのに兵權を與へ、既に彗星が變を示したのに帝は德を修めて之を禳ふこともせず、太乙が宮を離るれども帝は善に遷つて之を避ることもしない、運命は既に免るべくもない、然し臣は古き約ありて行か

帝を見限る

ねばならぬ、陛下自愛せよ』

帝は彼に暇をやらなかつた。然し靈素は門人を喚び、今まで帝から賜はつたものを一々類別整頓して一室に封藏し、密かに國門を出て去つた。そこで帝は觀を溫州に賜うた。

或日靈素は弟子の張如晦に向ひ、

『この塵の世は久しく戀々として居るべきところでない、況んや大禍がこの世に降り來たらうとしてゐる、わしももはや去んで了はう、又他日再會しようぞ』といひ訖ると端坐して化した。

遺命して、墓の穴を五尺多く深く掘れ、龜蛇が見えたら棺を下せ、それから五色の氣が立昇つたら土を被せないで、皆急いで百歩だけ離れよとあつたから、弟子どもが其の言に從つて棺を下すと、忽ち山崩れ石裂けて墓の在り所も判らなくなつた。

太子位に即いて(高宗)人をやつて彼の墓を掘らせること三日だつたが見つからなかつた。そして亂石縱横し黑風雷雨暴れ狂ひ、顏突合せても互に見分けられぬ程だつた。使が還つて此旨を奏したので、帝も始めて悔いて靈素を通眞達靈眞人に封じ、祠を天慶觀に立てた。

筆の管に祕めた奇蹟

顏筆仙

宋の寶慶年間、顏は落魄してゐるうち仙人から法を授かり、其れ以來、高郵地方で筆を賣つて生活をしたが、一日に筆は十本だけしか賣らないと定めてあつた。或る高官が酒を馳走した、顏は返禮に筆を贈つた、高官は氣の毒がつて返させようとしたが、其室から持出さうとすれば、筆が重くなつて動かせなかつた。顏の賣る筆は管を割れは中に詩が入つてゐて、破毀の年月日、其人の氏名、禍福吉凶が書いてあつた、其が皆中るので評判となつて、筆仙の名を取つたのである。

九十七歳の時、葦を庭に積み上げ其上に坐つて自ら火をつけた。どん〳〵焰がもえあがると、火雲に乘じて筆仙は昇天した。

賣　薑　翁

口中の薑が金に化す

衡州の街に薑を賣つて行く爺があつた。三十年來同じ顏つきをしてゐた。或る茶店で一道士と一緒に腰掛けてゐるうち、道士が爺を憐れがつて黃白之術（金銀を製する仙法）を授けようかといふと、爺は頭を振つて、自分の荷籠の薑を一個口に入れ、ぺつと吐き出すと純金に化つてゐた。

道士と顏見合せて一笑した、此後薑賣の爺さんは見えなくなつた。

講堂にあばれ込む

騾鞭客

茅山の黃尊師は、天尊殿の建立を思ひ立つてゐたが、法德の聞え高く日々の講說に聽講者が非常に多かつた。或る日、講堂に飛込んだのは色の黑い麤野な男で、騾鞭（騾馬使ひの持つ鞭）を腰に挿してゐた、荒々しい語調で、

『道士々々、おい貴樣は睡つてるんか、一體多勢を集めて何にするんだ。深山に往つて修行することはせんで、毎日何をほざいてるんぢや。』

滿堂の聽講者は驚き且つ怖れて、誰も止めに出る者も無い。黃道士もうつかり相手には爲れない、先づなだむるの外なしと高座を下つて、謙遜に、鄭寧に應接したので、其の男もおとなしく、

鍋釜を集めて銀と爲す

『神殿が建てたいッていふが、それャつまり幾何要るんだ。』

『五千貫。』

『なんだ、それンぽッちか、さア何でもかまはン、釜でも鍋でも、金物を掻き集めて來い。』

何を言ふのか分らぬが、逆らつては可かぬと思ひ、寺からは樣々の古金物を寄せ集めて、此の男の前に積みあげた。凡そ八九百斤もあつたらう。すると此の馬子は地を掘らせて爐をこしらへ、其の舊鐵を銷して、懷から丸藥を二粒取出して、其の銷けた中に入れて攪き雜ぜるのであつた。少時して火を除けると爐の中には立派な銀が出來上つてゐた。

道士も馬方に對して顏色なし

『此れで一萬貫以上ある、普請にや澤山だ、說敎なんか罷めッちまへ。』

黃道士は徒弟と共に禮を述べ、何か欲する所は無いかと尋ねたが、彼は笑つて門を出て去つた。其後十數年を經て、黃道士が詔命に依り上京する途中、此の騾鞭を腰に挿し

た男が、驢馬に騎つた老人に跟いて行くのに遇つたが、黄が拜禮しようとする手を搖つて驢上の人を指しては黄に叩頭をするから、黄も目禮だけに止めたが、老人は髮こそ眞白だが顏は十四五歳の少女の様であつた。

傘の昇天

通稱鐵脚仙人

王　處　一（寧海東牟の人）

王處一は號を玉陽といふ、大定八年（元代）重陽祖師に遇うて全眞庵で弟子となつた。其の母も重陽の弟子となつて玄靜山人といふ。處一は獨り鐵查山にゐた。重陽は弟子の丹陽ともと共に龍泉に赴いたが、酷く暑い日盛であつた。重陽がさしてゐた傘が忽ち空中に飛び騰つて去つた。其傘が夕方に處一の庵の前に墮ちた、傘に重陽の標識が書いてあつたので其れと判つたのである、龍泉は查山と二百里も隔たつてゐる。

處一は雲光洞に隱れてゐたが、聳え立つた崖の上に足をつまだてて立ち、數日間も其のまゝにしてゐることがあつた。人は鐵脚仙人などゝ呼んだ。

金の世宗から度々都に召されて信仰を受け、元妃は道經一藏（道教の經典類一切で四五千卷ある）を玉虛觀に寄附した。玉虛觀の水洞の前に大石が斜に數丈出て居り、其下を通るのを人が懼れるので大石を取除けようと掛つたが、數十の石工が幾日も費して纔に其の一少部分を切つたに過ぎぬ。處一は見て笑つた。躬、其處に行つて鎚を取つて唯三擊した。百雷一時に震ふが如く、其大石が全部碎け散つた。其の翌年の四月、忽ち『群仙已に我と約あり』と言つて、沐浴し冠帶を新にして香を焚き、十方を禮拜して後、正坐したまま逝いた。

群仙との約に從ふ

水に投じて隱る

張　景　和

張景和は異人に術を授かつて未來の事をいふのに善く當つた。常に鐵冠を戴いて居たので鐵冠道人と呼ばれた。明の太祖が兵を起して滁陽に居るとき、之に謁して早く其の天下の主たるべきことを知つて、爾後、其幕下に在つて種々の豫見を爲して功があつた。天下一統の後、南京に在ること數年であつたが、ある日突然水に投じて死んだ。帝は其屍を求めさせられたがつひに獲なかつた、其後に至りて、童關（陝西省關中道）の守吏より何月何日、鐵冠道人が杖をついて關を出たといふ報告があつた、恰も其日が入水の日に當るの